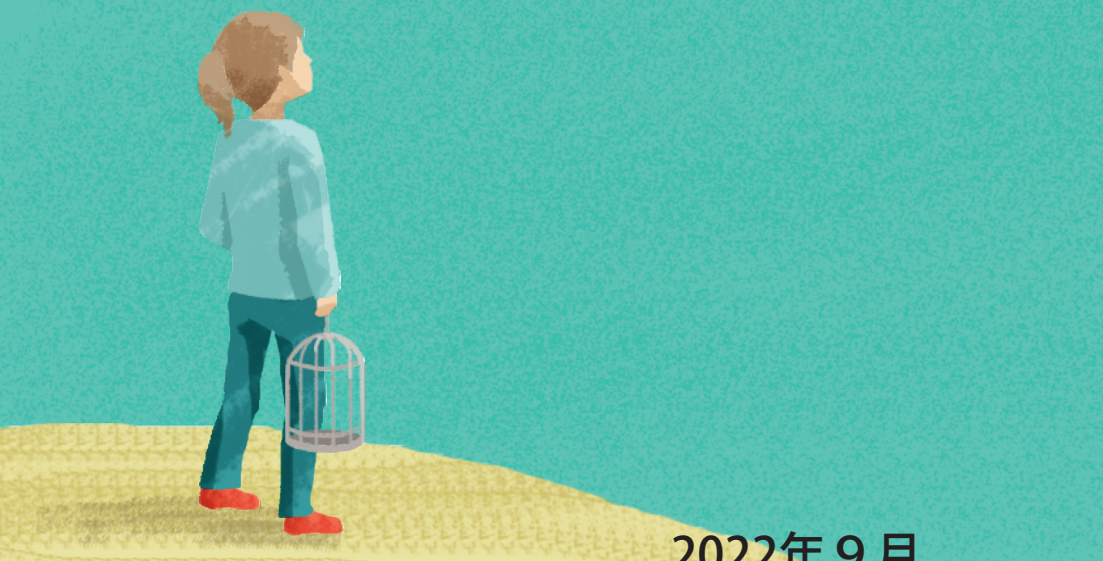
ISSN 1880-5035

令和３年度国際子ども図書館

児童文学連続講座講義録

今を生きる ヤングアダルトへ



2022年９月

国立国会図書館 国際子ども図書館

『令和 3 年度児童文学連続講座講義録』の刊行に際して

国際子ども図書館では、国立の児童書専門図書館として、児童サービスに従事している図書館員等の方々を対象に、国内外の児童書･児童文学に関する幅広い知識のかん養に資するため、平成 16 年度からほぼ毎年度、「児童文学連続講座」を開講しています。令和 2 年度までの過去 16 回の連続講座では、初回テーマ「ファンタジーの誕生と発展」を始めとして、児童文学に関わる多様なテーマを取り上げてきました。詳しくは、次のURLをご参照ください（https://www.kodomo.go.jp/about/publications/outline/index.html）。

令和 3 年度の児童文学連続講座は、「今を生きるヤングアダルトへ」と題し、令和 3 年 11 月 1 日から令和 4 年 1 月 11 日までの動画配信形式で実施しました。企画に当たっては、平成 31 年 4 月から令和 4 年 3 月まで客員調査員を委嘱していた白井澄子先生（元・白百合女子大学教授）に監修をお願いしました。若者が文学に親しむ意義を考えるという大局的な視点から、具体的な作品の考察、作家と作品の関係、翻訳文学のあり方まで、幅広く扱いました。なお、当館からは「児童書に関するレファレンスサービス」と題して、国立国会図書館のデータベースの概要や国際子ども図書館のレファレンス事例について、特にストーリー・レファレンスに焦点を当ててご紹介しました。

本書は、各講師の語り口をそのままに記録した講義録です。各講義録には、講義で使用したレジュメと、講義で紹介された資料のリストを併せて収録しました。様々なご事情から受講することができなかった方、受講した内容を再確認して研究を深めたい方など多くの方々に、本講義録をご活用いただければ幸いです。今回の連続講座が、今を生きるヤングアダルトへ本を手渡す際の一助となることを願っています。

末尾ながら、監修及び講師をお引き受けくださった白井澄子先生、そして講師をお引き受けくださった三辺律子先生、苫野一徳先生、ひこ・田中先生に厚く御礼申し上げます。

令和 4 年 9 月

国立国会図書館国際子ども図書館長
三　浦　　良　文

凡例

○　本書は、令和 3 年 11 月 1 日から令和 4 年 1 月 11 日までの動画配信形式で開催した「国際子ども図書館児童文学連続講座」（総合テーマ：今を生きるヤングアダルトへ）を基に編集した講義録です。

○　各講義の「レジュメ」および「紹介資料リスト」を巻末に掲載しました。それぞれ刊行に際し、必要に応じて改訂を行っていますので、当館ホームページに掲載されたものとは異なる場合があります。

○　「紹介資料リスト」は、原則として国立国会図書館の所蔵資料の書誌情報を掲載しています。国立国会図書館に所蔵のない資料については、「国立国会図書館サーチ」等の書誌情報を参照しました。

○　「紹介資料リスト」の「請求記号」の項には、国立国会図書館で付与している請求記号を記載しました。

○　「紹介資料リスト」および脚注に記載の資料に関する情報は、令和 4 年 7 月 1 日現在のものです。

○　本講義録におけるインターネット情報の最終アクセス日は、令和 4 年 7 月 1 日です。

○　講義等の記録・配布資料等における意見にわたる部分は、講師等の個人的な見解であり、国立国会図書館の見解ではありません。

令和 3 年度国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座講義録

「今を生きるヤングアダルトへ」

目　次

『令和 3 年度児童文学連続講座講義録』の刊行に際して
三浦　良文 …… 1

凡例 …… 2

講座概要 …… 4

講師略歴 …… 5

はじめに　白井　澄子 …… 7

“ほんとう”の世界へ
～文学の魅力と、人生に役立つ読書法～
苫野　一徳 …… 9

現代社会を生きぬく
～ヤングアダルト文学は何をどう映し出す？～
白井　澄子 …… 23

ヤングアダルト文学の後先　ひこ・田中 …… 41

日本の翻訳ヤングアダルト文学の現在　三辺　律子 …… 61

児童書に関するレファレンスサービス　福田　由香 …… 87

巻末参考資料（レジュメ・紹介資料リスト） …… 101

講　座　概　要

令和 3 年度国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座

総合テーマ「今を生きるヤングアダルトへ」

○動画配信期間　令和 3 年 11 月 1 日（月）～令和 4 年 1 月 11 日（火）

内容	講師
講義 1 “ほんとう”の世界へ ～文学の魅力と、人生に役立つ読書法～	苫野　一徳 （熊本大学准教授）
講義 2 現代社会を生きぬく ～ヤングアダルト文学は何をどう映し出す？～	白井　澄子 （元・白百合女子大学教授、 国立国会図書館客員調査員）
講義 3 ヤングアダルト文学の後先	ひこ・田中 （作家）
講義 4 日本の翻訳ヤングアダルト文学の現在	三辺　律子 （翻訳家）
講義 5 児童書に関するレファレンスサービス	福田　由香 （国立国会図書館国際子ども図書館 資料情報課主査兼情報サービス係長）

※ Cisco Webex Events を用いた動画配信形式で開催し、参加者は、希望する講義を選択して視聴しました。

※講師の肩書きは、連続講座当時のものです。

講　師　略　歴
（五十音順、敬称略）

三辺　律子（さんべ　りつこ）

翻訳家。聖心女子大学英語英文学科卒業、白百合女子大学大学院児童文学学科修士課程修了。白百合女子大学、東京女子大等非常勤講師。海外文学を紹介するフリーペーパー『BOOKMARK』執筆・編集担当。

著書　『翻訳者による海外文学ブックガイドBOOKMARK』（共著，CCCメディアハウス，2019）

論文　「「ゲド戦記」の変遷（特集アーシュラ・K・ル＝グウィンの世界：1929-2018）」（『ユリイカ』50（6），2018）

翻訳書　『龍のすむ家』シリーズ（竹書房，2003-2016）、『ジャングル・ブック』（岩波書店，2015）、『ロビン・フッドの愉快な冒険』（光文社古典新訳文庫，2019）、『ダリウスは今日も生きづらい』（集英社，2020）等

白井　澄子（しらい　すみこ）

青山学院大学文学部卒業、ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）図書館情報学科修士課程修了。白百合女子大学人間総合学部児童文化学科教授を経て、2021年より同大学非常勤講師。主な研究分野は英語圏、特にカナダの児童文学。2014年から2016年まで日本イギリス児童文学会会長。2019年4月から2022年3月まで国立国会図書館国際子ども図書館客員調査員。

著書　『赤毛のアン』（シリーズもっと知りたい名作の世界；10）（ミネルヴァ書房，共著，2008）、『英米児童文化55のキーワード』（世界文化シリーズ；別巻1）（ミネルヴァ書房，共著，2013）等

論文　「ヤングアダルト文学のゆくえ―英米のYA文学を概観して（特集YA（ヤングアダルト）文学）」（『白百合児童文化』17，2008.3所収）等

苫野　一徳（とまの　いっとく）

早稲田大学大学院教育学研究科修士課程・博士課程修了、博士（教育学）。早稲田大学教育学部助手、日本学術振興会特別研究員を経て熊本大学大学院教育学研究科・教育学部准教授。主な研究分野は哲学、教育学。

著書　『勉強するのは何のため？：僕らの「答え」のつくり方』（日本評論社，2013）、『はじめての哲学的思考』（ちくまプリマー新書；276）（筑摩書房，2017）、『学問としての教育学』（日本評論社，2022）、『愛』（講談社現代新書）（講談社，2019）、『「自由」はいかに可能か：社会構想のための哲学』（NHKブックス）（NHK出版，2014）、『未来のきみを変える読書術：なぜ本を読むのか？』（筑摩書房，2021）、『社会契約論　苫野一徳特別授業　読書の学校』（別冊NHK100分de名著）（NHK出版，2020）等

ひこ・田中（ひこ　たなか）

児童文学作家。1991年、『お引越し』で第1回椋鳩十児童文学賞を受賞。1997年、『ごめん』で第44回産経児童出版文化賞JR賞を、2017年『なりたて中学生初級編・中級編・上級編』で第57回日本児童文学者協会賞を受賞。書評サイト「児童文学書評」を主宰。

著書　『なりたて中学生初級編・中級編・上級編』（講談社，2015-2016）、『ぼくは本を読んでいる。』（講談社，2019）、『今すぐ読みたい!10代のためのYAブックガイド150!』（金原瑞人，ひこ・田中監修，ポプラ社，2015）、『13歳からの絵本ガイドYAのための100冊』（金原瑞人，ひこ・田中監修，西村書店東京出版部，2018）等

翻訳書　『にんじんようちえん』（ポプラ社，2022）

はじめに

白井　澄子

みなさま、こんにちは。客員調査員の白井澄子と申します。児童文学連続講座にご参加いただき、ありがとうございます。

最初に、簡単に自己紹介させていただきます。私は白百合女子大学児童文化学科に 2021 年 3 月まで勤めていまして、英語圏・カナダの児童文学などを担当していました。特に、ヤングアダルト文学には、以前から非常に強い関心を持っていました。そのようなこともあり、こちらで児童文学連続講座の監修をさせていただくことになりました。

さて、本年度の児童文学連続講座につきましても、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、オンラインで開催することになりました。みなさまと直接お目にかかれないのは残念ではありますが、遠くの方にもご参加いただけることはうれしく思っています。

今回も昨年度に引き続き、ヤングアダルトをキーワードに準備を進めてまいりました。今回のテーマは、「今を生きるヤングアダルトへ」として、私を含め 4 名の講師と、国際子ども図書館の職員、合わせて 5 名による講義を用意しました。

各講義について、簡単にご紹介します。講義 1 では、熊本大学の苫野一徳先生に、「“ほんとう”の世界へ　～文学の魅力と、人生に役立つ読書法～」という題でお話をいただきます。苫野先生は、哲学と教育学を専門にご活躍されています。紹介資料リストにも、先生のご著書が多く挙げられているかと思いますので、ご参考になさってください。とても分かりやすく、文学の魅力や意義について語ってくださいます。

講義 2 では、私が「現代社会を生きぬく　～ヤングアダルト文学は何をどう映し出す？～」と題して話をいたします。若者を取り巻く状況について、ヤングアダルト文学がいかにそれを反映しているかということを、3 つに分けてお話ししたいと思っています。まずは、差別。次に、毒になる親。そして、今話題のヤングケアラー。これらをテーマにして考えていきたいと思います。

講義 3 では、作家で文学者のひこ・田中先生に、「ヤングアダルト文学の後先」という題でお話をいただきます。ひこ・田中先生は、作家としては『お引越し』（福武書店, 1990）などでみなさまもご存じかと思いますが、最近では『ぼくは本を読んでいる。』（講談社, 2019）などがあり、いろいろなかたちで作家活動や研究活動を続けていらっしゃいます。講義では、ヤングアダルト文学の誕生から、現代作品に至る流れや作品の特徴のほか、本以外のメディアにも触れていただきます。

講義 4 では、翻訳家の三辺律子先生に、「日本の翻訳ヤングアダルト文学の現在」という題でお話をいただきます。三辺先生は、ヤングアダルト文学をたくさん訳していらっしゃるので、ご存じの方も多いと思います。『サイモン vs 人類平等化計画』（岩波書店, 2017）をはじめとして、現代を生きている若者たちを描いた作品が多くあります。また、絵本の翻訳もあり、幅広く活躍されています。講義では、LGBTQ、BLM（ブラック・ライブズ・マター）、フェミニズムなど、いま旬のお話をしていただきます。

最後に講義5では、国際子ども図書館職員の福田由香さんから、「児童書に関するレファレンスサービス」についてお話をいただきます。レファレンスサービスの内容は多岐にわたりますが、これを上手に活かすと、いろいろなことを知ることができたり、自分で見つけられなかった本を見つけることができたりします。今回は、タイトルだけしか記憶になかったり、表紙の絵柄しか記憶になかったりした場合にでも本を探し出せるノウハウをお話ししていただきます。

以上、簡単な紹介になりましたが、それぞれの講義はとても興味深く、意義のあるものになっていると思いますので、楽しみにお聞きください。どうぞよろしくお願いいたします。

“ほんとう”の世界へ

～文学の魅力と、人生に役立つ読書法～

苫野　一徳

はじめに
Ⅰ　文学と私
　1　なぜ生きているんだろう
　2　便所飯のパイオニア、過敏性腸症候群と躁鬱病
　3　新たな神、シェイクスピアとゲーテ
　4「人類愛」の啓示と、哲学との出会い
Ⅱ　若者に伝えたい、文学の魅力と本質
　1 “ほんとう”について
　2　芸術とは何か？
　3　文学とは何か？
　4　言葉とは何か？
　5　哲学と文学
　6　まとめ
Ⅲ　若者に伝えたい、読書の意義と方法
　1　読書の意義
　　(1) とにかくたくさん読む
　　(2) 構造的思考を身につける
　　(3) 言葉をためる
　　(4) 読書もまた豊かな経験
　2　読書の方法
　　(1) 投網漁法から一本釣り漁法へ
　　(2) 1 冊まるまるレジュメを作る
　　(3) 信念検証型の読書
　　(4) 市民としての読書
おわりに

誰もが文学を必要とするわけではありません。でも、文学との出会いは、私たちに、人は「ただ生きる」のではなく、何か“ほんとう”を求め、それに「憧れつつ生きる」ことの喜びを与えてくれます。本講義では、そんな文学の魅力に加え、文学に限らず、私たちの人生を豊かにしてくれる読書法についてお話ししたいと思います。

はじめに

みなさん、こんにちは。苫野と申します。どうぞよろしくお願いします。今日は、「“ほんとう”の世界へ　～文学の魅力と、人生に役立つ読書法～」ということでお話をさせていただきたいと思います。

最初に、少しだけ自己紹介をします。私は哲学者、教育学者です。哲学と聞くと、いったい何をやっているのかよく分からない。意味のない、役に立たないことを難しい言葉で考えているものというイメージがあるかもしれません。私の考えでは、全くそうではなく、哲学というのはとても役に立つ、大事なものだということを、いつも言っています。

哲学とは何か。私は「本質洞察に基づく原理の提示」という言い方をしています。物事の本質、一番大事な根本の根本を、徹底的に考え抜いて、解き明かす。それによって、そのことにまつわるさまざまな問題を、どうすれば解き明かすことができるのか、しっかりと提示していく。それが哲学の本質であり、意義です。

いくつか哲学の著作を用意しました（紹介資料リスト 1～7）。例えば、『「自由」はいかに可能か　社会構想のための哲学』（紹介資料リスト 1）では、文字通り「自由」とはいったい何なのか、どうすれば我々は自由に生きられるのか。あるいは、よい社会とは何なのかについて問うています。こうした問いに答えぬくのが哲学です。もちろん、絶対に正しい本質があるわけではありませんが、なるほどその考え方は本質的だと、できるだけ誰もがうなってしまうような考え方を提示していくのが哲学であり、哲学的な思考というのは、2500 年の長きにわたって、人類の知の遺産としてずっと蓄積されてきたものなのです。

これは、物事の本質が分からないと、私たちはそれについてどう考えていけばよいか分からないということでもあります。『愛』（紹介資料リスト 6）という本も書きましたが、愛とはいったい何なのかということが分かれば、どうすれば私たちは豊かな愛を手に入れることができるかも分かる。幸せの本質が分かれば、どうすれば幸せを手に入れることができるかが分かる。逆に言うと、本質が分からないと、私たちの思考というのは右往左往してしまうのです。

こうした哲学をベースにして、教育学者としても、さまざまな提言や研究をしています（紹介資料リスト 8～12）。『どのような教育が「よい」教育か』（紹介資料リスト 8）では、まさに教育の本質を解明することを底にして、では「よい」教育とはいったい何なのだろう、そのためにこれからの教育をどのように作っていき、実践していけばよいのだろうということを、さまざまに提言・提案しています。とにかく、物事の本質がしっかりと洞察されなければ、私たちはそれにまつわる問題をどうやって考えていけばよいかが分からなくなってしまう。だから、哲学はとても大事なものなのだということを、いつもお話ししております。

先日、『未来のきみを変える読書術　なぜ本を読むのか？』（紹介資料リスト 13）という本を出しました。これは中高生向けの本ですが、手軽に読める中高生向けのノンフィクションのシリーズというのはあまりありませんでした。筑摩書房が「ちくまQブックス」というシリーズを作りまして、その創刊の 1 つとして出すことになりました。今日はこの本からも、本の読み方について少しご紹介できたらと思っています。

では、今日のお話に進みます。これまであまり話してこなかったのですが、今日はぜひ、文学について存分にお話ししたいと思っています。

まずは、文学と私について、少し個人的な話になりますが、お話ししていきます。

Ⅰ　文学と私

私は哲学者ですが、子どものときから随分哲学的な少年だったのだろうと、振り返って思うのです。『子どもの頃から哲学者　世界一おもしろい､哲学を使った「絶望からの脱出」！』（紹介資料リスト 2）にも詳しく書きましたが、これは私の半自伝的な本であると同時に、哲学の入門書でもあるような本です。これからお話しするように、いろいろなことをやらかしてきた半生だったのですが､哲学のおかげで､さまざまな自分の問題を克服することができたのです。その過程で､文学にのめり込んでいく時期もありました。本書では､哲学の使い方や役立て方､人生を絶望から救い出してくれるような哲学の考え方といったものが学べるようにもなっています。

1　なぜ生きているんだろう

私は小学校 1 年生の頃から､「なぜ生きているんだろう」「なぜ生まれてきてしまったんだろう」ということを、幼少期にいろいろあったこともあって、かなり本気で悩んでいました。流行のゲームやマンガに興味もなく、ずっとこのことばかり考えていたのです。

そうすると、友達がいなくなります。何を言っているのだという顔をされ、孤独感を味わっていた時期がとても長かったです。周りの友達はゲームやマンガばかりなのですが、全然興味を持てませんでした。

唯一興味を持ったのが、手塚治虫（1926-1989）です。特に､『火の鳥』と『ブッダ』には､小学校 2～3 年生の頃にのめり込みました。まさに、生きるとは何かということを徹底的に問い続けた作品で､とてもハマりましたが､そうするとますます友達がいなくなってしまいます。

たまたま同じ時期に、親の知り合いから、小学館の『少年少女世界名作文学全集』という 50 巻ほどのシリーズをもらったのです。とても装丁がかっこいいし、読み始めてみたらとても面白くて、あっという間に物語の世界に入り込み、ずっと読んでいました。これが私の文学との出会いだったのかなと思います。どうして文学・物語というものが私をこんなにひきつけたのかというのは、長らく考えていたことですが、やがて哲学者になって、その理由が見えてきました。そのことは後でお話ししたいと思います。

2　便所飯のパイオニア、過敏性腸症候群と躁鬱病

孤独感を 1 人で抱えていると、どんどん意固地にもなっていきます。逆に流行のゲームやマンガを絶対にやらないぞといって、ますます孤立していくのです。

中学 2 年生の頃、便所飯もするようになりました。10 年ほど前[1]に便所飯というのが話題にもなりましたが、私からすると、何を今さら騒いでいるのだ、私こそ便所飯のパイオニアだということを、その時は言っていました。

そんな時期が長かったり、自分の好きなものが人に理解してもらえず、流行のものを自分は好きになれないということも理由だったと思います。たくさんの神経症や精神の病を経験しました。過敏性腸症候群も患いましたが、ものごころついた頃から、お腹を一日中ずっとくだしているのです。トイレに行けないと思うと、もうくだしてしまう。電車にもバスにも乗れず、教室に座っていることもできない。今はずいぶんよくなりましたが、とても苦しかったです。

もう 1 つつらかったのは、18 歳くらいから始まった躁鬱（そううつ）病です。8 年くらい続きました。躁

1　集英社『情報・知識 imidas 2018』（ジャパンナレッジ内で提供）では「2009 年 7 月には新聞にまで取り上げられるほどになった」と説明されている。

状態と鬱状態を、1 年の間に両方とも経験するのです。自分もしんどかったですが、周りの人にとても迷惑をかけてしまいました。

3　新たな神、シェイクスピアとゲーテ

心にいろいろなものを抱えている若者というのは、だんだんと文学にのめり込んでいくことがあります。そんな時に私が出会ったのが、シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）とゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）だったのです。あっという間にひかれてしまいました。躁状態のときに読んだのがシェイクスピア、鬱状態のときに読んだのがゲーテでしたが、どちらも私にとって、手塚治虫に続く新しい神になっていました。シェイクスピアを読んでいるときは躁状態だったので、誰彼構わず恋をし、ゲーテを読んでいるときは鬱状態ですから、死にたいなどと思う時期がずっと続きました。

そうすると、自分も作品を書きたいと思うのです。芸術も文学もそうですが、作品の威力に撃たれると、面白いことに 2 パターンくらいの反応があると思います。1 つは、自分もそんな作品を書けるようになりたいと思うパターン。もう 1 つは、なぜこの作品に自分がひかれるのかを論じたくなるパターン。つまり、自分も創作したくなるか、批評をしたくなるかの 2 パターンがあるような気がします。もちろん、どちらもしたくなる場合もあるかと思いますが、私は圧倒的に前者でした。それで小説をずいぶんと書きました。今となってはお恥ずかしい話なのですが……。青春三部作、後期青春三部作といった長編も書きましたし、短編もたくさん書きましたが、ご多聞に漏れず、小説家にはなれずに大きな挫折をしていくことになります。

4 「人類愛」の啓示と、哲学との出会い

そんな中で、とても激しい躁状態を経験します。これもお恥ずかしい話なのですが、「人類愛」という啓示が下りてくるのです。ある時突然、本当に目の前に見えたのです。かつて存在した人類、いま存在している人類、これから存在していく人類、その全てが結ばれ合っている状態、つまり愛し合っている状態。この中の誰一人欠けてしまったとしても、人類は存在し得ないのだという絶対的な確信のような啓示……それは躁状態が見せた幻影だったのですけど、あまりにもありありとその啓示がやってきたので、そしてそれがあまりにも強烈だったので、とても幸せな状態になったのです。今まで自分は 1 人であるとか、誰にも理解されない、誰も愛してくれないし、誰も認めてくれないという思いがありましたが、違うのだ、人類は皆、もともと愛し合っているのだという思いになったのです。

ところが、また鬱状態がやってきて、しかもその時に哲学に出会うことになります。私の師匠である竹田青嗣という哲学者がいるのですが、彼の『人間的自由の条件　ヘーゲルとポストモダン思想』（講談社, 2004）という本を読んで、打ちのめされてしまいました。「人類愛」という、自分の中で揺るぐことなく確信していた世界観、しかもそのおかげでなんとか自分を立て直すことができていたものが、ズタボロに崩壊してしまうのです。これは自分もろとも、世界が壊れるという経験でした。なんとか自分を立て直すものとして、絶対の真理だとすら思っていた世界が、音を立てて崩れていく。本当につらい経験でした。

ただ同時に、全てが壊れた後、私の中に哲学が残ったのです。私をズタボロに壊してしまうほどの哲学の威力というものに撃たれて、もしかしたら哲学でもう一度自分を立て直せるかもしれないと思い、一歩一歩、哲学をやるようになり、今に至るのです。

哲学で、欲望相関性の原理という考え方があります。私たちが見ている世界というのは、そのまま客観的な世界を認識しているのではなく、常に欲望に相関的に世界を見ているという原

理です。例えば、「喉が渇いた」という欲望に応じて、水が飲み水として認識されます。「火を消したい」という欲望があれば、火を消す道具として認識されますし、敵が来て身を守ろうと思ったときは、武器として認識されます。何か絶対に客観的な意味や価値というものがこの世界にあるわけではなく、常に欲望に相関的に認識されているのです。

この原理を理解したときに、「人類愛」が壊れました。自分の「人類愛」というのは実は、今までの長い間、抱いていた孤独を埋めたいという欲望の反動だったのだということに、強く納得してしまったのです。誰にも愛されない、誰にも認められない私。でもそんな世界は間違っている。本当は人類は皆、愛し合っているはずなのだと信じたかった。そういった欲望が、私に「人類愛」というありありとしたビジョンを、ちょうど躁状態だったこともあり、見せてしまったのです。そのことに納得し、自分の抱いていた世界が壊れてしまった。でも、哲学でもう一度立て直そうということになったのです。

Ⅱ　若者に伝えたい、文学の魅力と本質

その過程で、私はたくさんの文学に出会い、自分を形成してきました。では、文学にはいったい、どんな魅力があるのか。今なら言葉にできるので、お話ししていきます。

1　“ほんとう”について

まずは、以下のテーゼを提案したいと思います。

文学は、私たちに世界や人間の“ほんとう”（ありうべき、あるいはあれかしと願う“ほんとう”の世界）を知らしめる。

Ex. ほんとうの恋、ほんとうの冒険、ほんとうの幸せ、ほんとうの生き方……etc.

“ほんとう”というのは、何か絶対的に正しい世界の真理ということではありません。「ああ、これこそ“ほんとう”の恋／冒険／幸せ／生き方だな」というように、何か私たちにしみじみと思わせる。それが文学の意義であり、本質であると私は思います。優れた文学作品は、私たちに“ほんとう”を知らしめる。特に、先ほどの私の話にもつながりますが、（なんらかの満たされなさを抱えた）若い頃、私たちは、そのような「ほんとうの世界」にえも言われぬ力で引き寄せられることがあると思うのです。

もちろん、そういうことには興味がないという人もたくさんいると思いますが、若い時というのは、自分が何者なのかよく分からないし、どうやって生きていけばよいのかも分からない。そんな時に、何か憧れの対象を見つけたいというエネルギーが、若い人には満ちていると思います。それを表立って出すのは少し恥ずかしいと思うことがあったとしても、何かそういうものを求めている。特に、なんらかの満たされなさを抱えた若い人というのは、「ほんとうの世界」に憧れを抱くということが結構あるのではないでしょうか。なぜ自分は今こういう状況なのだろう、なぜこんな風に生まれてきてしまったのだろうという思いが、そうじゃなければよかったのに、もっといい世界はないのかなという触手を伸ばしている。そこに文学が引っかかってくれるのです。

そのため、そのような体験は、私たちが「ただ生きる」のではなく、“ほんとう”を求め、それに「憧れつつ生きる」ことができることを教えてくれます。その意味で、文学というのは、私たちの人生を本当に豊かにしてくれるものだと思います。私たちは単に生命を消費しているだけではなくて、豊かな実存の世界を生きている。そのことを、これでもかというくらい味わ

わせてくれるのが、文学であると私は思っています。

2　芸術とは何か？

・ハイデッガーの言葉

このことについて、哲学的な観点からお話ししてみます。ハイデッガー（Martin Heidegger, 1889-1976）は 20 世紀を代表する哲学者ですが、彼の著作に『芸術作品の根源』（紹介資料リスト 15）というものがあります。この中に、「芸術とは真理の生成……である」[2] という言葉があります。ハイデッガーの「真理」という言葉もいろいろと厄介な問題を含んでいるのですが、先ほど言った“ほんとう”として捉え直したら、とても良い言葉になるのではないかと思います。「芸術というのは、“ほんとう”を生み出す」。“ほんとう”にもいろいろなものがあるので、絶対に正しい唯一の真理があるわけではありません。ありうべき、あるいはあれかしと願う“ほんとう”の世界を作り出す。これが芸術の本質ではないでしょうか。

ハイデッガーは、ゴッホ（Vincent van Gogh, 1853-1890）の「靴」の絵[3] を例にして説明しています。「ヴァン・ゴッホの絵画は、道具……が真理においてそれである ものの開示である」[4]。この絵を見たときに、これこそ農婦の“ほんとう”の生活、姿、靴だなというように感じさせる力。単にスケッチしたのではなくて、農婦の“ほんとう”の生活みたいなものを見出す、そういった力を持っているものを芸術というのだと、ハイデッガーは言っているのです。逆にいうと、“ほんとう”を感じさせないようなものは、芸術とはいえないということでもあります。

つまり、芸術とは、世界や人間の“ほんとう”を知らしめる（開示する）もの。私たちは優れた芸術作品に出会ったときに、このような感嘆の言葉を漏らします。「こんな“ほんとうの世界”があったのか」。「知らなかった！」という場合もあれば、「求めていたのはこれだったのか！」という場合もあります。ここに、芸術の力というものがあると思います。

・ニーチェの言葉

今度は、ニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900）の言葉を紹介します。

> 「善と美とは一つである」と主張するのは、哲学者の品位にふさわしからざることである。さらにそのうえ「真もまた」とつけくわえるなら、その哲学者を殴りとばすべきである。真理は醜い。
>
> 私たちが芸術をもっているのは、私たちが真理で台なしにならないためである。[5]

この世には、これこそが絶対に正しい真理であるから従えというような考え方や、そのように言う権力者が存在しています。それは醜い。絶対に正しい唯一の真理などあるわけがない。私たちは、それぞれの“ほんとう”の生き方を追求し、謳歌（おうか）していく。そういった喜ばしい生というものを謳歌して生きようとニーチェは言うのですが、その生の喜ばしさを味わわせてくれる最大のものが、（文学も含めた）芸術であると言います。「真理で台なしにならないため」というのは、そういうことです。権力者は絶対的な真理に従えと言ってきますが、芸術は「こんな“ほんとうの世界”があったのか」という風に、さまざまな、いわば別の真理を見せてく

2　マルティン・ハイデッガー 著, 関口浩 訳『芸術作品の根源』平凡社, 2002, p.106.
3　Van Gogh Museum ウェブサイトにて閲覧可能。<https://www.vangoghmuseum.nl/en/collection/s0011V1962>
4　前掲注 2, p.42. 挿入注は省略している。
5　原佑 訳（吉沢伝三郎 編）『権力への意志　下』（ちくま学芸文庫　ニーチェ全集　13）筑摩書房, 1993, p.338.

れます。ここにこそ、私たちが唯一の真理に絡め取られることなく、生を謳歌する大きなヒントがあると、ニーチェは言います。

・ヘーゲルの言葉

あるいは、ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831）はこのようなことを言っています。

> 自然美と芸術美は異質のものである。私たちは、自然美についてはこれをただ受け入れるだけである。対して芸術美については、私たちはそこに優れた人間精神を感じ取っているのである。[6]

自然美をただ受け入れるだけというのは、美しい山だなあ、美しい海だなあ、美しい夕焼けだなあというように、受動的になるしかないということです。しかし、芸術美というのは、単に所与として存在しているのではなくて、人間が作り出したものなので、そこに優れた人間精神を必ず感じ取ります。逆にいえば、優れた人間精神を感じ取ることがなければ、私たちはそれを芸術とはいわないということです。

現代アート、例えばレディーメイド（ready-made）[7]の作品なども 20 世紀にはたくさん出てきましたが、それをも私たちが芸術だと思うということは、そのような新たな見方（パースペクティブ）を世界に与えてくれた人間精神の偉大さに、私たちが感動するからそれを芸術というのであって、優れた人間精神を感じ取ることがなければ、私たちはそれを芸術とはいわないのです。

私は、これは大変優れた洞察だと思いますが、いかがでしょうか。

・まとめ

ここで、改めて芸術の本質をまとめてみます。芸術とは、そこに人間精神の偉大さを感じずにはいられない、世界や人間の“ほんとう”を知らしめる（開示する）もの。逆にいえば、単なる技巧、単なる心地よさ、単なる模倣作品、お決まりの感動……そうしたものを、私たちが芸術と呼ぶことはありません。

とはいえ、これは芸術をある種の特別なものにしているわけではありません。何を「芸術」と呼ぶかは、誰か特権的な人が決めるのではなく、長い批評（対話）の歴史を通して少しずつ決まっていき、相互了解されていきます。その本質をたどっていくと、人間精神の偉大さを感じさせ、「こんな“ほんとう”があるんだ」と思わせるものを芸術と呼んでいるということになるのです。そうでなければ、芸術という言葉が存在するはずがありません。

3　文学とは何か？

では、文学の魅力、意義、本質とは何なのかというと、言葉によって世界や人間の“ほんとう”を知らしめるのが、文学という芸術であるといえるでしょう。

その例として、先ほどご紹介したゲーテの『若きウェルテルの悩み』（紹介資料リスト 21）

6　『美学講義』（*Vorlesungen über die Ästhetik*）より著者意訳。
7　小学館『日本大百科全書（ニッポニカ）』（ジャパンナレッジ内で提供）によると、元来は「既製品」を表す普通名詞であるが、現代美術の分野では、作者が自己の制作行為によってつくるのではなく、既成の物品（とくに日用品）をそのまま作品として展示しているようなケースをさす用語として用いられている。

を見てみます。この本は、ゲーテの実体験をもとに書かれた手紙形式の小説です。友人の許婚(いいなずけ)であるロッテという女性に恋をしてしまい、その苦しみの内が友人に語られていきます。最後、主人公は自殺してしまいますが、当時、ヨーロッパで世界的なベストセラーになって、ヨーロッパ中で自殺者が増えてしまうという問題も起こりました。そういった悪魔的な魅力を持った小説ともいえます。シュトゥルム・ウント・ドランク（Sturm und Drang: 疾風怒濤(しっぷうどとう))[8] の、若さたぎる頃に読むと、いろいろな意味で感応、伝染してしまう魅力を持った作品だと思います。

この作品の中に、次のような一節があります。

> 友よ、まったくのところ、私は自分の気持が抑えかねるようなときにも、こうした人たちを見ると胸の擾乱(じょうらん)もしずまるね。この人たちはその狭い境涯を幸福な平穏のうちにすごして、今日から明日へとなんとか凌(しの)いでいって、木の葉が落ちるのを見れば、ああ冬が来るなと思い、そのほかは何も思わないのだ。[9]

「こうした人たち」というのは、貧しい母子のことです。

私はこの一節を読んで、雷に打たれたような気持ちになりました。どういうことかというと、当時私も鬱状態でしたが、これほどうまく鬱の人の気持ちを言い表した言葉はないのです。木の葉が落ちるのを見れば、それだけで人生や世界の終わりを想像します。つまり、何を見ても自己否定につながるのです。でも、その日暮らしの貧しい母子は、純朴に毎日を過ごしながら、木の葉が落ちるのを見れば冬が来るなと思い、そのほかは何も思いません。そういう人たちの存在が、この「私」の慰めになるのです。

欲望相関性というのはそういうことです。その人の欲望、感情、精神状態によって、世界の見え方がまるで変わってしまう。これはどうしようもありません。鬱の人は、何を見ても自己否定につながってしまう。でもそんな時に、そうではない人たちを見ると、自分もそういう状態になり得るのだというかすかな希望が見えてきます。そのことを、こんなにも見事に言い表してくれたのです。

これが文学の魅力の 1 つです。何かよく分からないけれど、「求めていたのはこれだったのか！」と感じさせるのが、文学の力です。「求めていたものにようやく出会えた」という場合もありますが、私の場合、ゲーテがそれだったのです。それまで、よく分からない、まさに胸の擾乱がずっとあった。これをどうかたちにしたらいいか分からない。ただひたすら湧き出る苦しみの泉。そこに道筋を通してくれるのが文学作品です。「こう流していけばよかったのか！」

文学作品は、何なのかよく分からないものを、言葉にして道筋を通してくれます。私はゲーテによって、そのことをまざまざと見せつけられました。

4　言葉とは何か？

言葉を使った芸術が文学ですが、では言葉とは何かということを、哲学的にお話ししたいと思います。

私の師匠でもある竹田青嗣の『言語的思考へ　脱構築と現象学』（紹介資料リスト 22）という、大変優れた本があります。この中で竹田は、言語の本質を 2 つの構造として描き出します。

1 つ目が「一般言語表象」です。これは、言葉の一般的な（辞書的）意味です。「空」とい

8　1760 年代末から 80 年代の初めにかけてドイツで起こった過渡的性格の強い文学運動。（集英社『デジタル版 集英社世界文学大事典』（ジャパンナレッジ内で提供））

9　ゲーテ 作, 竹山道雄 訳『若きウェルテルの悩み　改版』（岩波文庫）岩波書店, 1978, p.22.

えば、私たちの上に広がっているものを指します。「青」といえば、特定の色を指します。

ところが人間は、言葉を単なる数学的な記号として使っているわけではありません。昔、言語を数学的な記号にしてしまえば、この世界を正確に記述できるのではないかという哲学の一派が現れたことがありますが、見事に失敗しました。なぜかというと、言語というのは数学的な記号とは違うからです。

私たちは、言語を使って 2 つ目の構造である「企投的意味」をやり取りするのです。それは、語り手の「意」、つまり言わんとしていることです。例えば、「空は青い」というと、辞書的には空の色を説明しているだけです。ところが、「空は青い」と今、私がつぶやいたときに、無数の「意」が成立し得ます。「空が青いなあ。いい秋晴れだなあ。気持ちがいいなあ」という意味があったかと思えば、「空は青い。でも私の心は暗い」という意味もあり得る。言語的コミュニケーションの中では、言葉が無数の「意」を持つのです。

言語コミュニケーションとは、一般言語表象を媒介にした企投的意味の相互信憑・了解ゲームである。つまり、言葉を通して、相手が何を言わんとしているかを理解し合う。これが言語的コミュニケーションの本質です。このことを明らかにしたのが、この本の意義だったと思います。

『若きウェルテルの悩み』の一節もまさにそうです。木の葉が落ちるという現象に対して、冬が来るなと思う人と、それ以上のものを見て取る人。そういったことが、一節の中に凝縮されている。こうした言葉の使い方に、私たちは芸術性を見出します。単なる記号ではなく、言葉を通して、言わんとしていることをくみ取り、そこに“ほんとう”を見つけ出していく。こういう高度な言葉の使い方をすることで、私たちに“ほんとう”の世界を知らしめる文学。ここに人間精神の偉大さを感じずにはいられません。

吉本隆明（1924-2012）は、このような言い方をしています。「言葉とは指示表出と自己表出の織物である」[10]。指示表出というのが、先ほどの言い方でいうと一般言語表象、つまり辞書的意味といってよいと思います。自己表出が企投的意味、つまり言わんとしていることです。言わんとしていることと、それを伝える媒介としての辞書的意味、これらが織り交ざって、言葉というものが発せられ、言語的コミュニケーションが成り立っているといいます。

その織り方に、芸術性というのがにじみ出るのです。それを利用して、文学作品ができあがります。詩は、指示表出と自己表出をいかに織り込んでいくかということに最も大きなエネルギーを割いていきますが、それと同時に物語を作っていくところに、小説の魅力があるのです。つまり、小説家というのは、「言葉で世界のすべてをつくる」わけです。

その代表的な作家としてすぐに思い浮かぶのは、ドストエフスキー（Fyodor Dostoyevsky, 1821-1881）です。『罪と罰』（紹介資料リスト 24～26）は傑作中の傑作だと思いますが、ここには良さの本質があります。その 1 つは、「罪と罰」の“ほんとう”が示されているということです。「罪と罰」の“ほんとう”について、読者に洞察させずにはいられない。端的にいうと、もう二度と取り戻すことのできない人間関係、それこそが「罪と罰」の本質です。そのことが、じわりじわりと読者の中にやってきます。それを物語の中で描いていく。すべて言葉でその世界がつくられています。

日本の作家で、その力がとても優れていると私が思うのは、平野啓一郎です。『マチネの終わりに』（紹介資料リスト 27）は、40 歳前後の男女の話ですが、ここに“ほんとう”の恋があると思わずにはいられない、そんな世界が描かれています。それが、言葉で「世界のすべて」

10　吉本隆明「文庫版まえがき」『言語にとって美とはなにか　定本　1』（角川文庫. 角川ソフィア文庫）角川書店, 2001, p.7.

が作られているといわざるを得ないほどの文章表現でなされているのです。まだ誰も見たことのない、作家の想像の世界も含めて、「世界のすべて」です。それを、何も漏らすことなく（逆に、書かないことによって書くという手法もあると思いますが）、言葉で全部が描かれていると思わせるほどの力を持っています。

5　哲学と文学

哲学と文学の関係性についても、せっかくですのでお話ししたいと思います。

私も小説家になりたいと思っていましたが、挫折をしました。ただ、哲学者になったいま、思うのは、哲学も文学も、めがけているものはある意味で同じということです。それは普遍性。できるだけ誰もが納得できるような、普遍的な考え方にたどり着こうとするのが、哲学であり、文学であると思います。

その際の、言葉の使い方や表現方法が、哲学と文学とでは全く違う、ある意味では真反対といってもいいかもしれません。

哲学は、普遍性に向かって一気にめがけていきます。そのため、原理的な思考や普遍的な言語を駆使し、できるだけ検証可能なかたちで展開していきます。

文学は反対に、徹頭徹尾、個別具体的な事象を描きます。もちろん、言葉の使い方としては具体的なものから抽象的なものまで、ありとあらゆる手法を駆使しますが、描く世界はとても個別具体的です。そして、個別具体的な世界から、普遍的なものに至ろうとします。（『罪と罰』でいえば）ラスコーリニコフの犯した罪、受けた罰。それをぐっと掘り下げていくと、その先に普遍的な世界が広がるのです。

ラルフ・ウォルドー・エマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803-1882）という 19 世紀のアメリカの思想家が、「最も内的なものは、時至れば最も外的（普遍的）なものになる」[11] という言葉を残しています。自分の奥深く、最も内的なものに徹底的に入り込んでいけば、その先で普遍性につながっていくのです。これが文学の魅力です。どうして個別具体的な話が、多くの人に普遍性を感じさせるのか。ここに文学の本質があるのではないかと思います。

6　まとめ

文学は、私たちに世界や人間の“ほんとう”（ありうべき、あるいはあれかしと願う“ほんとう”の世界）を知らしめます。特に（なんらかの満たされなさを抱えた）若い頃、私たちは、そのような「ほんとうの世界」にえも言われぬ力で引き寄せられることがあります。そのような体験は、私たちに、私たちが「ただ生きる」のではなく、何か“ほんとう”を求め、それに「憧れつつ生きる」ことができることを教えてくれる。これが文学の本質であり、人生にとっての意義であるといえるでしょう。

Ⅲ　若者に伝えたい、読書の意義と方法

少し重たい話が続きましたが、最後に、若者に伝えたい、読書の意義と方法についてお話しできればと思います。

最初にも触れた『未来のきみを変える読書術　なぜ本を読むのか？』（紹介資料リスト 13）の内容を少しだけご紹介して、若い人たちにどのように読書を薦めたらいいか、どのような読書の仕方を習得してもらいたいかということを話していきます。

11　Ralph Waldo Emerson, “Self-Reliance,” *The complete works of Ralph Waldo Emerson*, Vol. 2, 1903, p.45 から著者翻訳。

1　読書の意義

(1) とにかくたくさん読む

まず､｢読書は私たちをGoogleマップにする｣ということについて。どういうことかというと、私たちは（特に若い頃)、摩天楼の中で道に迷っていて、どこにどんな道があるのか、ゴールはいったいどこなのか、よく見えない状態です。そこで、だまされたと思ってたくさん本を読んでほしい。たくさん本を読んでいると、ある日突然、自分がGoogleマップになって、衛星から地球を、摩天楼を見下ろしているような視野が開けてくるのです。そうすると、どこにどんな道があって、どんな目的地があって、どう道をたどればそこにたどり着けるかが見えてきます。その快感を、多くの若い人たちと共有したいなと思っています。

レントゲン写真の比喩もよく使います。私たちが見ているレントゲン写真と、医者が見ているレントゲン写真とでは、まるで見え方が違います。本をたくさん読んで自分のものにしていくと、世界の見え方が変わるのです。

また､｢クモの巣電流流しができるようになる｣という言い方もします。本をしっかり読んで自分のものにしていくと、頭の中にクモの巣のようなネットワークができます。ありとあらゆる知識や情報、考え方がネットワークになります。そして、自分が解かなければならない問題などに出くわしたときにスイッチを入れると、そのネットワークに電流が走って、一本の道筋ができるのです。その道筋が、問題を解決するための考え方になっていたりします。これもまた、読書の大事な効用であると思います。

もちろん、その中には文学も含まれています。文学というのは、私たちが「ただ生きる」だけでなく、何かに「憧れつつ生きる」ことを教えてくれます。単なる知識や情報だけではなくて､｢生き方｣や「豊かさ｣､｢生のロマンチシズム｣､｢リリシズム（叙情)｣といったものも、ありとあらゆるものがネットワークになって、自分はどういう風に生きればいいのか、この問題はどうすれば解決できるのかということが、総合的に見えてくることがあります。本を読んでいると、本当にそういったことが起こってくるので、若い人たちにぜひ本を読んでほしいと思っています。

(2) 構造的思考を身につける

他にも､｢構造的思考が身につく｣ということがあります。構造的思考というのは、単なる論理的思考ではありません。論理的思考というのは、例えば､｢A = Bである｣｢B = Cである｣｢ゆえに、A = Cである｣という単純な形式論理です。それに対して、ここでいう構造的思考というのは､｢何を｣｢どのように｣｢どんな手順で｣｢どんな構造で｣考えたり伝えたりするとよいかということです。

なぜ読書によって構造的思考が身につくかというと、例えば哲学書の大事な読み方というものがあります。哲学書は難しいものが多いですが、それを「読みたいように読んでしまう」ということが多くあります（専門用語をよく理解できず、自分勝手に解釈してしまうなど)。そうならないために、大事なポイントが3つあります。

①問いはいったい何なのか……この本は何を問うているのかを、決して手放さずに読むこと
②問いをどういう方法で解こうとしているか
③問いに対する答えは何か

この構造を決して見失わないで読んでいくと、しっかりとその本の内容が理解できます。もちろん、それが難しいのですが、それができないと、勝手な読みをしてしまうことになるのです。

このように、読んでいる本がどのような構造で書かれているかを考えるクセをつけると、自分が思考するときも、どういう手順を踏めば問題を解決できるかということが見えてきます。

これは文学作品でもある意味、同じです。文学作品を読み慣れている人は、作家がどのような構造的思考で作品を書いたかというのも瞬時に見て取るのではないかと思います。優れた批評家であれば皆、そういったものが見えているのではないでしょうか。

「構造的思考が身につく」という点で、いわゆる本とインターネットの記事は違うでしょう。インターネットの記事はさほど長くなく、断片的な知識を手っ取り早く手に入れるという点ではよいと思いますが、構造的思考を身につけるためには、本を読むことが大事になると思います。

(3) 言葉をためる

さらに大事なのは、「言葉をためること」です。言葉をためることで、多様で異質な人たちとの間に共通了解を見出し合うことができるようになります。言葉をあまり知らないと、コミュニケーションもうまくいかないことが多いです。子どもはすぐに手が出て相手を傷つけてしまうということがありますが、例えばイライラしたときに、それを言葉にして相手とコミュニケーションできれば、手を出さずに済みます。言葉をためて、言いたいことを上手に言えるようになり、相手の言葉の意図をしっかりとくみ取れるようになると、多様な人たちと共通了解を見出し合うことができるようになります。

この点においても、文学作品は優れていると思います。私たちは、言葉を文脈によって学んでいきます。単に辞書的な定義だけがあるのではなくて、文脈の中で言葉のいろいろな使われ方があります。こういう状況でこういう言葉を使うと、こういう意味になるのかというのを、文学作品の中で学んでいくと、より豊かなコミュニケーション、より豊かな共通了解を得られるようになるのではないでしょうか。

(4) 読書もまた豊かな経験

そうはいっても、本ばかり読んでいて、人生経験が貧しい人もたくさんいるのではないか、と思われる方もいらっしゃるかもしれません。ジョン・デューイ（John Dewey, 1859-1952）という 20 世紀の哲学者は、「1 オンスの経験は 1 トンの理論に勝る」[12] という有名な言葉を残しています。ですが、「読書もまた豊かな経験である」ということを、私はしっかりと言っておきたいと思います。

デューイが言うように、どれだけ水泳の理論を学んだところで、実際に水の中に入らないと、泳げるようにはなりません。けれども、その経験をもっと豊かにするために、読書という経験が役に立ちます。もっと速く泳ぎたい、もっと美しく泳ぎたいというときに、例えば水泳の理論書などを読むと、わたしたちの経験を拡張してくれます。

よく、「一般化のワナ」に陥らないようにという言い方をします。経験だけに頼っていると、その経験を過度に一般化して、他の人にも当てはまるかのように語ってしまうことがあります。「学校の先生はみんな○○だ」「男は／女はみんな……」「日本人は……」というように、自分が経験してきたごくわずかな例から、全てがそれに当てはまるかのように一般化するということを、私たちはしばしばやってしまいます。そのこと自体は仕方のないことでもありますが、

12　John Dewey, *Democracy and Education: An Introduction to the Philosophy of Education*, The Macmillan Company, 1916, p.169 から著者翻訳。なお、小学館『数え方の辞典』（ジャパンナレッジ内で提供）によると、1 オンスは約 28.35 グラム。

自分も過度な一般化をしているかもしれないと振り返ることが大事です。本を読むことで、自分の経験をよりマクロな視点から振り返ることができます。その意味でも、読書経験を積んでいく必要があると思います。

2　読書の方法

では、どういうふうに本を読んでいくとよいかについて、簡単にお話しします。

(1) 投網漁法から一本釣り漁法へ

まずは、「投網漁法から一本釣り漁法へ」というのが基本であると思っています。投網漁法というのは、自分の興味のアンテナに引っかかるものを、とにかく手当たり次第に読んでいくということです。図書館や（古）本屋に行って、ノンフィクションであれば、まずは新書コーナーでよいと思います。中高生向けのレーベルもあります。面白そうだと思ったものを手当たり次第に買ったり借りたりして読んでいくと、徐々に興味のある、もっと読みたいと思うテーマや著者を見つけ出すことがあります。そうなれば、そこに絞って一本釣りで読んでいく。あるテーマについて 10 冊、20 冊と読んでいけば、ちょっとした専門家になれたりもします。小説であれば、好きな作家ができてきますから、その作家について一本釣りで読んでいく。このようにして「投網漁法から一本釣り漁法へ」を繰り返していくと、ある時突然、Google マップになっている自分に気が付いたりするのです。

(2) 1 冊まるまるレジュメを作る

これは文学の場合は少し違うかもしれませんが、「1 冊まるまるレジュメを作る」ことも大事です。先ほど言ったように、本は構造を持っています。哲学書であれば、どんな問いがあって、どんな方法でどんな答えにたどり着いたかという構造です。この構造が分かるようなかたちで、1 冊まるまるレジュメを作るのです。レジュメの作り方は著書で紹介していますが、これによってその本のことがより深く分かってきます。これは、中高生くらいからやっていってもよいのではないかと思います。

(3) 信念検証型の読書

それから、「信念補強型の読書」というのを、私たちはしばしばやってしまいます。自分の信念に都合のよい読み方であるとか、自分の信念に都合のよいデータばかり見てしまうということです。

そうではなくて、読書において大事な姿勢は、信念を検証しながら読むということです。自分の考えは、本当に妥当性があるのだろうか。そういうことを検証しながら読書する方法は、若い頃から身につけておくとよいのではないでしょうか。そうでないと、どんどん凝り固まった読み方をしてしまうようになります。

(4) 市民としての読書

最後に 1 つだけ。「市民としての読書」ということを、エマニュエル・トッド（Emmanuel Todd）という歴史学者が言っています。市民というのは、市民社会（民主主義の社会）を生きる私たちのことです。市民社会というのは、誰か権力者・為政者が思いのままに作る社会ではなくて、「自分たちの社会は自分たちで作る」社会です。ですから、私たち一人一人にそういった自覚がなければ、市民社会はすぐに崩壊してしまいます。そういう意味でも私たちは、社会

を知り、社会を考える読書をすることがとても大事だと思います。

若いうちは、そういうことに興味がないという人も多いとは思いますが、何かの機会に今の社会問題などに興味を持って、「投網漁法から一本釣り漁法」をして、「市民」になっていく。そういったことを（大人である）私たちは喚起（エンカレッジ）していく必要があるのではないでしょうか。

おわりに

最後の話は、少し文学からそれてしまったかもしれません。

それはともかく、私は著書の中で、もっと司書に頼ろうということを強調しています。司書や学者の立場である人たちは、若い人たちが文学に出会ったり、いろいろな本に出会ったりということについて、説得力をもってその魅力を語れるし、語るような仕事ではないかと思っています。その意味でも、このようなお話をする機会をいただけたのは、ありがたいことだと思っています。

本日はどうもありがとうございました。

現代社会を生きぬく

～ヤングアダルト文学は何をどう映し出す？～

白井　澄子

はじめに
Ⅰ　差別と戦う
　1　人種差別
　2　病気や障害への差別
　3　性的マイノリティへの差別
　4「差別と戦う」まとめ
Ⅱ　毒になる親
Ⅲ　ヤングケアラー
おわりに

若者は家族、友人、学校、地域など社会と関わって生きていますが、時に社会は心地よい関係だけでなく、無理解、対立、疎外感などの痛みを与えることもあります。本講義では、最近クローズアップされている若者の貧困やLGBTなどの性的マイノリティといった問題にも触れながらヤングアダルト文学の意義について考えます。

はじめに

みなさま、こんにちは。白井澄子です。「今を生きるヤングアダルトへ」という総合テーマのもと、私は「現代社会を生きぬく　～ヤングアダルト文学は何をどう映し出す？～」というタイトルでお話をしたいと思います。

このタイトルの下ではいろいろな論点が考え得ると思いますが、この講義では、

・差別、経済格差などの現状と若者がどんな関係にあるのか？
・文学作品はリアルな社会状況と若者を描いているのか？
・文学作品は読者に理解を促しているのか？
・文学作品はちゃんと渦中にある若者を力づけることができているのか？

このようなことを考えながら、お話をしたいと思います。

流れとしては、大きく 3 つに分かれます。

Ⅰ　差別と戦う―最初はこのタイトルからお話しします。
Ⅱ　毒になる親―ちょっと怖いタイトルです。
Ⅲ　ヤングケアラー―最後にヤングケアラーの本をいくつか取り上げたいと思います。

基本的には若者向けの現代作品を扱いますが、多少年齢の低い主人公が出てくる作品もありますし、現代といっても比較のために少し古い時代の作品も含めています。

扱う作品は主に英語圏のもの（1 作品だけ日本のもの）で、いわゆる文学作品に加えて、グラフィックノベルも含まれます。それでは始めていきましょう。

Ⅰ　差別と戦う

最初の項目、「差別と戦う」です。世の中にはさまざまな差別があります。私たちがもっとも耳にするのは人種差別でしょうか。病気や障害、ジェンダーについても差別があります。それから経済格差、経済的に恵まれない人たちに対する差別もあります。年齢についても、高齢者ということで差別を受けることもあります。まだまだ他にもさまざまな差別がありますが、今回は 3 つを取り上げたいと思います。

1　人種差別
2　病気や障害への差別
3　性的マイノリティへの差別

1　人種差別

まずは、人種差別です。人種差別にもいろいろありますが、やはり一番大きいのは、黒人に対する白人からの差別であると思います。それから、移民も差別を受けてしまうことがあります。また、戦争に負けてしまった国の人々に対する差別もあります。他にも、少数民族に対する差別があります。米国やカナダの場合は､先住民に対する差別です。そうした話題について、どのような児童文学があるのでしょうか。

・『父さんの犬サウンダー』

最初に、黒人に対する差別を扱った作品です。W.H. アームストロング（William Howard Armstrong, 1914-1999）の『父さんの犬サウンダー』（紹介資料リスト 1）。書かれたのは 1969 年[1] で、少し古い作品になりますが、現代との比較ということでお話をしたいと思います。

1　以降、特に断りのない限り、書籍の出版年は原著の出版年を示す。

貧しい黒人一家のお父さんがハムを盗んだことで捕まり、それを阻止しようとした愛犬のサウンダーが撃たれてしまいます。お父さんと愛犬が撃たれて、主人公の少年は痛みを覚えます。お父さんは白人の警官にしょっぴかれて投獄され、犬のサウンダーは傷を負ったままどこかへ行ってしまい行方不明になります。息子である少年は、投獄の後に強制労働に送られ行方が分からなくなったお父さんを探す旅に出ることになります。そのプロセスが描かれた物語で、黒人蔑視が色濃く描かれた作品です。

この作品は、アメリカの白人社会における黒人の状況を非常にシビアに描いた初期の児童文学作品といえます。これまでも黒人を扱った児童文学は、ないわけではなかったのですが、黒人がちょっとユーモラスに描かれているといったものでした。黒人が差別を受けているということを正面から描いた作品は当時、新しいものでした。作品の中には、痛みを感じる部分がたくさん出てきます。例えば刑務所で黒人へのひどい扱い、ひどい食事をあてがわれたり周囲の黒人が鞭（むち）を打たれたりするような様子を少年が目にし、お父さんが少年に「二度と来るな」と言うような場面も出てきます。その後、お父さんは強制労働に出されて行方が分からなくなります。行方不明になった犬のサウンダーは戻ってきますが、傷を負っていて、身体の自由がききません。しかも、声が出ない、吠えることができない状態です。

少年はお父さんをあちこち探しまわっていき、物語の後半に、ある小学校に行きつきます。手にけがをしていたので洗い流そうと水を使わせてもらうのですが、そこの小学校の先生がとてもやさしいのです。描写からは白人か黒人かは分からないのですが、少年のことを受け入れて、学校にいらっしゃい、読み書きを覚えなさい、と誘ってくれます。それに誘われ、少年は学校に通うようになります。

その後家に戻ったところ、お父さんも戻ってきますが、もう体がヨレヨレなのですね。自由がきかない状態です。するとその時、それまで吠えることができなかった犬のサウンダーがお父さんを見つけて、声をあげ、お父さんに向かって吠えたのです。お父さんの帰宅がどんなにうれしかったかということが分かります。

残念ながらお父さんは、相当に体が弱っていて亡くなってしまうのですが、最後、少年が教育を受ける機会を得て、新たな人生が始まる可能性があるという様子が描かれます。

この作品にはいくつか特徴があります。まず、犬のサウンダー以外の登場人物には名前がありません。これに対して、出版当初は「黒人を蔑視している」との批判も出ましたが、実はそうではなく、「どの黒人にも当てはまる話」という意味で、いわば象徴的な描き方なのだというふうに現在では受け止められています。

もう 1 つの特徴は、この黒人のシビアな状況について描いた作品が白人作家により書かれているという点です。これに対しても、初期の頃には、白人に黒人の本当の痛みは分かるのかと批判がありました。しかし、実際は当時、黒人の作家には児童文学作品を出版する機会はほとんどなかったのですね。白人作家が黒人の気持ちをくみ取って書くというのは『アンクル・トムの小屋』（*Uncle Tom's Cabin*, 1852）が良い例です。『父さんの犬サウンダー』も、執筆されたことによって多くの人たちが黒人の状況に目を向けることになったといえる作品の 1 つです。

・『とどろく雷よ、私の叫びをきけ』

次にご紹介するのは、ミルドレッド・D.テーラー（Mildred D. Taylor）の『とどろく雷よ、私の叫びをきけ』（紹介資料リスト 2）。非常に力強いタイトルです。1976 年の作品で、『父さんの犬サウンダー』から 10 年経っていないくらいですが、著者は黒人女性で、その間に時代

の空気が変わったことが分かります。

この作品は、黒人奴隷が解放されて70年後くらい（1940年代頃）のアメリカが舞台です。黒人のローガン一家は、白人からのさまざまな差別に不満と疑問を抱きますが、黒人としてのプライドを持ち、人間として正しく生きようとします。それでも、多くの矛盾に直面するのです。黒人たちのそうした険しい道のりと不屈の精神を、ローガン家の9歳の少女キャシーが語る、力強く、熱のこもった作品です。

この作品でも、いろいろな差別が描かれています。例えば、キャシーがもらう学校の教科書は、白人が使い古したものです。白人は新しいものをもらえるのに、黒人は古いものしかもらえません。また、キャシーが、通りでたまたますれ違いざまに白人の少女にぶつかってしまい、どちらが悪いということはないのですが、その白人少女の父親に理不尽な謝罪を要求されます。黒人へのリンチが横行している様子も描かれます。20世紀半ばになっても、黒人への差別は変わらないということを思い知らされる作品です。

著者のミルドレッド・D.テーラーは、2021年児童文学遺産賞を受賞したそうです[2]。長きにわたり、影響力のある作品を書いた作家に与えられる賞です。

・『ザ・ヘイト・ユー・ギヴ　あなたがくれた憎しみ』

続いて、『ザ・ヘイト・ユー・ギヴ　あなたがくれた憎しみ』（紹介資料リスト3）。黒人作家のアンジー・トーマス（Angie Thomas）が書いた、2017年の新しい作品です。

主人公は女子高校生のスター。幼なじみの青年カリルが、目の前で白人警官に射殺されてしまうのを見たスターは、目撃情報を警察に語りますが、なかなかうまく話せません。白人警官の行為を正当化したい警察は、カリルを罪人に仕立てようとします。スターはカリルの汚名を晴らすため、勇気をもって一般人が陪審員として参加する大陪審で証言をし、今後も声を上げ続ける決意をします。大陪審ではきちんと話をすることができたのですが、最終的には白人警官は無罪ということになってしまいます。

主人公のスターは、黒人ゲットーに住みながらも、白人の多い私立高校で学んでいます。この設定により、白人と黒人、それから階級差による考えの違いなどが、複雑に絡み合う様子が見えてきます。黒人のゲットーに住んで黒人だけの学校に通っているのとは異なり、スターは、いろいろな意見、考え方が見える立場にいるのです。

殺された友人を一生懸命守ろうとするのですが、うまく守れなかったということで、黒人側の、白人に対し殴り込みをかけようという反発の様子がいろいろなかたちで描かれています。また、黒人の生活の経済的な厳しさも見えてきます。どこに住んでいるか、どんな高校に通っているかということで、そうしたことが浮き彫りにされていきます。

最終的には、亡くなったカリルの無念を晴らすことはできなかったのですが、事件の背景がいろいろ見えてきて、スターの、これからも強く、自分たちの意見を言っていこうという気持ちが伝わってくるものです。

ちょっと考えてみると、さきほど取り上げた『とどろく雷よ、私の叫びをきけ』から30年、40年も経っていますが、白人の黒人に対する視点が変わっていない、事態が変わらないことは衝撃的です。『とどろく雷よ、私の叫びをきけ』では、黒人の正当な生き方とプライドに焦点が当たっていましたが、この作品は正義の「声を上げる」ことで白人・黒人両者に訴えかけようという、非常に強い能動性が感じられます。また、物語のなかにスターのボーイフレンド

2　Children's Literature Legacy Award <https://www.ala.org/awardsgrants/awards/36495/all_years>

が出てくるのですが、その子は白人なのです。両方の意見が見えてくるという点でも、現代的な作品であると感じられます。

続編『オン・ザ・カム・アップ』（2019, 三辺律子先生紹介資料リスト 10）も面白い作品ですので、ぜひ読んでみてください。

・*New Kid*

次は、Jerry Craft による *New kid*（2019, 紹介資料リスト 4）という作品です。Jerry Craft も黒人作家です。この作品はまだ翻訳されていません。

ニューヨークに住む黒人少年のジョーダンは、両親の勧めで白人地区の名門中学校に進学することになります。最初はすごくドキドキするのですが、過ごしてみるといろいろなことが見えてきます。中学校では、白人生徒による黒人へのいじめがあります。また、先生が白人以外の生徒の名前をしょっちゅう間違えるので、これにもショックを受けます。

ある時、黒人の生徒が無実の罪に問われて先生に叱られてしまいます。それを見ていたジョーダンは、勇気をもって彼が悪いわけではないと真実を話します。すると、白人の生徒たちも皆、賛同してくれます。そこから少しずつ流れが変わっていきます。それまで白人のクラスメートとは疎遠でしたが、少しずつ皆と交流するようになり、次第に級友との隔たりがなくなっていくのです。

タイトルの *New kid* にはいろいろな意味がありますが、新しい学校に入って自分が生まれ変わったという意味が含まれています。

この作品はグラフィックノベルですが、グラフィックノベルとして初めて、児童文学の最高の賞の 1 つであるニューベリー賞[3] を受賞しています[4]。

この作品は、多様性のある社会（ここでは学校ですが）を生きていくことの難しさを、身をもって体験する黒人の少年と、周囲の人々が少しずつ変化していく様子を描いています。その中で 1 つ面白いエピソードがあります。主人公のジョーダンは、マンガを書くのが上手なのですが、白人とのいさかいや、思うようにいかないことがあると、「喧嘩をして発散する」ことができないので、その怒りをマンガに描いています。その秘密のノートがあるのです。ある日、ノートを学校に忘れて帰ってしまってそれが先生に見つかり、ジョーダンは先生から呼び出されます。そこでジョーダンは、「皆と違う」ことの痛み、重圧がどれほどか、「先生、僕の立場になってみてください。先生は白人だから分からないかもしれないけれど、僕の立場になったら少しは分かるのではないでしょうか」と訴えます。先生は言葉に詰まってしまいますが、やがて理解へとつながっていきます。このように、ジョーダンの言動で周囲が変わっていくという、とても前向きな物語です。声を発し、行動を起こすことで周囲も変わっていくということで明るい未来が見えるような展開になっています。ぜひどなたか翻訳して日本語版を出してほしいなと思っています。

・『アメリカン・ボーン・チャイニーズ　アメリカ生まれの中国人』

次もグラフィックノベルです。『アメリカン・ボーン・チャイニーズ　アメリカ生まれの中国人』（2006, 紹介資料リスト 5）。著者のジーン・ルエン・ヤン（Gene Luen Yang）は、中国系アメリカ人です。

3　John Newbery Medal <https://www.ala.org/awardsgrants/awards/15/all_years>
4　Concepción de León, “Graphic Novel Wins Newbery Medal for the First Time,” *New York Times (Online)*, Jan 27, 2020.

主人公である中国系アメリカ人の少年ジン・ワンは、白人アメリカ人として生きることを夢見ていますが、彼のそうした思いとは裏腹に、物語は彼の中国人としての人種的、文化的な根っこを見せつけ、本当の自分に気付かせていくというお話です。

内容に入る前に、表紙イラストについて説明しておきます。手前に大きく描かれた、ロボットみたいなものを抱えた少年がジン・ワンです。そして、奥に孫悟空が描かれています。右端には、白人の少年ダニーが描かれています。それを心に留めておいてください。

では、内容についてお話ししていきます。物語は 3 つの話で構成されています。1 つ目は孫悟空の話です。悟空は猿であることを拒否して、もっと大きな存在になりたいと思っています。2 つ目はジン・ワン自身の話です。白人に憧れて、白人的なスタイルやヘアカットをしてみたりして、なんとか白人になりたいと思っています。3 つ目は白人少年ダニーの話です。白人なのですが、なぜか奇妙な中国人のいとこチンキー（これは中国人に対する非常に蔑視的な呼び方です）がいて、学校でいつも付きまとわれています。

この 3 つの話が絡み合いながら展開していくのですが、実はこの 3 つの話はどれもジン・ワンの側面を捉えているのです。白人になりたい、白人のガールフレンドが欲しいと白人に憧れるジン･ワンですが、次第に自分のルーツ、中国人であること、そして白人とは違う良さを持っているということに気付いていきます。つまり、3 つに分かれていたジン・ワンが、最後に 1 つに集約していくことになります。少し複雑ですが、面白い構成です。

作品には、あからさまな人種・民族差別は描かれません。けれども、主人公が白人のようになりたいと思う背景には、もちろん差別の存在が透けて見えます。なかなか凝った面白いお話です。

・「人種差別」まとめ

ここで、人種差別に関する話をまとめたいと思います。

現代作品になると、人種差別が生む悲劇や怒りだけでなく、個人の内面の動きや、人それぞれの考え方の違いなどが、リアルかつ複雑に描かれるようになります。また、マイノリティが声を上げ、周囲に理解を促す様子も描かれていきます。

それにより、読者に訴える力が強くなっているように思います。特に、差別を受ける側の読者にとって、身近なセッティングが多くなり、より共感を得やすくなっているようです。

2　病気や障害への差別

次に、病気や障害への差別を描いた作品です。現代では、病気や障害を隠さず、表に出せる時代になってきましたが、まだまだ理解は不十分であると思います。

児童文学作品ではどのように状況を描いているのか、2 作品を見ていきたいと思います。

・『ワンダー』

R・J・パラシオ（R. J. Palacio）の『ワンダー』（2012, 紹介資料リスト 6）は、比較的新しい作品です。

主人公はオーガスト。顔が奇形という障害を持って生まれた小学 5 年生の男の子です。目の位置が違っているとか、口が曲がっているとか、実際にたくさんの方にそうした障害があります。オーガストは何度も手術を受けていますが、なかなか思ったような顔にならないといった状況が描かれています。オーガストは、最初は特別なケアをしてもらえる学校に通っていましたが、5 年生の時に普通の学校に通うことになり、そこでさまざまな体験をします。嫌がらせ

をする生徒、受け入れる生徒、先生の反応、そしてそうしたことへのオーガストの葛藤が、本人とクラスメートたちの視点から描かれます。

学校でのいじめや保護者たちからの反発を経験し、オーガストは障害とは別の苦痛を感じるようになります。その中で、友人や家族との信頼がいろいろなかたちで試されます。

例えば、オーガストには学校でジャックという親友ができますが、ジャックが他の友達とコソコソ話をしているのを見てしまい、友情に疑問が生じます。また、姉が小さい頃からずっと面倒を見てくれていましたが、オーガストが普通の学校に通うようになり、荷が下りてほっとしたという話をしていたことも聞いてしまいます。オーガストは非常に気にしてしまいます。ただ、ジャックも姉も、オーガストのことをちゃんと考えていることが、後で分かります。

さらに、オーガストをいじめているクラスメートがいたのですが、校外学習で外に出たオーガストがよその中学生に襲われた時、そのクラスメートが中学生を追い払ってくれます。

このような体験をしながら、オーガストは自分を見つめ直し、クラスメートもオーガストのことを認めていきます。オーガストは学校から優秀賞をもらったりもします。

外に向かって自分を開いていくオーガストと、「違い」を受け入れていくクラスメートたちの勇気にエールを贈りたい作品です。

・『リバウンド』

アメリカの作家エリック・ウォルターズ（Eric Walters）の『リバウンド』（2002, 紹介資料リスト 7）は、高校生が登場する作品です。

「リバウンド」という言葉にもいろいろな意味がありますが、ここではスポーツなどで、失敗したらもう一度トライしてチャンスをものにすることです。この作品ではバスケットボールが出てきます。

物語には、車椅子の転校生デイヴィッドという少年が登場します。転校生が入学してきた場合、その面倒を見る在学生が付けられるのですが、同級生の少年ショーンがその世話役を申し付けられます。デイヴィッドは自分勝手に無謀ともいえる行動をとって平然としていて、世話役であるにも関わらず後から付いていくショーンは戸惑うことばかりです。

ある時、ショーンがバスケットボールの選手になりたいと思っていることを知ったデイヴィッドは、ショーンに指導をします。デイヴィッドは、前の学校ではバスケットボールの花形選手だったのです。

そうした 2 人のつながりができてきたあるとき、デイヴィッドがショーンに、「君も車椅子で町に出てみないか」と誘いかけるのです。その体験のなかで、ショーンにはいろいろなことが見えてきます。車椅子に乗ってみると、すぐに手や腕が痛くなりますし、交通量の多いところではとても苦労します。

また、店に行ってみたところ、うっかり飾ってあった展示品を落としてしまいます。すると、店員さんは「大丈夫ですよ」と言ってきます。健常者だと文句を言われるのに、障害者だから何も言われない。実はこのことに、デイヴィッドは差別の一種であるとして怒りを感じているのです。そうした体験からショーンはいろいろなことを知っていきます。

そんな前向きなデイヴィッドですが、彼を絶望させることが起こります。デイヴィッドは、新しい医療技術、新しい治療で不自由になった脚が元に戻るのではと期待していました。しかし、現在の技術では難しいということが分かってきます。治療の限界を知り、生きる気力を失ってしまいます。そして、自殺を図ろうとするのです。

ショーンは、何かおかしいと思って、デイヴィッドの行きそうなところを探して追いかけて

いきます。そして、断崖絶壁のところにいるデイヴィッドを捕まえ説得し、2 人は無事に帰るのです。

非常にいろいろなことを考えさせられます。障害者を見る目、障害者と健常者の意識のズレがさまざまなかたちで見えていきます。他にも、医療の限界などを扱っています。健常者であるショーンに障害者を疑似体験させることで、読者にも共感を持たせるというなかなかうまく書かれた作品ですので、読んでいただけるとよいと思います。

・「病気や障害への差別」まとめ

最近は、病気や障害を扱った作品が増えています。今回は 2 作品のみ取り上げましたが、いずれも健常者が障害者と深く関わることで、その痛みや、彼らが受ける差別に気付かせてくれます。特に差別は、知らないうちにやってしまっていることが多いのです。そういったことにも意識を向けていければと思います。

今年（2021 年）はパラリンピックが開催されましたが、障害をはねのけて生きる人々の勇気は、全ての人への励ましにもなると思います。

3　性的マイノリティへの差別

それでは次の問題、性的マイノリティへの差別です。これも大きな問題をはらんでいます。LGBT は、レズビアン（Lesbian）、ゲイ（Gay）、バイセクシュアル（Bisexual）、トランスジェンダー（Transgender）の略で、皆さんもよくご存じかと思います。男・女という二極化された性別への違和感を多くの子どもが持ち、悩みを抱えています。読書によって当事者の痛みを和らげることは、難しいこともあるかもしれませんが、周りの人たちの理解が深まるとよいと思います。

英米では LGBT をテーマにした児童文学・ヤングアダルト文学が多数出版されていますが、邦訳数はまだ限られています。多くの作品が翻訳されてほしいですし、また日本からも作品が出てきてほしいなと思います。

・『変化球男子』

まずは、M・G・ヘネシー（M. G. Hennessey）の『変化球男子』（2016, 紹介資料リスト 8）です。

身体は女子、心と脳の働きは男子として生まれたシェーン。現在通っている中学では、男子として通学しています。有能なピッチャーとして活躍し、誰も疑問を抱いていません。けれど、前の学校は女子校でした。

野球でいつも負かされている男の子ニコは、腹いせにシェーンが以前に女子として通っていた学校の写真をネットで拡散させてしまいます。親友のジョシュやガールフレンドのマデリンにも話さなかった事実が明るみに出てしまうのです。

シェーンは、思春期になって新たなホルモン治療を始めることになっていて、それを楽しみにしています。その治療を受けないと女性らしい身体になってしまうので、過渡期となるこの時期に受けるということになっています。シェーンのお母さんはそれに賛成していますが、お父さんは反対しています。お母さんは、シェーンが小さい頃から違和感を抱いていることに気付いていて、それを念頭に置いて育ててくれていました。でもお父さんには、「女の子のシェーン」のイメージがずっと付きまとっていて、気持ちが切り替えられていない状況です。

ニコによって女子学生としてのシェーンの写真が拡散されると、同級生たちからさまざまな

嫌がらせを受けるようになります。そして、シェーンは孤立してしまいます。野球もやめてしまいそうになりますが、それでも、ピッチャーとしての実力は確かです。そこで、監督がこのようなことを言います。

いいか、きみが女子であろうと、男子であろうと、なんならカンガルーであったって、わたしはかまわない。きみがいまのように球を投げ続けてくれさえすれば……（後略）[5]

この言葉に、同級生たちも目から鱗が落ち、偏見から目が覚めるという展開になります。そして、シェーンはピッチャーとして活躍し続けていくのです。

この話を読んで分かるのは、LGBTの子どもに必要なのは、親の理解、医学的･精神的なケア、友人や周囲、特に教師など大人の理解であるということです。この作品は、いじめの場面などでは心が痛みますが、そうしたLGBTの子どもたちに必要な要素がバランスよく配され、納得のいく内容になっています。

・『九時の月』

こちらは、先ほどとは大きく内容が違うものになります。『九時の月』（2014, 紹介資料リスト9）は、カナダの作家デボラ・エリス（Deborah Ellis）の作品で、イスラム革命後の、1988年のイランが舞台です。デボラ・エリスは、イランなどの中東地域を取材しての執筆活動もしています。

テヘランで名門私立女子校に通う15歳のファリンは、運転手付きの車で通学するような裕福な家庭で育ったのですが、そうした日常に嫌気がさしています。転校してきたサディーラとの間に友情以上の感情が育ちますが、イランでは同性愛は禁止で、見つかれば処刑されてしまいます。それでも2人は愛することをやめられず、危機的な状況に陥っていきます。

ファリンとサディーラは次第にひかれ合い、愛し合いますが、同性愛を許さない社会では、命がけです。校長から一緒にいてはいけないと厳しく叱られ、常に告げ口屋の生徒が見張るような状況になっていきます。だんだん会えなくなっていく2人は、お互いに離れていても、夜9時の月を見ることでお互いの気持ちがつながっていることを確認しようと約束します。

しかし、家族が当局から目を付けられ、家に踏み込まれて2人は逮捕されてしまいます。同性愛者ということで、逮捕された後のすさまじい体験がリアルに容赦なく描かれていきます。逮捕された後は、相手のことを気遣うばかりでお互いの様子が分からないのです。

そのうちに突然、ファリンは牢獄（ろうごく）から出されます。助けたのはファリンの家の運転手だった男性です。国境をすり抜けて別の国に逃れるのですが、これは実は、父親がかなりのお金を使って、運転手に娘を嫁にやるから助けてくれと依頼した、非常に理不尽な連れ出され方なのです。その後、ファリンが愛していたサディーラは、逮捕されてすぐに殺されてしまっていたことが分かるという強烈なお話です。

まさに現代の英米の考え方には逆行する状況ですが、文化によっては、性的マイノリティの存在を否定する事実があることも、私たちは知っていなければならないかもしれません。こうした状況に苦しんでいる人たちもいるのです。

5　M・G・ヘネシー 作, 杉田七重 訳『変化球男子』（鈴木出版の児童文学　この地球を生きる子どもたち）鈴木出版, 2018, p.182.

・「性的マイノリティへの差別」まとめ

LGBTへの差別と当事者の悩み、またサポート体制について書いた作品が英語圏ではかなり出ており、日本でも訳されつつあります。ですが、もっといろいろな作品が読めるようになってほしいなと思います。例として、今回紹介しませんでしたが、『サイモンvs人類平等化計画』（2015, ひこ･田中先生紹介資料リスト 23, 三辺律子先生紹介資料リスト 9）、『兄の名はジェシカ』（2019, ひこ・田中先生紹介資料リスト 19, 三辺律子先生紹介資料リスト 19）など、他にもいくつか翻訳されている作品があります。

『九時の月』については、同性愛者を否定するのではなく、国や社会によって同性愛、LGBTの捉え方は多様であることへの理解も必要だろうと思います。

4 「差別と戦う」まとめ

以上、差別と戦うということについて、いろいろな作品をご紹介しました。

特に白人による黒人の差別は、長い歴史を経てもあまり変わっておらず、その根深さを思い知らされます。ただ、作品の描かれ方は変化しています。最近では、黒人の苦悩や自尊心の重要性を描くだけでなく、広く社会に向けて声を上げようとする姿勢が強まっているように思います。

同様のことが、性的差別などの他の差別を扱った作品についてもいえるでしょう。

世の中には有形無形の差別があり、気付かないうちに差別をしていることもあると思います。今回ご紹介したような作品が、日常を振り返るきっかけになるとよいのではないでしょうか。

Ⅱ　毒になる親

それでは次の項目、「毒になる親」。強烈なタイトルを付けましたが、ここでは、親による暴力、暴言、ネグレクトなどについて見ていきます。

近年「毒親」という言葉を時折耳にしますが、これはアメリカのセラピストであるスーザン・フォワード（Susan Forward）の著作『毒になる親』（*Toxic Parents*, 1989）から来ているようです。親の性的虐待などを調査研究する中から、本書が生まれたといわれています。

虐待される子どもは、理由のない罪悪感に悩むこともあり、複雑な問題をはらんでいます。

・『チューリップ・タッチ』

まずはイギリスの作家、アン・ファイン（Anne Fine）の『チューリップ・タッチ』（1996, 紹介資料リスト 10）です。アン・ファインは喜劇的な作品を書くことで有名ですが、この作品はダークな面がかなり強いです。

転校生ナタリーに近づき友達となったチューリップは、人々に嫌がらせをする危険なゲームへとナタリーを誘います。ナタリーはチューリップを避けるようになりますが、これが逆にチューリップを刺激してしまうのです。そしてついに、ナタリーの親が経営するホテルが放火され全焼するという悲劇が起こります。

作品中では、チューリップが父親から暴力を受けていることがほのめかされています。主人公の 1 人であるチューリップは、父親の暴力により、母親も抑圧されているという愛のない家庭に育っています。心がささくれたチューリップは、人の関心を引くには手段を選ばないのです。特に人が嫌がる言動を好み、放火癖があります。

そのチューリップと友達になるナタリーはというと、ホテル再建の仕事に携わる父親の関係で、一家は引っ越しが多く、両親はホテルの仕事で忙しくてなかなかナタリーと妹の面倒を見ることができません。孤独感を抱いていたナタリーは友達を求め、チューリップと友達になるのです。

チューリップの寂しさが裏目に出て、人に嫌がらせをするエピソードがあります。チューリップは、亡くなってしまった子どもの家に行って家のベルを押し、その子の名前をあげて一緒に遊びたいと言って、対応した親がショックを受ける様子を見て楽しむといったことをやるのです。ナタリーも最初はそれが面白いと思って付いていきましたが、だんだん違和感を抱いて距離を置くようになっていきます。

チューリップの親は暴力をふるい、ナタリーの親は子どもを愛していても深く関わっていないという対照的な親ですが、いずれも子どもの孤独が心をむしばむ様子が描かれています。

この作品には賛否両論あり、ずいぶんひどい話だという人もいますし、子どもの心の闇の部分も見せてくれる重要な作品だとする批評もあります。

・『シークレッツ』

次に、ジャクリーン・ウィルソン（Jacqueline Wilson）の『シークレッツ』（2002, 紹介資料リスト 11）をご紹介します。ジャクリーン・ウィルソンは、子どもたちの抱えている問題をユーモラスに描く、イギリスの作家です。

表紙のイラストにも描かれている 2 人の女の子、貧しい家庭に育ったトレジャーと裕福な家庭に育ったインディアが登場します。異なる環境に育ち、別々の学校に通っていた 2 人は、ある所で出会い意気投合するのです。

表紙のトレジャーのイラスト、額に傷が見えます。トレジャーの義父は暴力をふるいます。なぜ額に傷ができたかというと、バックルの固いところで殴られたからです。お母さんは夫の言いなりで、トレジャーの方が悪いのだから謝りなさいと言います。トレジャーはなんとかそこから逃れたいと思っています。

一方、インディアの両親は多忙です。お母さんはファッションデザイナーをしていて非常に忙しい。お父さんも仕事で忙しくて、実際のところインディアのことは 2 人ともあまり面倒を見てくれません。裕福なのでお手伝いさんが全てをやるという家庭なのです。

この 2 人が出会ってストーリーが展開していきます。

ある時、傷を負ったトレジャーは家から逃げておばあちゃんのところに行きますが、そこにも親が追いかけてきます。行き場がなくなったトレジャーは、たまたま知り合ったインディアと意気投合して、インディアの自宅の屋根裏部屋にかくまってもらうのです。それでタイトルが「シークレッツ」なんです。その過程で、2 人の家庭の様子が描かれていき、どうやって 2 人と家族がうまく収まっていくか、というお話です。

この作品の中には、アンネ・フランク（Anne Frank, 1929-1945）の話が出てきます。ナチの迫害の中、自分らしく生きたアンネ・フランクのことを、インディアはとても尊敬しています。トレジャーのことを自宅の屋根裏にかくまったのも、このことが関係しています。また、アンネ・フランクが自分らしさと迫害（虐待）に負けない強さを持っていたということが、作品の根底に流れているように思います。

・『わたしはイザベル』

次は、心理的な虐待に関するお話です。エイミー・ウィッティング（Amy Witting, 1918-2001）の『わたしはイザベル』（1989, 紹介資料リスト 12）は、少し古い作品ですが、翻訳されたのは比較的最近です。

自分中心で娘のイザベルにきつい嫌みばかり言っている母親と娘のイザベルとの確執を描いています。作品前半では、子どもの頃、8、9 歳のイザベルが母親に精神的に支配される様子

が描かれています。後半では母親の死後、18、19 歳のイザベルが家を出て下宿しています。彼女が読書に打ち込み、独特の感性を生かして詩や文章を書くことで、母親に支配された自分を解放し、新しい自分を再発見していく過程が描かれています。なかなか良い作品です。

この母親は、毒親の典型の 1 つといえます。このお母さんは「自分が一生懸命やっている」ということがまず一番なのです。子どもへの自分の努力が分かってもらえないと機嫌が悪くなり、子どもが母親の気に入ることをやったとしても、逆に嫌みだと受け取ってしまうタイプです。これは 1 つの病的な反応ではあるのですが、子どもは常に親の機嫌をうかがい、本当の自分が見えなくなるというかたちで被害を受けます。

イザベルも自分を見失い、小学生の頃は母親の機嫌ばかりうかがいます。しかし、母の死と引っ越しにより、自分を見つめる場を手に入れることで、初めて自分を取り戻すのです。

イザベルは、本を読むのが好きです。それで、本好きの学生が集まっているカフェに行って、学生たちの話を聞いたり、誘われてついにはその輪に入ったりして、世界が広がっていくのです。そして、自分を取り戻していきます。

時代設定は少し古いですが、まさに「毒親」とそこから自立する娘の苦労が描かれ、内容的には現代に通用する話です。

・*The Tale of One Bad Rat*

次はイギリスの作家 Bryan Talbot の *The Tale of One Bad Rat*（2008, 紹介資料リスト 13）というグラフィックノベルです。タイトルを聞いて何か思い出しませんか。ビアトリクス・ポター（Beatrix Potter, 1866-1943）の『ピーターラビットのおはなし』（*The Tale of Peter Rabbit*）とタイトルがよく似ています。

お父さんによる虐待（性的虐待を含みます）と、それを全て無視するお母さんのネグレクトがもとで家を出た少女は、路上生活者となりますが、苦労の連続で自殺も考えます。家出の時に持ってきたのが、大好きな『ピーターラビットのおはなし』の絵本でした。町では何度も危険な目に遭い、ペットにしていたドブネズミまでも殺されてしまいますが、ときどき絵本を開いて『ピーターラビットのおはなし』で心を慰めます。

ある時、ビアトリクス・ポターの住んでいた『ピーターラビットのおはなし』の舞台でもある湖水地方への訪問を思い立った彼女は、ポターの家を訪ねます。そこで彼女は、ポターの失われた本『一匹の悪いネズミのおはなし』（*The Tale of One Bad Rat*）を戸棚の端っこに見つけるという夢想に浸ります。空想する物語は、家でも学校でも出来の悪いネズミが、旅に出てさまざまなことを経験するうちに、皆を困らせていた邪悪なネコを退治し、良いネズミであるということを証明し、皆に受け入れられるという話です。まさに、少女がこうであってほしいと願うことを映した内容といえるでしょう。

父の性的暴力、母のネグレクトを受けるこの少女の名は、ヘレン・ポター。ビアトリクス・ポターの正式名であるヘレン・ビアトリクス・ポターのファーストネーム、ヘレンと同じなので、作家のポターに親近感を抱いているのです。

1 人で家を出て町で危険な体験をしたり、人に助けられたりするなかで、もう一度親と向き合う覚悟ができ、湖水地方で暮らすことを宣言します。一見、人生の「敗北者」となった少女が、作家のポターに自分を重ね、自分で自分を語る力を得て、再び前に踏み出す物語です。

細部や表情が細かく描き込まれたコマ割りの絵は、文章とは異なる感覚を刺激し、物語に引き込む力を持っています。これも翻訳がないので残念なのですが、グラフィックノベルで少女の微妙な心理を描いたというのが、注目すべきところかもしれません。

・『私は売られてきた』

次は、アメリカの作家パトリシア・マコーミック（Patricia McCormick）の『私は売られてきた』（2006, 紹介資料リスト 14）です。

これは、ネパールからインドへ売られた少女ラクシュミの物語です。貧しい親にとって女の子は売ってお金を得るための「物」でしかありません。貧しいのに遊び人の父親によって、12歳で売春宿に売られたラクシュミは、同じ境遇の少女、宿の女将、見て見ぬふりをする警官、体を求める男たちの様子など､幼くしてさまざまな世界を見ます。苦しい話ではあるのですが、彼女が強く生きていく、そしてこのような国があるのだということを伝えたいという作者の思いが見えます。作者のマコーミックは､ジャーナリストでもあるヤングアダルト文学作家です。

・「毒になる親」まとめ

『チューリップ・タッチ』はナタリーの視点で語られますが、本当の犠牲者はチューリップです。いずれも心が痛む話ですが、目を背けることはできません。親のネグレクトや暴力から逃れる道は険しいですが、可能性はゼロではなく、声を上げることが大事になります。

作品の結末はさまざまで、抑圧を受けた親から自立し、自らの生きがいを見つける話は、光が感じられます。こういった作品を読んだ人たちが、自分らしく生きる道を見つけられればと思います。

Ⅲ　ヤングケアラー

ヤングケアラーという言葉は、最近よく耳にする言葉です。これは、通学や仕事のかたわら、障害、病気のある親やきょうだい、祖父母などの介護をする 18 歳未満の子どものことをいいます。介護のために学校を休みがちになり、学業が遅れることもあります。日本ではまだ認識が浅く、調査が始まったばかりで、実態の把握も十分とはいえません。また、ヤングケアラーという言葉について、法令上の定義がされていません。

そもそもヤングケアラーは、その実態が表に出ない場合もあり、陰の苦労が取り上げられるようになったのは最近のことです。もちろん、昔から家庭内の手伝いや世話はありましたが、度を超えているのが現代の問題です。

作品はいくつかご紹介できるものがありますので、見ていきたいと思います。隠れた現実にようやく光が当たりつつあるところで、作品数はまだ少ないですが、古い作品で現代に通じるものもありますので、あわせてご紹介していきます。

・『ゆりの花咲く谷間』

最初は古い作品です。ベラ＆ビル･クリーバー（Vera & Bill Cleaver）の『ゆりの花咲く谷間』（1969, 紹介資料リスト 15）というアメリカの作品です。

アパラチア山脈のふもとに住む、極貧の白人一家の物語。主人公のメアリー・コールは、とても頭が良く、気が強く健気な少女で、瀕死の父と、きょうだいの世話をしています。彼女は父に、自分が死んだら家族だけで山奥に埋めてほしいと言われています。また、「ルーサー家の子どもであるという誇(ほこ)りを失(うしな)わぬこと」「他人(たにん)から施(ほどこ)しを受けないこと」そして「（姉の）デボラを（地主の）カイザー・ピースと結婚(けっこん)させてはいけない」という約束をしています[6]。彼女はこのお父さんの言葉をなんとか守っていこうとします。

6　ベラ・クリーバー 等著, 井上みどり 訳『ゆりの花咲く谷間』富山房, 1973, p.13.

時代は20世紀半ばですが、こうした山奥に住む極貧の家はたくさんあったのだそうです。この物語の家庭は、お母さんはすでに亡くなっていて、瀕死のお父さんを看病して、姉、弟も含めた一家をとりまとめるメアリー・コール（中学生くらいの年齢です）は、まさにヤングケアラーです。お父さんの病気を周りに知られると、施設に入れられ子どもたちがバラバラになってしまい、一家は分散してしまいますから、隠しているのです。

では彼女たちがどのように食べて生活しているのかというと、家には何もないので薬草をとってきて、わずかなお金にすることで生活しているのです。極貧の一家のつらい話ですが、メアリー・コールが上手に知恵を働かせ、地主のカイザーを利用して必要な物を手に入れたり、おいしい食べ物を手に入れたりします。この少女はなかなか機転が利く面白い子なのです。お父さんとの約束を守り、お姉さんをカイザーと結婚させまいとしてあの手この手を打ち、最後には自分が結婚相手になるからお姉さんのことは忘れろと言ったりするなど、笑わせてくれます。

亡くなったお父さんを自分たちで土に埋めなければならないというような極貧の一家のシビアな話と、少女が機転を利かせる傑作な部分が混ざっていて非常に面白い作品です。父の期待を担い家族を守るヤングケアラーである少女の、生きぬくたくましさにばかり目が行きがちで、大変な状況であるのを忘れがちなのですが、こうしたヤングケアラーを描いた作品が半世紀も前に出ていたのです。

・『Xをさがして』

先ほどLGBT差別のところでご紹介した『九時の月』の作者、カナダの小説家デボラ・エリスの『Xをさがして』（1999, 紹介資料リスト16）も、貧困にあえぐ一家のお話です。

元ストリッパーの母親と、発達障害児の双子の弟たちと暮らす少女カイバーは、母親が働きに出ている間、双子の世話をしなければなりません。弟たちはかわいいですが、時には手に負えなくなることもあります。

冬なのに夏の服を着ていたり、粗末な服を着たりという状況のカイバーは、学校でいじめに遭っています。そんな中、カイバーは公園で謎の老女Xと出会います。カイバーは、Xがお腹を空かせているようなのでサンドイッチを分け合ったり、2人分のサンドイッチを持っていって一緒に食べたりします。弟たちの世話やアルバイトに明け暮れるカイバーの生活は本当に大変で、まさにヤングケアラーですが、謎のXと過ごす短い時間が癒やしになります。

成長して次第に重くなる弟たちの世話はもう限界。ソーシャルワーカーの助けを得て、弟たちは郊外の施設に入居することになります。カイバーと母も施設の近くのアパートに引っ越し、いじめからも解放されて家族の絆を守ることができるという明るい兆しが見えるお話です。

児童文学のなかでは、ソーシャルワーカーはマイナスな存在として出てくることが多く、「ソーシャルワーカーに見つかったら大変」「家族がバラバラにされてしまう」といった存在でした。しかし、この作品ではソーシャルワーカーをはじめ社会福祉による援助にも光が当てられています。

実は、カイバーをずっと支えてくれるXの存在は、最後まで明らかになりません。実際に読んでみて、何か分かることがあるか、ぜひ確認してみていただければと思います。

・『ひとりぼっちのスーパーヒーロー』

次にご紹介するのは、カナダの作家マーティン・リーヴィット（Martine Leavitt）の『ひとりぼっちのスーパーヒーロー』（2004, 紹介資料リスト17）です。

貧しい母子家庭の中学生の男の子、ヘックが主人公です。ヘックのお母さんはすぐに精神不安定になる精神疾患を患っています。ある日、母が外に出たまま、待っても待っても家に帰ってきません。ヘックは、スーパーヒーローならきっと何かできるはずと思い、スーパーヒーローになった気持ちでなんとか1人でお母さんを探そうとします。彼はお腹も空いているし、歯医者さんに行くこともできないので虫歯が痛みますが、空腹と歯痛に耐えながら1人で母を探しに悪戦苦闘する様子が描かれます。

お母さんのことを幼いときからずっと守り続け、世話をしてきたヘックですが、これは、お母さんの状況が周囲に明らかになってしまうと、バラバラに施設に入れられて離れ離れになってしまうという危機感が理由です。しかし、今回ばかりは途方に暮れてしまいます。

絵の得意なヘックは、スーパーヒーローの絵をよく描くのですが、そのスーパーヒーローに自分を重ねて、ヒーローになりきった気分でお母さんを探そうとします。しかし、どんどん難しい状況に陥っていきます。途中で知り合った、障害があり自殺願望が強いとある少年が自殺するという事件を体験してしまい、ショックと空腹と歯痛で、ヘックはついにダウンし、病院に運ばれます。ところが、幸いにもそこで町を徘徊（はいかい）していて病院に収容されたお母さんと巡り会うことができたのです。また、絵のうまさが認められて、ちょっと明るい未来が開けてきそうだという様子も見えてきます。

ヘックは厳しい状況のなかでも必死に解決しようとするのですが、それが裏目に出てしまい、子どもが1人で親の面倒を見ていこうとすることの大変さを表していると思います。ヘックの空回りは読者の笑いを誘いますが、実は非常に大きな苦労を抱えているということも伝わってきます。

・『怪物はささやく』

『怪物はささやく』（2011, 紹介資料リスト18）は、原作者であるシヴォーン・ダウド（Siobhan Dowd, 1960-2007）が執筆中に亡くなってしまい、パトリック・ネス（Patrick Ness）が引き継いだ作品です。

これもシビアな作品です。末期がんの母の世話や、学校でのいじめで追い詰められ、母親に対し早く亡くなってほしいとまで思ってしまう少年の前に、不思議な大木のイメージが現れて、物語を語ります。そして、大木は少年に、自分の物語が終わったら少年自身の物語を語るように言います。少年は最初、そんなことはできないと思いますが、母や自分のことを語っていきます。そうすることによって、客観的な視点から冷静に自分を見つめ直し、精神的な苦痛から解放されていきます。そうした深刻な内容がイラストと共に語られる、とても思い切った作品だと思います。

・『レモネードを作ろう』

続いて、これは少し古いですが、ヴァージニア・ユウワー・ウルフ（Virginia Euwer Wolff）の『レモネードを作ろう』（1993, 紹介資料リスト19）です。ヤングケアラーという概念が登場する以前の作品です。

16歳で幼い息子を育てるジョリー。彼女のところにベビーシッターに行った中学生の女の子ラヴォーンの目を通して、男には逃げられ、仕事にも出られない若い母親の窮状が語られていきます。ジョリーは学校教育を中断していますから、読み書きもままなりません。ヤングケアラーとは少し違いますが、子どもの世話に縛られて、さまざまな機会を失っている点は同じです。

ラヴォーンが自分の母親に相談しますと、そうした教育の機会を失った若い母親たちをサポートする夜間学校があるから行ってみてはどうかという話をしてくれます。当初、ジョリーはそんなことはできないと思いますが、夜学では子どもの面倒を見てもらえる体制も整っていることが分かり、通ってみることになります。これまで教育を受けられなかったことから契約書もきちんと読めなかったジョリーですが、状況が徐々に改善していくのです。そうした社会的なサポートの存在を教えてくれる作品でもあります。

『レモネードを作ろう』というタイトルには、酸っぱいレモンも少し工夫して甘い砂糖を入れればおいしくなるように、厳しい生活もちょっとした工夫次第で新たな道が開けるというメッセージが込められています。

・『with you』

日本の作品から、濱野京子の『with you』（2020, 紹介資料リスト 20）をご紹介します。これは新しい作品で、まさにヤングケアラーを意識して書かれた作品です。

主人公の中学生、悠人は、夜のジョギング中に公園でブランコに乗ってぼんやりしている少女を見かけます。悠人はおかしいなと思うものの、知らない女の子に声をかけるのははばかられて黙って通り過ぎます。何度か見かけたときに悠人が少女に声をかけると、彼女は息抜きのために来ていると言います。次第に打ち解けると、少女は、病気の母親の介護と小さな妹の世話をしていて非常に大変であること、父は単身赴任で不在であり少女がつらい思いをしている状況を詳しく知らないのだと自身の状況を話します。

少女は病気の母と幼い妹の世話と家事に疲れ果てて、夜の公園で少しだけ 1 人になってぼーっとしていたのです。別の日に悠人は学校帰りに彼女を見かけますが、昼間は友達と楽しそうにしています。悠人はそのギャップにビックリしてしまうのですが、少女が自分の苦労を友達には明かしていないのだということが分かってきます。友達に話してもあまり分かってもらえないと思っているのです。そして、自分だけで全てを背負おうとしています。苦しい状況を話す場が少ないことも、今の日本の現実かもしれません。

友達同士であることを隠したままダブルデートをする楽しい場面もあり、2 人は少しずつひかれ合っていきます。悠人が彼女のことを心配して自分のお母さんに「こういう子がいるんだけど」と話すと、区役所関係の仕事をしているお母さんはヤングケアラーのことを知っていて、彼女に支援体制のことなどを話してくれ、単身赴任中のお父さんにも状況を話した方がよいといったアドバイスをしてくれます。彼女のお父さんは事情を知って非常に驚きます。お父さんが単身赴任から帰宅するとお母さんは嬉しくてつらい状況を見せないようにしますし、妹もお父さんがいるとぐずらないため、お父さんには長女の苦しい状況が見えていなかったのです。話すことによってサポート体制につながり、少しずつ状況が変わっていく様子が描かれています。

この作品はおそらく、ヤングケアラーの現状を意識して書かれた日本で最初の作品ではないかと思います。淡いロマンスも織り込まれていて、読みやすく親しみやすい作品です。多くの方に読んでいただきたいと思います。

・*Tender*

次は英語の作品で、Eve Ainsworth の *Tender*（2018, 紹介資料リスト 21）です。日本ではまだ翻訳が出されていません。サブタイトルに How Much Would You Care? と付されていて、「どれくらいケアの気持ちを持っているか」と読者に問いかけています。

少年マーティは、家に認知症が進む母がいて、その世話をしています。少女デイジーは、病気の弟の世話で両親がつらい思いをしています。2 人は出会いひかれ合うのですが、お互いに自身の状況を隠し、「大丈夫」と言って付き合い始めます。しかし全然「大丈夫」ではありません。

物語は、2 人の様子、家庭の状況、心の中が交互に語られるかたちで、介護が行き詰まり、弟の病気が悪化してしまうなど、しだいに「大丈夫」が破綻していく様子を描きます。

つらく厳しい部分もありますが、ロマンスを交え、やがてお互いに理解し合う、優しさにあふれる作品となっています。先ほど取り上げた『with you』と同様に、ヤングケアラーへのサポート体制にも触れており、実用的な面も含まれています。

・*Can I Tell You About Being a Young Carer?*

最後にご紹介する、Jo Aldridge の *Can I Tell You About Being a Young Carer?*（2018, 紹介資料リスト 22）は、ハウツー本のようなものです。*Can I Tell You About...* シリーズというものがあり、この本ではヤングケアラーについて話が書かれています。イラストが多く薄い 50 ページ程度のパンフレットのような、絵本のような本です。

登場するのは、12 歳の少年ケアリー。多発性硬化症という難病を患う母の世話をしています。父がいなくて、母、ケアリー、弟の 3 人家族です。

病のために気持ちが落ち込むお母さんを精神的に支えながら、日常生活の世話もしていて、学校に行っても気が休まらず、自分の時間がどんどんなくなっていきます。

そのようななか、ケアリーはソーシャルワーカーから、家族の世話をする若者たちの集まりや、支援体制について教えられます。それらに参加し利用することで、仲間ができ、お母さんへのサポート体制も整い、不安が取り除かれていくのです。自分 1 人でつらい思いを抱え込んで苦しまなくても大丈夫なのだということが分かり、お母さんも楽になっていく。そういう可能性があるのだということが見えてきます。

文末には参考になるウェブサイトの紹介などがあり、非常に具体的でハウツー的な内容の本です。日本でもこういうものができるとよいのではないかと思います。

・「ヤングケアラー」まとめ

家族の介護をするヤングケアラーについて書かれた本は、ケアをする若者の苦労を扱った文学作品だけでなく、具体的な支援体制について述べた本もあります。そういったものが増えてくるといいと思いますが、優れた作品が出るのはこれからでしょう。

古い作品でも、ヤングケアラー的な役目を果たしている子どもが登場したり、それを支えるサポートシステムが存在することが描かれたりする作品があります。そうしたものも読む価値がありそうです。

ヤングケアラーという存在や、さまざまな状況を知ってもらうには、単なる情報の発信だけでなく、文学作品の登場人物に共感をしてもらうことが、状況を知り理解を促すきっかけになるのではないでしょうか。

おわりに

現代社会を生きぬく若者を描いた作品では、実にさまざまな状況が描かれ、いずれも意義深いものです。こうした作品を通して、多様性を受け入れた柔軟な生き方につながることを期待したいところです。

今回扱ったテーマは、現代になるほどリアリティが強まっているように思います。当事者たちの外に向けた声が強化され、読者に届きやすくなっているようです。ヤングアダルト文学として紹介していますが、若者だけでなく、ぜひ大人にも読んでほしいと思います。最近、大人の方もヤングアダルト文学を読んでいるという状況はありますが、これがさらに広がってほしいと思います。

紹介資料リストには、講義で扱った本以外にも関連図書を入れてありますので、ぜひ参考にしてください。

ありがとうございました。

ヤングアダルト文学の後先

ひこ・田中

Ⅰ　ヤングアダルトって？
　1　大人と子どもの狭間に立って
　2　ヤングアダルトから見た風景
　3　映画『理由なき反抗』
Ⅱ　ヤングアダルト文学の登場
　1　『アウトサイダーズ』
　2　『影との戦い』
　3　『アーノルドのはげしい夏』
　4　まとめ
Ⅲ　時代の変化
　1　『〝機関銃要塞〟の少年たち』
　2　『かかし』
　3　『海辺の王国』
　4　まとめ
Ⅳ　ヤングアダルトへ物語を供給する様々なメディア
　1　『機動戦士ガンダム』
　2　『新世紀エヴァンゲリオン』
　3　まとめ
Ⅴ　ヤングアダルト文学の現在
　1　『ドレスを着た男子』
　2　『サイモンvs人類平等化計画』
　3　『嘘の木』
　4　『ミスターオレンジ』
　5　『伝説のエンドーくん』
　6　『拝啓パンクスノットデッドさま』
　7　まとめ
Ⅵ　ヤングアダルト文学の未来

ヤングアダルト文学は子ども時代の要請により登場してきました。書き手にとって、それは書くフィールドが拡がったことを意味します。そこでは何がどう描かれ、子どもの本はどのような変化を遂げたのでしょうか？　読者にとってどのような意味があるのでしょうか？　最後に、今後の展望までをお話しできればと思っています。

Ⅰ　ヤングアダルトって？

こんにちは。「ヤングアダルト文学の後先」ということでお話をします。ひこ・田中と申します。よろしくお願いします。

後先ですから先があって後がある、つまりヤングアダルト文学が存在しない時代があり、そしてヤングアダルト文学が生まれてきたということになります。それは1960年代半ばくらいだと私は考えています。

ヤングアダルト文学が生まれるには何が必要か。その回答は当たり前になってしまいますが、ヤングアダルトの存在です。ヤングアダルトという層の出現がなければ、ヤングアダルト文学は生まれてきません。ヤングアダルトが生まれることによって、ヤングアダルトを描く文学、そしてヤングアダルトに向けて書く文学というものが生まれてきて、それがヤングアダルト文学になっていくのです。そういうわけで、ヤングアダルトとは何かということを、まず最初に簡単にお話ししていきます。

1　大人と子どもの狭間に立って

ヤングアダルトというのは、私は、大人ではない者だと思っています。そして、子どもではない者だとも思っています。つまり、大人ではない者、子どもではない者。「ではないもの」と「ではないもの」、2つの否定形の間にかろうじて成り立っているのが、ヤングアダルトだと思います。

分かりやすく言いますと、生殖年齢に達していても、大人とは見なされない存在です。昔であれば、だいたい生殖年齢前後になると大人扱いされて、奉公に出たり親の跡を継いだりして働き始めたのですが、その年齢に達していても、大人とは見なされない層が出てくるわけです。

大きな理由は学習期間の延長。日本では中学校までが義務教育ということになっていますが、今では高等学校まで行く子どもがほとんどで、多くが大学にも進学します。社会に出て働くまでの期間がとても長くなる。そうすると、その期間は大人とは見なされないけれど明らかに子どもとも言いがたい存在として立ち現れてくる、それがヤングアダルトです。私が中学生だった半世紀前は中学3年生の時に、就職クラスと進学クラスに分けられました。それくらい、就職する人が多かったのです。ところが今はほとんどそうではなくなっています。

2　ヤングアダルトから見た風景

では、そうしたヤングアダルトの視点からはどういう風景が見えているか。それを考えてみたいと思います。

もう子どもではないと思って動き始めると、大人からは「まだ大人ではないんだ」「まだまだお前たちは青い。10年早い、100年早い」「そんなことは稼げるようになってから言え」と言われてしまいます。それで、「そうか、私たちは大人じゃないんだ。じゃあ今までどおり子どものように振る舞おう」とした途端に、今度は「もうお前たちは子どもではないんだ。子どものようにいつまでもしているんじゃない」と叱られてしまいます。「いったいどうしろというのか」「われわれは、いったいどういう存在なのだ」。そう思うのがヤングアダルトです。ヤングアダルトにはロールモデルがないと言ってもいいかもしれません。

そのため、ヤングアダルトがどういう反応を見せるかというと、1つは大人への不信感です。それはそうです。大人のふりをしたら違うと言われ、子どものままでいようとしたら違うと言われ、「じゃあどうすればいいのか」と思っていると、「近頃の若者は分からない」と言われるのです。ヤングアダルトはどうすればいいのか分かりません。それで大人への不信感を抱きます。

一方、不信感だけではなくて、大人の世界、大人の社会に対する憧れもありますから、背伸びもします。大人への不信感を持ちながら、大人に憧れてもいるというわけです。

次に、ロールモデルがありませんから、常に「自分とは誰か？」「自分とは何か？」を考える存在でもあります。自分はいったいどうしていけばいいのか、自分というのはいったいどこから生まれてきたのか、自分はいったいどのように進んでいけばいいのか。そういうことを常に考えざるを得ない、そういう状況にあります。

そういう存在であることの不安感から、群れることも多くなります。私もそうでしたが、クラスメートや、遊びにいった先で知り合った連中とつるんでいろいろなことをしたものです。相手のことを親友のように好きかどうかは関係ありません。とりあえず、自分と同じような境遇、状態にある人たちと群れて、何とか安心するということです。自分とは誰かを考えるというのは、私は他の誰でもない自分であることを一所懸命主張したいという意味になりますが、それなのに全く正反対に群れてしまう。ここでも、ヤングアダルトという存在の「揺れ」というのがあるわけです。

そして、「揺れ」ているからこそなのですが、やたらとプライドも高くなってしまいます。プライドというのは何の裏打ちもないほど高くなっていきますから、自分は何者かというのも、その時代の、例えばファッションなり何なり、流行のものに合わせて強く主張しようとします。

もう 1 つ、大人への不信感からも来るのですが、正義感も強くなります。大人社会の中の矛盾やズルさ、そういうものを探し当てては糾弾、批判する。そうして自分を作り上げていこうとするのが、ヤングアダルトです。

まだ他にもいろいろあると思いますが、だいたいそんなところかと私は思っています。面白いことに、すでに大人になった私たちは、そういう時代をくぐってきたはずなのに、ヤングアダルト層を、たいていの場合は「近頃の若者は分からない」と首をひねります。このあたりに面白い秘密があるのでしょうけれども、そこを話すと長くなりそうなのでここでは飛ばします。とりあえず、経験をしたはずなのに分からなくなる、それが大人なのだと思っておきましょう。

3　映画『理由なき反抗』

ヤングアダルト文学を紹介する前に、映画の話をしたいと思います。ヤングアダルト文学が生まれる少し前に公開され大ヒットした作品です。ニコラス・レイ（Nicholas Ray, 1911-1979）監督の『理由なき反抗』。ジェームズ・ディーン（James Dean, 1931-1955）が主演した映画で、1955 年に封切られました。

17 歳の少年ジムは、自分が何者か分からず心がいつも不安定で、大人のふりをしたいからか酒を飲み、ケンカもします。それで親はしょっちゅう転校させています。最初の場面でも、ジムは転校したてでまだ学校に行く前に早速、夜中に酒を飲んでケンカをして、警察に保護されます。保護された先には、夜間外出で保護された少女ジュディや、仔犬を撃ち殺して連れてこられたプレイトウ少年がいます――プレイトウ少年は、両親がちっとも構ってくれず、乳母に育てられていますが、両親に自分のことを見てほしくて、過激なことをしているのです。そこで 3 人は知り合います。

ジムは補導課の刑事に呼び出されて、こう言われます。「君は我々を手こずらして、しまいに拘禁されることになるのを望んでいるんだ。どうしてだね？」[1] それにジムがどう答えるかというと、「どうしていやなんだろう」[2] と言うのです。そして「拘禁して下さい。誰かをなぐっ

1　Stewart Stern 脚色, 研究社時事英語研究編集部 訳註『理由なき反抗』（映画会話台本シリーズ）研究社出版, 1956, p.23.
2　同上, p.25. 原文は “I don’t know why”、つまり「自分でも分からない」ということ。

てやるんだ、何かやるんだ」[3] と泣きじゃくります。担当の刑事のアドバイスは、1955 年の作品だからか、とてもシンプルです。「その机でもなぐれ」[4]。ジムは、刑事の机のサイドを足で蹴り、拳で殴りますが、もちろんそんなことで気持ちが晴れるわけではありません。

彼は思い惑っている原因を刑事に話します。パパがママのお尻に敷かれているのが腹立たしいと。1955 年の作品ですからお許しいただきたいのですが、この後ジムはこんなことを述べます。「……父さんが一度母さんをなぐり倒すだけの勇気があったら、多分母さんも嬉しくなって、父さんにがみがみ小言ばかり言うのよすだろうと思うんだけど……僕はあんな男に決してなりたくない！」[5] ジムは、パパのような人間にはなりたくないわけです。つまり、息子である自分にとって一番近しいロールモデルであるはずの父親がロールモデルにならないことに、彼はおびえている。そして、夜な夜な酒を飲んでさまよっているのです。

次の日、早速、新しい高校で彼は不良グループにからまれてしまいます。その中には、少女ジュディもいます。そして、チキンと呼ばれ、チキンレースに誘われます。チキンレースというのは、崖に向かってお互いの乗った車を走らせて、どこまで崖に近いところで止まれるかというゲームです。ジムと不良グループのリーダーは、その日の夜、盗んだ車に乗ってレースを開始します。ジムはうまく車から飛び降りますが、相手はドアノブに服が引っかかってしまい、飛び降りることができずに崖から落ちて死んでしまいます。

1 人の人間が死んだ、そして盗んだ車で遊んでいたということで、ジムはその場から逃げ出していきます。ジムにひかれているジュディも一緒に逃げていきます。その場を見ていたプレイトウ少年の案内で、3 人は人の住んでいない屋敷にもぐりこみます。しかし、警察にその場所をかぎつけられて、屋敷を取り囲まれます。

ジムは、プレイトウが持っている拳銃をうまく言いくるめて預かり、中にあった弾をこっそり抜き去り、返します。そして、もはやここまでということで屋敷から出てきますが、止めるのも聞かずプレイトウが前に出て、拳銃を持っているのを見た警官が、彼を撃ち死んでしまいます。

不良グループのリーダーとプレイトウ、2 人の少年が亡くなってしまう。あまりのことに、心配でやってきたパパの足にしがみついてジムは泣きじゃくります。そんなジムを見て、パパは言います。「ジム、わたしを頼りにしていいよ。わたしを信用して。何が来ようと、これからは二人で当るんだ。誓うよ。さあ、ジム、立って。わたしも一緒に立ち上るよ。お前の望むような強い父さんになるから。さあ」[6]。ここで映画は終わります。

この作品では、ヤングアダルトらしい青年が出てきますが、彼の前で 2 人の少年が死ぬことで、彼はすっかりしょげてしまい、そして父親が突然「男らしく」なることによって、まるで子どものように泣きじゃくってしまうということになります。これは、本当に初期の、生まれたばかりのヤングアダルトが、ある意味自滅していく姿です。大人社会の前で負けていくといってもいいかもしれません。大人がしっかりしさえすれば、ヤングアダルトは子どもに戻る。そういう理解のもとに作られた映画といえると思います。

Ⅱ　ヤングアダルト文学の登場

それから 10 年ほど経って、ヤングアダルト文学が登場してくるわけです。

3　同上, p.25.
4　同上, p.25.
5　同上, p.27.
6　同上, p.141.

1 『アウトサイダーズ』

映画『理由なき反抗』が 1955 年で、S.E. ヒントン（S. E. Hinton）の『アウトサイダーズ』（紹介資料リスト 5）という作品が 1967 年[7] です。ここではどんな風に物語が展開するかというと、語り手はポニーという 3 人兄弟の末っ子です。彼はグリーサーというグループに属しています。貧しい世帯の子どもたちが集まったグループで、グリースというものをつけています。一方、中産階級の子どもたちのソッシュというグループがあります。ソッシュとグリーサーは、いつもケンカばかりしているのです。何のためにケンカするかは、本人たちも分かりません。ただ、会うとケンカする。

ポニーは、ソッシュの 1 人であるチェリーと出会います。チェリーは「あたしたちはもっとめんどくさいの。斜に構えすぎて、なんにも感じなくなるぐらい。ほんとのことなんてなんにもないの」[8] みたいなことを言います。

ポニーと、親友のジョニーが一緒に歩いていると、そこにソッシュのグループがやってきます。ポニーがチェリーと仲良くしていたことも知っているソッシュのメンバーは、早速ポニーとジョニーをいじり始めます。それが段々過激になっていき、ポニーが危ないと思ったジョニーは、ソッシュのリーダーのボブをナイフで刺し殺してしまいます。

ボブについて、同じソッシュのランディはこんな風に言っています。「あいつはなんとか『だめ』っていわせようとしたんだが、結局できなかった」[9]。言わせようとした相手は両親です。ボブは悪いことをして、親に『だめ』って言ってほしかった。「だれかにこれはやっちゃいけないとかって禁止されることで、自分が安心して立ってられる場所を作ってもらいたかったんだ」[10]。まさにヤングアダルトです。自分がどうあればいいか分からない、自分が誰か分からない、だからボブは親の禁止事項をするわけです。そして、そんなことは『だめ』だと親に言ってほしいのだけれども、親が言ってくれないから、ますます過激になっていく。これは、『理由なき反抗』のジムを思い起こさせます。

さて、ジョニーが人を殺しましたから、ポニーとジョニーは逃走するのですが、その途中に、火事に遭った家がありました。彼らは、閉じ込められている子どもたちを助け出します。ポニーはなんとか逃げ出せたのですが、ジョニーは奥まで子どもを助けにいったために、瀕死の重傷を負い、そして最終的には亡くなってしまいます。

ポニーは思います。「誇れるものがワルであることと、脂ぎった髪だけだなんて、いったいどんな世界なんだ？」[11] 落ち込むポニーに、長男のダニー（もう働いていますが、かつてはグリーサーでした）が言います。「いいか、おまえの頭と成績なら奨学金が取れるんだぞ。そうすりゃ大学だって行かしてやれる」[12]。ダニーは、ポニーを大学に行かせてやりたくて、早くから働いているのです。なのに……「おれがいいたいのは宿題のことなんかじゃない。おまえのその無気力な生活だ。いいかげんに抜け出したらどうだ、ポニー」[13]。ポニーは、こう思います。「あんまりにも問題が大きすぎて、一人じゃどうにもならない……だれかこっち側のやつが、自分たちのことを話すんだ。そうすれば、まわりの人間たちも少しはわかってくれて、髪をグリースで固めてるってだけで判断しようとは思わなくなるかもしれない」[14]。そうしてポニーは、

7 以降、特に断りのない限り、書籍の出版年は原著の出版年を示す。
8 S.E. ヒントン 著, 唐沢則幸 訳『アウトサイダーズ』あすなろ書房, 2000, p.62.
9 同上, p.185.
10 同上, p.185.
11 同上, p.210.
12 同上, p.272.
13 同上, p.272.
14 同上, pp.281-282.

学校の作文を書き始めます。真夜中、「いても立ってもいられなくなって」国語の教師に電話をかけます。

「……あの作文なんですけど、長さはどれくらいなんですか？」
「うん、まあ、五枚以上かな」
……
「もっと長くてもいいですか？」
「もちろん。好きなだけ書いてかまわんよ」[15]

そしてポニーが書き始める最初の文章が、この『アウトサイダーズ』という物語の最初の文章になっています。つまり、この『アウトサイダーズ』という物語は、ポニーがヤングアダルトのことを大人たち、周りの人たちに知ってもらいたくて書いた作品だということが分かって、話は終わるのです。

ここでは、『理由なき反抗』と違って、ポニーとジョニーが火事に遭った子どもを助けるといった、ヒーローになるようなシーンがあったり、ポニーが自分たちのことを理解してほしいというとても真面目なメッセージを伝えたり、そういう風にして立ち直っていく姿がありますから、『理由なき反抗』から一歩進んでいるといえるかもしれません。そして、大学に進んで大人になれといった兄の言葉は、大人社会というのが、ヤングアダルトにとって圧でもあるが、憧れとしても存在していることを示しています。

2 『影との戦い』

次にお話しするのは、ル＝グウィン（Ursula K. Le Guin, 1929-2018）が書いた「ゲド戦記」の第 1 巻である『影との戦い』（紹介資料リスト 1）。1968 年の作品です。

貧しい村に生まれたダニーは早くから魔法力を発揮し、まじない師の知っている魔法を瞬く間に自分のものにし、魔法学校に入学します。そこでも彼は驚くべき速さで魔法を習得し、授業の遅さにいらだち、傲慢になり、大嫌いな先輩との言い争いの末、冥界から影を呼び出してしまいます――それが何なのかも知らないままに。学校での修行を終え、ある村へ竜退治に送られた彼は、人間を襲わない約束を竜から取り付け、早くも“竜王”の名を得ます。ところが、正体不明の影に追われ、逃げ続けることになります。

この世界の重要な特徴は、すべての物には「真の名」があり、それを知られてしまうと支配される危険性があること。ですから、よほどのことがない限り、自分の真の名を誰かに教えることはありません。ちなみにダニーの通称はハイタカであり、真の名がゲドです。ところが、その影はハイタカの真の名がゲドであることを知っていて、彼を支配しようとします。しかし、ゲドの教師たちは皆、その影には真の名はないという。そんなことあるわけがないのに。

ゲドは影から逃げ続け、最後にはそれと相対するしかなくなってしまいます。影はゲドを支配しようと、真の名を呼びます。「ゲド！」

そして、ハイタカもまた、影に対して呼びます。「ゲド！」

つまり、影とは、ゲド自身の影であったのです。だから、影が持っている名はゲドであり、当然、それは教員が探しても名前がないことになっていました。

そうして「ゲドは杖を取りおとして、両手をさしのべ、自分に向かってのびてきた己の影を、

15　同上, p.282.

その黒い分身をしかと抱きしめた。光と闇とは出会い、溶けあって、ひとつになった」[16]。全(まった)き人間になるというところで、この物語は終わります。

「おれはひとつになった。もう、自由だ」とゲドは言い、「それから彼はうつむいて両腕に顔をうずめると、子どものように泣きだした」。「ゲドは勝ちも負けもしなかった。自分の死の影に自分の名を付し、己を全きものとしたのである」[17] と書かれています。

この作品では、先ほどから話している「自分とは誰か」という問題が描かれ、自分の影を受け入れ自分自身を統合することによって初めて分かるのだと示されます。もちろん、『アウトサイダーズ』がそうであったように、ゲドはヤングアダルトから大人になっていきます。その姿は、「ゲド戦記」の 2 巻目、3 巻目で見ることができるでしょう。

3 『アーノルドのはげしい夏』

次にご紹介したいのは、J.R. タウンゼンド（John Rowe Townsend, 1922-2014）の『アーノルドのはげしい夏』（紹介資料リスト 2）。1969 年の作品です。

貧しい砂州の村スカールストンに住む 16 歳のアーノルド・ヘイスウェイトは、臨時の砂州案内人として働きながら、養父アーネストの経営する宿屋を手伝っています。自分の出生に疑問を抱きながらも、日々の生活に不満を抱いているわけではありません。

ところが、ある夏。実業家を名乗る男がやってきて、アーネストの宿に泊まります。男の名前はアーノルド・ヘイスウェイト。アーネストの親戚だと言って彼の世話をします。自分こそがアーノルド･ヘイスウェイトだから、自分がこの宿を継ごうとするのです。そうなると、（主人公の）アーノルドは、自分が誰なのかが全く分からない状態になってしまいます。

そこから話が展開していくのですが､最終的にアーノルド･ヘイスウェイトを名乗る男と（主人公の）アーノルドは砂州でもみ合うようにしてケンカをし、やがて男は波に飲み込まれて死んでしまいます。身分証明書を見ると、男の名前はアーノルド・ヘイスウェイト。男は本当にアーネストの親戚だと分かります。

アーノルドは言います。「あの男は、アーノルド・ヘイスウェイトとして埋葬された。ところが、おれは、さっぱり素性が知れない……どこの馬の骨かわからない」[18]。

それに対してアーネストは言います。「おまえこそ、アーノルド・ヘイスウェイトなんだ。今までも、これからもな。スカールストンにゃ、アーノルドの席は一つしかない。おまえがそこに収まるんだ……青二歳くさく、ぐちをいうのをやめろ」[19]。

そうして、素性を心配していたアーノルドは、アーノルドという名前を得て、日々は変わらず過ぎていくというところで、物語は終わります。

4 まとめ

ここまでの 3 作についてまとめます。

ポニーボーイは 2 人の死の果てに、自分たちのことを分かってほしいと、ヤングアダルトのアイデンティティについて考え、物語を書き始めます。ゲドは、自分自身の影を受け入れることで、全き人間となります。アーノルドは、自身をアーノルドとして受け入れることで、平穏な日々を取り戻します。

---

16 ル＝グウィン [著], 清水真砂子 訳『影との戦い』（ゲド戦記）岩波書店, 2006, p.297.
17 同上, p.299.
18 J.R. タウンゼンド 作, 神宮輝夫 訳, グラハム・ハンフリーズ 画『アーノルドのはげしい夏』（岩波の少年少女の本）岩波書店, 1972, p.306.
19 同上, pp.306-307.

つまり、彼らは誰もが自分を得ることができるわけですけれども、どう納得するか、受け入れるかは、ある意味で大人社会によって保障されているわけです。大人社会の壁はしっかりとしているといってもいいと思います。

こうしてヤングアダルト文学が登場してきますが、それらは自分の語りで、または主人公の目線で世界と自分を眺めるようになります。特にここで取り上げた 3 作のように、自分自身とは何かを考えるところから世界を眺める方法は、常に自省しながらのものになります。児童文学が持つ良い意味での楽観性とは違う、社会とアクセスをし、自分は何者なのか、自分はこれでいいのかということをいつも考えながら、自分と向かい合うのです。

とはいえ、この時代の作品ではまだ大人社会の力は強く、彼らはそれを受け入れることで、かろうじて大人への道を得るわけです。

Ⅲ　時代の変化

こうしてヤングアダルト文学の時代が始まるわけですけれども、時代が現在に近づいてくるにしたがって、社会も世界も当然変わりますし、ヤングアダルトも変わるでしょうから、ヤングアダルト文学も変わっていきます。とはいえ、そのことをお話ししていくと、とても時間がありませんから、ここでは 1 人の作家の作品を 3 点取り上げて、簡単に変化についてみていきたいと思います。その作家とは、イギリスのロバート・ウェストール（Robert Westall, 1929-1993）です。

1 『〝機関銃要塞〟の少年たち』

1 作目は、『〝機関銃要塞〟の少年たち』（紹介資料リスト 4）。1975 年の作品。『アーノルドのはげしい夏』から 6 年後です。

主人公はチャス。舞台はイギリスの海辺の町。第二次世界大戦の真っただ中、大人たちはいつドイツ軍がここから上陸してくるかと、戦々恐々としています。そんな彼らを見て、子どもたちはうんざりするのです。大人たちも、子どもたちの前で大人のふりをする余裕はとてもありません。その意味で、子どもたちは自由に遊んでいます。彼らのコレクションはカードゲームなどではなく、薬きょうや飛行機の残骸などの戦利品です（自分で獲ったわけではないのですが）。

ある日、チャスは墜落したドイツ軍機から無傷の機関銃を手に入れます。これほどのコレクションはありません。とはいえ、機関銃を拾っただなんて自慢して回るわけにはいきませんし、重くてとても 1 人では運べません。そこで、チャスは仲間を集め、大人たちが気付かない間に、海岸沿いに要塞を作り上げます。大人が頼りないのだから、この要塞に機関銃を置いて、もしドイツ軍がやってきたら、この町を救えるのは大人ではなく自分たちなのだというのです。ここには、戦時下の受身の犠牲者としての子どもはいません。大人と同じように戦時下を生き、愛国心を高ぶらせているのです。

彼らは、ドイツ軍兵も「捕虜」にします。そんな簡単に捕まえられるかというと、機関銃と一緒に（普通の）銃も手にしていたのですが、ドイツ軍兵はそれがいつでも撃てる状態になっていたことに気付き、それでは子どもたちが大変なことになると思って、抵抗せずに捕虜になったのです。そして、子どもたちが要塞の中で寝ている間に、そっと拳銃の安全装置をかけます。つまり、戦時下で子どもたちの親である大人たちはとても子どもたちの面倒を見ることができず、ほったらかしにも関わらず、敵兵の大人が子どもたちを見守るという、奇妙な構図になっていきます。

ついに兵が来ます。子どもたちは機関銃を撃とうとしますが、実は敵兵ではなく味方の兵がやってきていたのです。その振る舞いが大人たちにも見つかってしまいます。たちまち大人たちは、子どもたちの前で大人として振る舞い始めます。彼らを叱るわけです。しかも、自分の子どもではなく他人の子どもの悪口を言う親もいます。それに対して、子どもの 1 人は言います。「くそでもくらえ」[20]。作者はそれ以上何も付け加えず、物語は終わります。

これは、大人社会が戦争によってどう崩れていくかを、ヤングアダルトの視点で描いているのです。ヤングアダルトの視点で描くことで、戦争の顔がクリアに見えてきます。

ここで、大人たちの姿が崩れ始めているのが分かると思います。ただし、それは戦時下であったからであり、チャスたちの所業が明らかになった途端、大人たちは彼らを叱ることができます。それくらいの大人の力はあるということです。

2 『かかし』

それから 6 年後、1981 年に、『かかし』という作品が出ます。

主人公はサイモン。彼は職業軍人だったパパが大好きです。パパは亡くなってしまいましたが、今でも尊敬しています。ところが、ママは再婚しています。それもパパと正反対、小太りで皮肉屋の絵描きのジョーと。

夏休みにサイモンは寄宿舎を出て、ママとジョーの家に行きます。すでに小さな妹はママとジョーと暮らしていて、サイモンが行ったときには 3 人家族のようになっています。そのこともサイモンは気に入らず、家の中で孤立します。2 階の部屋があてがわれるのですが、その下がママとジョーの寝室です。そこでママがパパの悪口をジョーに話しているのを聞いてしまいます。

完全に怒り狂ったサイモンは、パパの墓のある方に向かって助けを請います。こんなところにはもういたくない、何とかしてほしいと。サイモンはパパに訴えかけたつもりでしたが、ちょうど同じ方向に水車小屋があって、そこはかつて、三角関係のもつれで殺人があった場所でした。サイモンの願いはそこに届いてしまいます。小屋の前に立っている 3 本のかかしが動き始めます。サイモンの願いを叶えるために――サイモンの家族を殺すべく。

そのことを、家族は全く知りません。知っているのは、サイモンだけです。最終的に、サイモンがどうするかというと、とても腹を立てていたにも関わらず、彼はママと妹とジョーを助けるために、3 人を受け入れます。だから、もう殺しにくるのはやめてほしいと。そうして平穏な日々が戻ってくるのです。

ここでは、サイモンが家族の生き死にを迫られて、本当は好きでもなかった家族のことを受け入れます。

3 『海辺の王国』

それから 9 年後、1990 年に『海辺の王国』という作品を出します。これも戦中の話です。

主人公はハリー。ロンドンに住んでいますが、彼は一家の中で一番大事なものが入っている箱を、もし空襲があったら一番に持って逃げる役目を担っています。

空襲が来ます。ハリーは箱を持って逃げ、防空壕（ごう）に入ります。しかし、いくら待っても家族は防空壕に来ません。そして、消防隊から、家族は空襲により命を落とし、家は跡形もなくなってしまったということを聞きます。自分だけが生き残ってしまったハリーは、大嫌いなおばの

20　ロバート・ウェストール 作, 越智道雄 訳『“機関銃要塞”の少年たち』（児童図書館. 文学の部屋）評論社, 1980, p.300.

家に預けられる可能性が高い。ですから、彼は箱を抱えて逃げ出します。こうしてハリーのさまよう日々が始まります。

その後の話の中で、いろいろな大人が出てきます。最終的に彼がたどり着いたのは、穏やかな 1 人暮らしの男性、マーガトロイドの家です。そこで暮らすうちに、ハリーはマーガトロイドを父親にしたいと思うようになります。マーガトロイドもまた、ハリーを息子にしたいと思います。しかし、ハリーはともかく、マーガトロイドは大人ですから、きちんと手続きをしないといけないと言い、ロンドンに行きます。すると、ハリーの家族は死んでいなかったのです。消防隊は、隣の家と間違えていたのです。

真実の家族の元へ、ハリーはマーガトロイドと一緒に行きます。マーガトロイドは、家族の元に戻らないといけないよと言います。

ハリーを見た父親は怒ります。ハリーが箱を持っていってしまったために自分たちはどれだけ苦労したか。そして、物語はこのように語ります。

> ハリーは成長した。家族はちがう。ハリーは、この家にははいりきれないほど、大きくなってしまった。……パパはそれを知っている。それをにくんでいる。[21]

つまり、父親の知らないところで勝手に成長してしまったハリーのことを、父親は憎んでいるというのです。そのことをハリーは理解しますが、それでも家族の元に戻る必要があるのです。そうしてハリーは家族の元に戻りますが、いつか大人になったとき、必ずマーガトロイドの元へ帰ろうと思い、物語は終わります。

ここではもはや、親が子を「にくむ」こともあるということが描かれています。

4　まとめ

ここまでの 3 作品をまとめてみます。

1975 年の『〝機関銃要塞〟の少年たち』では、戦争で大人たちが右往左往しています。これは戦争になればそうなるということを描いているわけですが、逆に言えば、戦争でなければ大人たちはチャスたちの前で大人として振る舞うことができるのです。それに対してチャスたちができるのは「くそでもくらえ」と言うことくらいです。

1981 年の『かかし』では、サイモンのせいで、家族が邪悪な存在たちに殺されかけます。つまり、サイモンは家族に対してそれだけの力を持っているわけです。けれど、彼にある選択肢はただ 1 つ。家族への憎しみを捨て、彼らを受け入れること。彼は、ある意味、憎しみを抱いた罰を受けるのです。とはいえ、選択肢をサイモンが握っていることは重要です。

1990 年の『海辺の王国』では、ハリーはとりあえず本当の家族の中で生活することにしますが、大人になったら、自分が選んだ父親、マーガトロイドと暮らそうと思っています。そして、親が子どもを憎むこともあり、子どもが親を捨てることもあるということが描かれます。

以上、ウェストールの作品を見てきましたが、徐々に大人の力が失われ、ヤングアダルトが自身でものごとを選択しようという方向に変わってきています。もちろんこれは 1 人の作家の作品の変化に過ぎませんので、確実にそうであるとは言いませんが、こうした流れがヤングアダルト文学全体で起こってきたのは確かです。その中でもウェストールは少し先を行っていました。

21　ロバート・ウェストール 作, 坂崎麻子 訳『海辺の王国』徳間書店, 1995, p.251.

時代が近づくにつれ、大人（親）の力が徐々に薄れていき、子どもは庇護（ひご）される対象でも、抑圧される対象でもなくなっていきます。

こうしてヤングアダルト文学の中のヤングアダルトたちは、ある意味、解き放たれていくと言ってもいいかもしれません。

Ⅳ　ヤングアダルトへ物語を供給する様々なメディア

ここで少し話を変えて、ヤングアダルト文学以外のものについて、少しだけお話ししておきたいと思います。

物語というものは、何も文学だけが供給するものではありません。マンガ、アニメ、ゲームなどがあります。これらは、等しく価値のあるものです。文学だけが優れているわけでもなければ、マンガの方が面白いというわけでもなく、アニメの方が先を行っているわけでもありません。それぞれがそれぞれのかたちで、子どもやヤングアダルトの作品を供給しているだけです。

1　『機動戦士ガンダム』

アニメでいうと、『機動戦士ガンダム』が 1979 年に出てきます。この作品の最初の想定マーケットは子どもでした。小さな子どもたちに、ガンダムというモビルスーツのプラモデルを売ろうとしていました。ところが、全く視聴率は伸びずに、当初の予定から 10 話ほど減って打ち切られることになります。しかし、打ち切られた途端、ものすごい反応があります。どこからかというと、ヤングアダルトです。つまり、スポンサーは子ども向けのアニメとして『機動戦士ガンダム』を考えていましたが、この作品は、実はヤングアダルト向けだったのです。これは、制作者側がどうかは分かりませんが（制作者側はそういうことも織り込み済みだったのかもしれません）、スポンサーは小さな子ども向けと考えていたということです。

この作品は、戦争で大人の身勝手さを知った子ども集団の戦いの日々を描きます。まるで『〝機関銃要塞〟の少年たち』のようです。

子どもたちが暮らしているスペースコロニーの中に、敵のモビルスーツがやってきて、大人たちは右往左往し、子どもたちと一緒にとりあえず大きな母船に避難します。ところが、戦いに出た軍人の大人たちはみんな死んでしまい、母船を動かし、そして戦えるのは子ども兵だけになってしまいます。こうして母船は敵に追われたまま、長い旅に出て、戦いの日々が始まることになります。

一般の大人たちは不安だから、早く地球のどこかに降ろしてくれといいます。それで仕方なく大人たちを降ろして、残った子どもたちは敵と戦わざるを得なくなります。

2　『新世紀エヴァンゲリオン』

一方、『新世紀エヴァンゲリオン』はテレビ放映が 1995 年に始まりましたが、制作者側が物語をなかなか終わらせることができず、2021 年春にようやく、新劇場版『シン・エヴァンゲリオン:||』で完結します。こちらのターゲットは最初から中学生以上でした。

「エヴァンゲリオン」に乗り込めるのは、母親のいない 14 歳の子どもたちだけです。例えば、「エヴァンゲリオン初号機」は、シンジの母親が最初に乗り込んで、そのままコアの中に溶け込んでしまっています。ですから、シンジしか乗れません。シンジは戦いたくないのですが、父親の命令に従って嫌々戦います。すると、どんどん精神的に追い詰められていきます。自分はそんなことしたくない。自分が誰か分からない。そういう姿です。

次第に明らかになってくるのは、実は父親は、アディショナル・インパクトという、人類全体が1つのかたまりになるような状態にしようとしていたこと。そのためにシンジも利用していたのです。なぜそのようなことをするかというと、愛する妻と再び一緒になりたいという父親のエゴです。父親のエゴによって、シンジは戦わされていたということです。最終的に、父親のエゴとシンジが向き合い、そしてそういう父親を許すことによって、父親はその野望を捨て去ることになります。本当はもっと複雑な物語ですが、簡単にいえばそういうことです。最後に、シンジに恋人ができて、物語は終わります。

この物語が、父親のエゴに翻弄される子どもという、いささか古い展開であるのは、1995年の作品にけりを付けるものだからだといえます。面白いのは、1995年に『新世紀エヴァンゲリオン』に夢中になったヤングアダルトたちで、2021年にも夢中になっている人たちがいたということです。もちろんその間に、『新世紀エヴァンゲリオン』のファンは更新され、同じように若い人たちが好きになってもいたと思いますが、1995年に好きになってずっと追いかけてきた人も相当数いたはずです。そうすると、（シンジが14歳という設定だったので）アニメを見ていた人も14歳だとすると、それから26年間、この物語の決着を待ち続けた人たちは40歳。彼らはもう大人なのでしょうか、それともまだヤングアダルトのままなのでしょうか。そのあたりはとても興味深い問題だと思います。

3　まとめ

アニメから2作品紹介しましたが、他にもさまざまな領域でヤングアダルトの作品は出てきているわけです。その中で文学は、文字を読むしかないという面倒なメディアですから、なかなか読んでもらえなかったりもします。

文字というのは、書かれていることだけでは全てを表すことができず、読みながら、文字と文字との間を自分の想像力で補っていくことで物語を理解できるメディアです（これはヤングアダルト文学に限りませんが）。その中で、ヤングアダルト文学は、主人公が自省し考えながら進んでいく、その姿を文字で読みながら、ヤングアダルトを含めた私たちもまた、想像しながら読んでいきます。非常にややこしい展開にはなるのですが、この文字と文字とのつながりを想像力で埋めていく行為こそが、まさに読者のアクションであり、そのアクションがあるからこそ、初めて物語が完結するといえます。マンガやアニメもそうかもしれませんが、特に文学は読まれることによって物語が完結しますから、それを好きになった私や文学好きの人たちはやめられないのです。

書き手としての私はどうかというと、ヤングアダルト文学を書くとき、先ほどから言っていますように、主人公は自省し、自分とは誰かを考え、そして社会や大人に目を向けるような物語の展開にどうしてもなっていきますから、そこで自身も同じような目線で考えながら進んでいかざるを得ません。そうすると、当たり前だと思っていたことが次々に疑問形で現れてくる醍醐味があります。ヤングアダルト文学を書いている作家たちはこのことは非常によく分かると思うのですが、「あっ、そうなんだ」「ここは分からないぞ」「何なんだろう」、こういうことの繰り返しで書き物が進んでいくのです。

では、また文学の方に話を戻していきたいと思います。

Ⅴ　ヤングアダルト文学の現在

ヤングアダルト文学の現在ということでお話ししていきます。

ウェストールの作品で見た、親の力が後退していく流れはその後も続いていきます。

ヤングアダルト文学の主人公たちにとって、1つの壁であった親の力が後退するにつれ、立ち現れてくるのは社会や世界です。ヤングアダルト文学は、自省し自分とは誰かを考えるという性質を失うわけではありませんが、そこだけで終わることなく、周りの社会・世界に目を向け、歩を進めていきます。もちろん、基本としてあるのは、親に代表される大人とのせめぎ合いなのですけれども。

現在のヤングアダルト文学を、ブックリスト（巻末参考資料「紹介資料リスト」）にしました。古いものは入れずに、最近の10年ほど、特に4〜5年のものだけを選択して、60〜70冊ほど挙げておきました。いま新しく書かれているヤングアダルト文学を読んでいただけたら幸いです。

その中からほんの少しをご紹介したいと思います。

1 『ドレスを着た男子』

デイヴィッド・ウォリアムズ（David Walliams）の『ドレスを着た男子』（紹介資料リスト34）は2008年の作品です。

主人公はデニス。母親が出て行ったので父親と兄との3人暮らしです。学校ではサッカーが一番うまくて人気者のデニスですが、母親がいなくなってとてもさみしい思いをしています。

ある日、彼は有名な女性向けのファッション雑誌『ヴォーグ』の中に、母親が着ていたのとそっくりなドレスを発見します。母親恋しさに『ヴォーグ』の女性服に魅せられますが、やがて、女性服そのものにひかれていきます。「そのゴージャスさに」「その美しさに」「その完成度に」[22]。そして、着てみたいと思うのです。

けれど、『ヴォーグ』を持っているのを父親に見つかり取り上げられてしまいます。「お前の年ごろの男の子が、『ヴォーグ』を読むなんて」[23]。

そんなデニスはある日、学校のファッションリーダーであるリサと知り合い、リサにそのことを告げます。リサは、デニスの願いを叶えるべく自分の家に呼び、女性服を貸し、メイクしてあげます。とても似合っているデニス。リサは彼を、フランスからの留学生との触れ込みで学校に連れていきます。あまりにも美しいので誰も気付かないどころか、美しい少女に男子たちは盛り上がります。

けれど、校長に発覚し、デニスは退学になります。そこからデニスがどう復帰するかは、サッカー仲間も巻き込んでのコテコテのエンタメで、面白いです。

ここでは異性装が取り上げられています。父親にとっては、自分の息子が女性誌に興味を持つなんて耐えられず、親の権力によってデニスから『ヴォーグ』を取り上げてしまう。親の圧力は効いているわけです。デニスはそれに反抗することができません。ところが、物語はそこを迂回して、リサという女の子を登場させます。彼女には全く偏見はなくて、デニスの女装を手伝うだけでなく、それで外に出ることを促します。もはやそこでは、男装・女装というジェンダーは、あっさりと無効にされています。

結果的に、自由に生きることの楽しさや喜びが、とても温かく伝わってきます。

2 『サイモンvs人類平等化計画』

ベッキー・アルバータリ（Becky Albertalli）の『サイモンvs人類平等化計画』（紹介資料リ

22 デイヴィッド・ウォリアムズ 作, クェンティン・ブレイク 画, 鹿田昌美 訳『ドレスを着た男子』福音館書店, 2012, p.44.
23 同上, p.49.

スト 23）は 2015 年の作品です。

高校生のサイモンは、幼なじみのニックとリア、転校生のアビーと快適な毎日を過ごしています。彼は、最近ネットで知り合ったブルーに胸をときめかせています。ブルーが同じ学校の男子なのは確かだけど、誰かは分かりません――ブルーはハンドルネームです。サイモンもジャックと名乗って自分を隠しています。2 人ともまだ誰にもカミングアウトしていませんから、お互いを特定するのをためらっているのです。

ところが、サイモンが学校図書館のパソコンからブルーにメールした後、ログアウトし忘れてしまい、同学年のマーティンに自分がゲイであることを知られます。マーティンは、アビーを好いていて、自分が彼女に近づけるように取り計らってほしいと要求してきます。そうしなければ、サイモンがゲイなのをばらすと暗にほのめかしながら。

物語は、ブルーが誰なのかと、サイモンがどうカミングアウトするかをめぐって展開していきますが、サイモンが腹立たしく思うのは、どうして自分たちだけがカミングアウトしなければならないのか、ということです。

なるほど、そう言われればそうです。私は異性愛者ですが、カミングアウトせずに済むことについて、何も思ったことはありませんでした。つまりそれは、マジョリティーであるのに無頓着であったわけです。この物語は、そうしたマジョリティーのうかつさに気付かせてくれます。

誰かが誰かを好きになるという素敵な経験が、社会的差別意識のために困難になるのは、本当にもったいない。そうならない社会が来てほしいと思えるのは、この物語が、サイモンの悩みだけではなくて、その悩みがサイモン自身によって外に開かれているから、つまりなぜ他の人間はカミングアウトせずに済むのかということにつながるからです。だからこそ、私たちは共感できるのだと思います。

3 『嘘の木』

フランシス・ハーディング（Frances Hardinge）の『嘘の木』（紹介資料リスト 20）は 2015 年の作品です。

時代は 19 世紀後半。ダーヴィンの進化論が、学会のみならず一般社会をも巻き込む話題となっていた時代が舞台です。主人公はフェイスという女の子。物語のはじめの方に、こう書かれています。「フェイスはいつも“あれ”と呼んできた……“あれ”は世間が知っているフェイスとは正反対のもの。退屈だけどいい子で頼りになるフェイスとはちがう、もうひとりのフェイス」[24]。フェイスの父は、有名な博物学者です。そして、父を尊敬していたフェイスは、父のようになりたいと思っていますが、時代が時代ですから、女が学者になるなんてとんでもないと、フェイスの意欲や才能は抑圧されています。“あれ”というのは、博物学者になりたいと思っている、知識も才能も意欲もあるフェイスのことなのです。

物語は、フェイスたち家族がヴェイン島へと移住するところから始まります。父が発見したと主張した翼のある人類の化石が、捏造（ねつぞう）だと発覚してしまったのです。その非難を避けるための移住です。最初は島民に歓迎されますが、情報は島まで届き、島民の態度が一変します。そして、父は自殺してしまいます。しかし、その死に疑問を抱いたフェイスは調査を開始します。

一方、残されたフェイスの母マートルは、有力者たちと付き合い始めます。事情が分からないフェイスはマートルを嫌悪しますが、実は夫が自殺すると、その財産は妻の元に行かないの

24　フランシス・ハーディング 著, 児玉敦子 訳『嘘の木』東京創元社, 2017, pp.13-14.

です。そのために何もかも失ってしまったマートルは、自分や娘を守るため、有力な男たちを探していたのです。

女性は学者にはなれないというのが当たり前の時代の、ジェンダーバイアスを巡る物語といえます。そして、そういう時代の物語であるからこそ、女性が置かれている立場が鮮明に描かれている作品です。

4 『ミスターオレンジ』

トゥルース・マティ（Truus Matti）の『ミスターオレンジ』（紹介資料リスト 16）は 2011 年の作品です。

舞台は 1943 年のニューヨーク。八百屋の三男ライナスは、長兄のアプケが志願兵としてヨーロッパへ向かったことを誇りに思っています。一方、母親は、徴兵される前に志願した長男を心配して怒っています。「戦争は、誇りに思うことじゃありません。戦争が必要だっていうだけで、もううんざり」[25]。でも、ライナスにとって戦争とは、アプケが描いてくれたヒーローコミックの主人公ミスタースーパーが活躍すれば片付く問題なのです。ライナスの想像力で考える戦争はそういうものなのです。

そんなときライナスは、家の仕事の手伝いでオレンジを配達しに行きます。そして、ヨーロッパから逃れてきた画家に出会います。いつも注文がオレンジなので、ひそかにミスターオレンジと呼んでいます。

ライナスは、ミスターオレンジのことを家族に決して話しません。「だれにもなにもいわないでおけば、あの空間を自分だけのものにしておける」[26] と思ったのです。それは、家族にいささかうんざりしているライナスにとって、家族とは違う新しい世界への窓となるからです。

例えば、どうしてにおいには名前がないのかと聞くと、お父さんは「答えられないことを、きくもんじゃない」[27] とため息をつきますが、ミスターオレンジは「すぐに答えがでないからといって、その質問がまちがってるわけじゃない」[28] と言ってくれるのです。ライナスにとって、今まで接してきた両親でなく、未知の大人であるミスターオレンジは、とても大事な、社会・世界に出ていくための 1 つのきっかけになる存在なのです。

しかし、兄の知り合いが戦死したという知らせが入ると、ライナスはミスターオレンジに疑問を抱き始めます。兄たちがヨーロッパに出兵して命がけで戦っているのに、ミスターオレンジはヨーロッパから逃げ出してきて、アメリカでのうのうと暮らしているではないかと。それに対して、ミスターオレンジは「だれもが、自分のやり方で戦うんだ」「（年寄りの）わたしは、想像力でやっていくほかないんだ」[29] と言います。想像力は現実を覆い隠すだけだとライナスは言いますが、ミスターオレンジは「すべては想像からはじまる」[30] と答えます。「想像力が無力だったら、ナチス・ドイツも想像をこわがる必要はない」[31]。事実、ナチス・ドイツは自分たちの考え方の邪魔になる絵画や文学を排除しました。それらが保証する自由、彼らと違う考えを持つ自由を怖（おそ）れたのです。

想像力は、どんな人でも持っています。それを豊かに育てていけば、自分自身の支えとなり、力となります。そう教えてくれる物語です。ライナスの世界もまた、そこから開けていきます。

25　トゥルース・マティ 作, 野坂悦子 訳, 平澤朋子 絵『ミスターオレンジ』朔北社, 2016, p.67.
26　同上, p.58.
27　同上, p.29.
28　同上, p.75.
29　同上, p.191.
30　同上, p.194.
31　同上, p.195.

ちなみに、ミスターオレンジとは、オランダの抽象画家として有名なモンドリアン（Piet Mondrian, 1872-1944）です。

5 『伝説のエンドーくん』

少し毛色を変えて、学校ものの作品から 1 つご紹介したいと思います。

学校もののヤングアダルト文学といえば、部活ものや、いじめ、教員の横暴といったことへの抵抗の作品もありますが、今日は少し変わった作品をご紹介しておきます。

まはら三桃の『伝説のエンドーくん』（紹介資料リスト 48）、2014 年の作品です。

この物語が変わっているのは、主人公をヤングアダルトにせず、中学校の教師たちにしているところです。

もうすぐ創立 100 周年を迎える市立緑山中学校。ここにはエンドーくんの伝説があります。エンドーくんとは、かつて緑山にいた中学生で、「成績優秀、スポーツ万能」「そのうえ、めっちゃイケメン」[32] の生徒らしい。校舎中にはエンドーくんの名を冠した落書きがあちらこちらにあります。伝説のヒーローのエンドーくんから勇気をもらおうと、過去の生徒たちが書いたものです。仕事に行き詰まった教師たちが、その中の一句を偶然発見し、それをきっかけにして自分の抱えている悩みから前へと進んでいく、オムニバス形式の作品です。

例えば、教師生活にも慣れてしまい、お金を貯めることに生きがいを感じている矢島という先生がいます。彼女は、ある女子生徒グループが性産業でお金を稼ごうかと安易に考えているのを知ります。けれど、いくら叱っても、倫理や道徳で諭してもほとんど効果がないのを、矢島は経験で知っています。どうすればいいのかと悩んだ末、彼女が見つけた落書きにはこう書いてありました。「エンドーくんはお金よりつよし」[33]。

生徒たちを呼んだ矢島は、自分が大切にしていたものを見せます。それは、矢島がもらった最初の給与明細です。どれだけ働いて、どれだけもらって、どれだけ税金や社会保障に引かれて……ということが書いてあります。矢島は生徒たちに言います。「社会人はみんなそうやって、お金を稼いでいるの。お金を稼ぐっていうことはそういうことです」[34]。とてもリアリティのある生徒へのメッセージです。

ここにいるのは理想の教師ではなく、社会人として働き、悩む等身大の教師の姿です。ですから、ヤングアダルトの読者にとって、この作品は、教師もこんな風に悩むんだということが分かるようになっているのです。教師は生徒にとって権力者にもなりますが、労働者でもあり、仕事に悩む人間でもあるのです。そういうところにも視線を届かせるように、ヤングアダルト文学がなってきているということです。

6 『拝啓パンクスノットデッドさま』

最後に、石川宏千花の『拝啓パンクスノットデッドさま』（紹介資料リスト 59）、2020 年の作品です。

主人公は高校生の晴己。中学生の弟、右哉と住んでいます。2 人の父親が同じかどうかは分かりません。晴己は言います。「どっちだってよかった。どうせ会うことのない父親だ」「この古アパートで暮らしているのは自分と右哉だけだし、母親はたまにしか帰ってこない」[35]。母

32　まはら三桃 著『伝説のエンドーくん』小学館, 2014, p.34.
33　同上, p.119.
34　同上, p.124.
35　石川宏千花 作, 西川真以子 装画・挿絵『拝啓パンクスノットデッドさま』（くもんの児童文学）くもん出版, 2020, p.5.

親はときどき、きまぐれのように帰ってくるだけで、どこにいるのかも分からないまま、生活費だけを送ってきます。しんちゃんという、大学生の頃から晴己の母親に憧れていた男が、2人の面倒を見ているのです。

生活費がいつ送られてくるかも分からないので、晴己は2つのアルバイトをかけ持ちしながらの高校生活です。そんな生活に「ときどき、説明のしようがないなにかを感じるときがあった」[36]と晴己。「そんなときは、弾く」[37]――しんちゃんにもらったベースを弾きます。しんちゃんは世代的にパンクが大好きで、バンドもやっていました。しんちゃんは、晴己や右哉にパンクのレコードやCDを聴かせ、晴己にベースをプレゼントしたのです。晴己はそれを弾くことが、自分を落ち着かせることであり、どんどんうまくなっていきます。

晴己は、母親のことをこのように考えています。

> 住み込みで月二十数万円もらえているそうなのだけど、どこまで本当の話なのかはわからない……母親のいうことは、話半分で聞くことにしている。まるごと信じて、あとでうそだとわかったときにショックを受けるのは、もういやだった。[38]

> 『あんたたちのせいで、こんな人生しか生きられなかったんだよ？』
> あれだけは、もういわれたくない。[39]

> なんてみじめな十五歳なんだろう。[40]

> あんまりみじめで、この先、どんなにうれしいことが起きても、どんなに楽しいと感じる時間が訪れたとしても、このみじめさは、いつまでも自分にべったりとはりついたままはがれおちてくれないような気がして、途方に暮れた。
> それでも、日々はすぎていく。[41]

ちっとも帰ってこない母親。右哉と2人だけの生活。それをフォローしてくれるしんちゃん。2つのバイトをかけ持ちする人生。そして、いらだち、それをぶつけるパンクのベース。それでも、日々は過ぎていく。

かつて、サポーターとして、あるバンドのベースを弾いた晴己の映像がYouTubeで流れて、学校で話題になります。そして、学校の友達から、一日限りのバンドで演奏してくれないかと頼まれます。自分はベース、右哉は歌ができますが、他がいないということで、バイト先の大学生のつてを頼って、何とかメンバーを見つけてきます。一日だけだけど、バンドを組めることになりました。

しんちゃんもきっと喜んでくれるだろうと思って、晴己は知らせます。すると、しんちゃんがとても怒ってしまうのです。「なんで勝手にひとりでさがしてんだよ」[42]。まるで子どものように。そしていなくなってしまいます。

物語は進行しますが、ある日突然、母親が帰ってきます。そして、結婚することになったか

36　同上, p.10.
37　同上, p.10.
38　同上, pp.58-59.
39　同上, p.82.
40　同上, p.59.
41　同上, p.60.
42　同上, p.91.

ら、まずは右哉を連れていくというのです。「はるちゃんは高校入ったばっかりだから、いきなり転校ってむずかしいじゃない？　みぎちゃんはまだ義務教育だから、簡単に転校手続きとかできるんだろうけど」[43]。晴己は思います。捨てられるんだと。母親はきっともう、自分を連れに来ない。でも……

いつだって、母親に悪気はない。……
それがわかっているから、晴己はただ、あきらめるしかないのだ。なにをいわれても、なにをされても、自分の母親はそういう母親なのだから、と。
……
きらいには、なれなかった。
ただの一度も。[44]

複雑な心境が描かれています。
久しぶりにばったり会ったしんちゃんの前で、晴己は耐えてきたものが一気にあふれ出すように泣き出します。『理由なき反抗』のジムを思い出しますが……
晴己はこう思うのです。

おとなのくせに、オレより子どもみたいな理由で不機嫌になるしんちゃんなんか。
……気がつけばいい。晴己もまだまだ子どもなのかもしれないって。[45]

たぶん、自分と右哉に必要だったのは、本当の父親なんかより、しんちゃんだったのだと思う。[46]

自分だってそうだ。自分だって、大事にされてきた。しんちゃんにも、万田ちゃん[47]にも。母親じゃなくたって、自分を大事にしてくれるおとなはちゃんといた。
なんだ、そうか。
母親じゃなくたってよかったのか……。[48]

物語は最後、事情を察した右哉が1人で晴己のもとに戻ってきて、パンクを演奏するところで終わっていきます。
母親に置いてけぼりにされている状況であるのに、この物語にはどこか希望があります。それは、あてにならない母親ではなく、他にも自分たちを大事にしてくれる大人がいたという認識を晴己が得たことによります。それはそう納得しないとやりきれないこともありますが、晴己の視線が親だけではなく社会に開かれているからです。そしておそらく、その相手の1人が「おとなのくせに、オレより子どもみたいな理由で不機嫌になるしんちゃん」である点にも注目していいと思います。いわば、しんちゃんは、ヤングアダルトを卒業しないまま大人になった人物、つまりヤングアダルトです。であるからこそ、晴己は心を開き、頼ることができたの

43　同上, p.140.
44　同上, p.142.
45　同上, p.151.
46　同上, p.156.
47　保健室の先生。
48　同上, p.166.

でしょう。

7　まとめ

『ドレスを着た男子』のデニスは、異性装を外に向かって示します。

『サイモンvs人類平等化計画』のサイモンは、マイノリティとしてもの申します。

『嘘の木』では、ジェンダーバイアスが物語の重要なファクターとなります。

『ミスターオレンジ』のライナスは、想像力が戦争に打ち勝つことを学びます。

『伝説のエンドーくん』では、大人もまた1人の労働者として悩んでいることを描きます。

『拝啓パンクスノットデッドさま』では、実母以外の人に頼ってもいいのだという方向に世界が開かれています。

ここで取り上げた作品はどれも、自省し自分とは何かを考えるだけではなくて、世界に向けて開かれています。

今、ヤングアダルト文学は、全方位的に自由に語り始めていると思います。大人社会と戦い敗れるとか、それを苦々しくも受け入れるとか、別の自由を夢見るとかではなく、積極的に、社会参加的に物語り始めています。それも大人の物語のようにではなく、ヤングアダルトであるからこそ抱く社会のあり方への疑問を投げかけたり、まっすぐに社会悪を批判したり、自身の生き方を常に問い直したり、大人との距離を測ったり、とても冷静に、果敢に社会とアクセスし、生きようとしている子どもたちを描いていると思います。もちろん、全てがそうではありませんが、そういう作品が増えています。

つまり、大人への入り口の作品や、過渡期を描いた作品というより、ヤングアダルトであるからこそ抱く疑問をもって、社会を視(み)る物語が描かれています。

かつては、「ではない存在」から「である存在」へ、つまりは大人になる前のあがき、悩み、苦しみを描いていました。ところが現代では、「ではない存在」だからこそ描ける作品に変わってきている気がします。彼らは、自分が何者か、自分が属する社会はどんなところか、自分はどう生きていけばいいのかを、常に考え続けます。

そういうことが起こってきた一因の1つは、情報へのアクセスが容易な時代において、大人の優位性というものが失効しつつあることでしょう。そのために、ヤングアダルトの大人に対するアクションが効力を持つようになったということなのだと思います。

Ⅵ　ヤングアダルト文学の未来

ヤングアダルトであるかぎり、諦めることなく、常に希望を持ちながら問いかけていくヤングアダルト文学は、今の大人社会や大人にも力を与える存在になりつつあると、とても楽観的に思っています。大人読者にとっても、このどこか息苦しいような世界に、ヤングアダルトの視点から改めて光を当てること、それができるのがヤングアダルト文学だと思います。ヤングアダルト文学を読むことで、大人もまた、忘れていた視点、気付いていなかった視点を手に入れることができるのではないかと思います。

もう1つ、大人像そのものも変わりつつあり、ヤングアダルトのままでもかまわない時代が訪れているのかもしれません。つまり、常に疑問を持ち、自分に問いかける、「青臭い」ままでもかまわない時代です。そうであるならば、ヤングアダルト文学はますます、その世界を広げていくことでしょう。

実は、紹介資料リストには絵本が混じっています。絵本の中にもヤングアダルトの視点は浸透していて、ヤングアダルトが読んだ方が面白い絵本がたくさんあるのです。ところが、絵本

であるからということで読まれないのがもったいない。そこで、金原瑞人さんと一緒に『13歳からの絵本ガイドYAのための100冊』（紹介資料リスト66）を出しました。こちらのリストからも絵本を読んでくださったらとてもうれしいです。

今日はどうもありがとうございました。

日本の翻訳ヤングアダルト文学の現在

三辺　律子

はじめに
Ⅰ　LGBTQ文学
　1　レズビアン・ゲイの子どもが登場する作品
　2　（主に）トランスジェンダーの子どもが登場する作品
Ⅱ　BLM運動を中心とした人種差別を描いた作品
Ⅲ　フェミニズムのテーマを持つ作品
　1　19世紀を舞台にした作品
　2　ディストピア小説（大人向けとして出されている作品）
　3　現代的なテーマを持った作品
Ⅳ　散文詩形式／詩が大切な役割を果たしている作品
Ⅴ　今後の注目（おまけ）
おわりに

かつては翻訳大国と言われた日本ですが、年々海外文学の読者は少なくなっていると言われています。その中で、どのような海外ヤングアダルト文学が紹介されているか、また、その意義とはなにか。具体的な作品を紹介しつつ、探っていきたいと思います。

はじめに

みなさん、こんにちは。三辺律子と申します。私は主に、児童書やヤングアダルト（YA）文学で英語の作品を訳しています。今日は、今まで20年以上、いろいろと翻訳してきたなかで、今のYA文学に感じていることをお話ししたいと思います。

YA文学とは、だいたい12歳から18歳くらいの読者を対象に書かれたフィクションのカテゴリーであり、主に思春期の若者を対象としたジャンルだというのが従来の認識だったと思います。しかし、2000年頃から、いわゆるクロスオーバーフィクション、つまり児童書やYA文学と大人の文学の「境界を越えて（クロスオーバー）」読まれる本が出てきました。現在、アメリカではYA文学の読者の約半数は大人であるとも言われています[1]。

クロスオーバーフィクションについては、『ユリイカ』2016年12月号でも書きました[2]ので、ここで多くは触れませんが、イギリスの新聞『ガーディアン』（*The Guardian*）は自社のサイト上で、2001年を「伝統的な（大人と子どもの本の）境界線が消滅した年」とし、クロスオーバーフィクションが社会的に認知された年としました[3]。もちろん、1997年に発売され、世界的なヒットとなったJ.K.ローリング（J. K Rowling）のハリー・ポッターシリーズが契機になったのは、言うまでもありません。

その後、ステファニー・メイヤー（Stephenie Meyer）のトワイライトシリーズ（2005）[4]などに代表されるパラノーマルもの（超常的な存在を扱うものですが、これは、ほとんどヴァンパイアものといってもいいかもしれません）、スーザン・コリンズ（Suzanne Collins）の『ハンガー・ゲーム』（2008）などのディストピアもの、ジョン・グリーン（John Green）の『さよならを待つふたりのために』（2012）といったコンテンポラリーリアリズムと呼ばれたものなど、YA小説のブームが続きます。これらが、ほとんど映画化されていることからも、いわゆるメディアミックス展開され、受け手が広がっていることもうかがえます。

さて、ではその後注目すべき分野としては、どんなものがあるか。本日はそのお話をしたいと思います。現在、どんなものが書かれているか、読まれているかを概観することで、YA文学の特質とは何かを考える一助になってほしいと考えています。

Ⅰ　LGBTQ文学

まず、挙げられるのは、いわゆるLGBTQ文学と呼ばれるものでしょう。もちろんこれまでも、セクシュアルマイノリティを描いた作品はいろいろ書かれてきました。しかし、2010年頃から、明らかに描かれ方が変わってきていると感じています。

セクシュアリティと思春期は切り離せないこともあり、YA文学では早くから描かれてきたテーマですが、当初は、周囲の無理解によるいじめなどの困難や差別に焦点を当てたものが断然多かったと思います。

1　Caroline Kitchener, “Why So Many Adults Love Young-Adult Literature: Over half of today’s YA readers are over the age of 18.” *The Atlantic* (Website), December 2, 2017. <https://www.theatlantic.com/entertainment/archive/2017/12/why-so-many-adults-are-love-young-adult-literature/547334/>

2　三辺律子「子ども部屋から書斎へ　『ハリー・ポッター』以降の英米YA（ヤングアダルト）」『ユリイカ』48巻18号（通号692）, 2016.12, pp. 196-202.

3　Quizzes (books); 2001: A year in books, *guardian.co.uk Books* (website) <https://www.theguardian.com/books/quiz/questions/0,5957,623142,00.html>

4　以降、特に断りのない限り、書籍の出版年は原著（シリーズものについては第1巻）の出版年を示す。

1　レズビアン・ゲイの子どもが登場する作品

・『二つの旅の終わりに』

そんな中で、エイダン・チェンバーズ（Aidan Chambers）の『二つの旅の終わりに』（1999, 紹介資料リスト 1）は、異色の作品だったといえるでしょう。

主人公ジェイコブは 17 歳のイギリス人。第二次大戦中に亡くなった同じ名前の祖父が生前世話になったヘールトラウというオランダ人女性に招かれて、アムステルダムへ行きます。物語自体は、ジェイコブのオランダでの体験を描いた章と、ヘールトラウが祖父ジェイコブとの戦時中の関係をつづった手記の章が交互に配置され、戦争というテーマが掘り下げられていくのですが、もう 1 つのテーマとして、オランダの「多様な」人々との交流をとおしたジェイコブの成長が描かれています。登場人物の中で特に魅力的なのが、ヘールトラウの孫にあたるバイセクシュアルのダーンと、その友人でゲイの少年トン。既成概念にとらわれない 2 人の生き方に、ジェイコブは影響を受け、心を解き放たれていきます。

尊厳死（ヘールトラウは尊厳死を選ぼうとしています）や同性愛者の権利をいち早く認めてきた、現代の進歩的なオランダという描き方が印象的な一冊です。

・『ウィーツィ・バット』

もう 1 つ､異色な作品としてフランチェスカ･リア･ブロック（Francesca Lia Block）の『ウィーツィ・バット』（1989, 紹介資料リスト 2）から始まる 5 部作があります。「ハイスクールでいちばんカッコいい男の子、ダークとつきあい始めるも、彼は自分がゲイだと告白する。そんなのかまわないよ、いっしょにオトコをゲットしにいこう、とウィーツィ」という東京創元社のあらすじ紹介[5]は、当時としては衝撃的だったと思います。黒人、ヒスパニック、ゲイ、レズビアン、その他、現実が窮屈で生きづらい人々が生き生きとリアルに描かれていて、西海岸のティーンのバイブルだったと言われています。こうしたセクシュアルマイノリティの描き方がいかに「新しかった」かは、このシリーズが 2009 年にフェニックス賞を受賞している[6]ことからも分かります。フェニックス賞は、名前のごとく、出版時に主要な賞を受賞していない英語の児童書の中で最も優れた作品に与えられる賞で、シリーズの 1 作目が出版されてから、まさに 20 年目にしてその真価が認められたと言っていいでしょう。

・『ウィル・グレイソン、ウィル・グレイソン』

そして、『ウィーツィ・バット』がフェニックス賞を受賞した翌年、すでに『アラスカを追いかけて』（2005）や『ペーパータウン』（2008）で注目されていたジョン・グリーンと、早くからゲイの少年を描いてきたデイヴィッド・レヴィサン（David Levithan）の共著『ウィル・グレイソン、ウィル・グレイソン』（2010, 紹介資料リスト 4）が出ます。

主人公は 2 人。ジョン・グリーンが描くヘテロのウィル・グレイソン（ウィル①）と、デイヴィッド・レヴィサンが描くゲイのウィル・グレイソン（ウィル②）。音楽好きなウィル①は波風を立てないことを信条として学校生活を送っていて、好きな子にもなかなかアプローチできません。複雑な家庭で育つウィル②は、SNS で知り合った少年に恋をしています。別々の高校に通い、接点のなかった 2 人があるきっかけで出会い、それぞれの悩みと向き合っていくというストーリー。この作品には、第三の主人公ともいえるタイニー・クーパーというウィル①

5　ウィーツィ・バット - フランチェスカ・リア・ブロック／金原瑞人／小川美紀 訳｜東京創元社<http://www.tsogen.co.jp/np/isbn/9784488802035>

6　2009 Phoenix Award Winner <https://www.childlitassn.org/assets/docs/2009%20phoenix%20winner.pdf>

の同級生が出てきます。彼はアメフトのスター選手なのですが、ゲイだとカミングアウトすると、途端に部から追い出されそうになります。そこまでは、これまでの学園もの・青春ものでよく見られた展開なのですが、このタイニーのキャラクターが際立っていて、そんな退部の危機にもスーパーポジティブに対応し、そのさなかに自分の半生を描くミュージカルを自分で制作、さらに次々と恋をする（もちろん男子に）という、一度読んだら忘れられない人物なのです。

この作品は、LGBTQをテーマにした作品（と一括りにするのも何ですが）では初めて、ニューヨークタイムズのベストセラーリストに載りました[7]。そんなことから、先ほど申し上げたように、この2010年あたりから、セクシュアルマイノリティの描かれ方が変化してきたのではないかと思うのです。

・『サイモンvs人類平等化計画』

その変化自体をテーマにしているのが、ベッキー・アルバータリ（Becky Albertalli）の『サイモンvs人類平等化計画』（2015, 紹介資料リスト9）です。

サイモンはジョージア州アトランタ郊外の高校に通う16歳。大学生の姉と中学生の妹がいます。誰から見ても幸せそうな家庭に育った、どこにでもいる恵まれた白人の男の子。所属している演劇部でも端役だけど、風通しのいい部の雰囲気は気に入っていますし、幼なじみのサッカー部のニックと、yaoi（やおい）女子のリアとはしょっちゅうつるんでいて、とにかく「楽な関係」だと自ら言っています。

ちなみに、このやおいはアルファベットでyaoiとあって、日本語のやおいのことです。この言葉の定義はいろいろあるので、ここでは簡単に「男性の同性愛の関係を描いた主に女性向けの漫画や小説。または、それらを愛好する人のことをいう」とだけ説明しておきます。いずれにせよ、日本のサブカルチャーが浸透しているさまがうかがえます。サイモンは、幼なじみのリアに、ハリー・ポッターとドラコ・マルフォイがゲイの関係になる二次創作を教えてもらって、ドキドキしたという挿話もあります。

さて、この幼なじみのニックとリアに加え、転校してきてすぐに意気投合したアビーも加わり、サイモンはバラ色とまではいかなくても楽しい高校生活を送っています。そう、どこにでもいそうな男子高生なのです。

ところが、そんなサイモンにも、1つだけ悩みがあります。それが、いつカミングアウトするか？

特に、気になる存在ができた最近では、その問題が頭から離れません。気になる存在というのは、ネットで知り合ったブルー。彼の書く文章に惹かれたサイモンは、「ジャック」というハンドル名を使って、ブルーとメールのやりとりを始めます。ところが、ある日、学校のパソコンでメールを読んだあと、ログアウトをし忘れて、同級生のマーティンにメールを見られてしまいます。マーティンは、メールの内容を誰にも言わない代わりに、アビーを紹介してくれと「脅迫」してきます。ちなみに、物語自体は、このマーティンとサイモンのやり取りから始まります。

メールのことを公表されたら、ブルーは正体がばれるのを怖（おそ）れて、サイモンとの連絡を絶っ

7 Children's Chapter Books - Best Sellers - Books - April 25, 2010, *The New York Times* (website) <https://www.nytimes.com/books/best-sellers/2010/04/25/chapter-books/>
なお、John Greenのウェブサイトに、"Will Grayson, Will Grayson debuted at #3 on the New York Times bestseller list for children's chapter books, the first book starring gay characters ever to appear on the list."とある。<https://www.johngreenbooks.com/will-grayson-will-grayson>

てしまうかもしれません。サイモン自身もまだ、ブルーの正体を知らないのに。

それに、メールの内容をみんなに知られるということは、カミングアウトするのと同じことです。ここで描かれているのは、アウティングの問題です。

アウティングはゲイやレズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダーなど（LGBT / LGBTQ+）に対して、本人の了解を得ずに、他の人に公にしていない性的指向や性同一性などの秘密を暴露する行動のこと。こちらも古くて新しい問題です。最初はスキャンダル的な暴露から始まったアウティングですが、1969 年のストーンウォールの反乱以降、ゲイ解放運動の活動家は 1970 年代に積極的にカムアウトをし始め、“Out of the closets, into the streets!”（クローゼットを出て、街に出よう！）というスローガンも作られました。カミングアウトできていない仲間にカミングアウトさせることこそ、新しいという認識も一部にはあったことを示しています。

この本が出版された 2015 年頃も、まだまだ「カミングアウトできるかどうか――家族に認めてもらえるか、友だちに認めてもらえるか」というようなテーマを描いたものが多く、カミングアウトは一般的に「いいもの」として捉えられていたと言っていいと思います。しかし、サイモンは、その考えに疑問を投げかけます。

サイモン自身、別にゲイだということを内緒にしたいわけではないし、ましてや恥じているわけでもない。でも、だとしたら、自分はカミングアウトすることを、なぜためらっているのだろう？　そんなことを考えているうちに、サイモンは、そもそもカミングアウトっていうのは、しなきゃいけないものなのか……？　という疑問に達します。

もちろん、サイモンの恋の相手ブルーも、カミングアウトについては悩んでいます。そして、2 人はメールのやりとりをしているうちに、「人類平等化計画（ホモサピエンス・アジェンダ）」を思いつきます。

この人類平等化計画（ホモサピエンス・アジェンダ）は、実際にある「ホモセクシュアル・アジェンダ（ゲイ・アジェンダとも言う）」という言葉をもじって、サイモンが新しく作り出した言葉です。ホモセクシュアル（ゲイ）・アジェンダとは、もともとはキリスト教右派による造語で、ホモセクシュアル的な価値観を社会に持ちこもうとする政治運動があるという「（勝手な）主張」を指します。キリスト教右派とは、キリスト教の保守的勢力で、伝統的価値を守るために政治活動をする人々のことですが、ここでいう「伝統的価値観」には「ヘトロセクシュアル（異性愛者）であること」も含まれています。つまり、キリスト教右派や一部の保守派は、「ヘトロセクシュアル」こそが「伝統的＝ふつうの価値観」であり、にも関わらず、ゲイの人たちは彼らの価値観やライフスタイルを社会に広めて、ヘトロセクシュアルの人たちの生活を脅かそうとしている、と主張しているわけです。

しかし、この「ホモセクシュアル的な価値観やライフスタイル」という考え方に、サイモンとブルーは強烈な違和感を覚えます。ゲイだからといって、ストレートの子たちと違う価値観やライフスタイルを持っているわけじゃない。恋愛だって、相手が同性ということ以外はストレートの子たちと変わらない。

だから、サイモンとブルーは、ゲイにカミングアウトが強制されるなら、ストレートの子だって同じようにカミングアウトしなきゃおかしいじゃないか、と主張するのです。「ストレートは初期設定で、カミングアウト不要」ってフェアじゃない。それが、タイトルにもなっている人類平等化計画（ホモサピエンス・アジェンダ）です。ゲイのアジェンダではない、人類のアジェンダがあるだけだということです。

この作品で分かるのは、もはやテーマはカミングアウトするかしないかが焦点ではないし、カミングアウトできてよかった、一件落着というわけでもないということです。つまり、批判

の対象は、そもそもカミングアウトしなきゃいけないということ自体であり、そうやって（この話でいうと）ゲイを「特別視」していることなのです。

それまでは、セクシュアルマイノリティは、いじめや差別の対象か、もしくは先ほど紹介した『二つの旅の終わりに』やフランチェスカ・リア・ブロックの一連の作品群に見られるような「特別にかっこいい存在」として描かれることが大半でした。でもサイモンは、もちろん差別されるいわれなどないし、一方で、ゲイだからこそおしゃれだとかセンスがいいという特別視も拒否しています。そして、『サイモンvs人類平等化計画』以降、どんどんそうした作品が増えていくのです。

この作品は2018年に映画化されました[8]が、主演を若手で一、二を争う人気俳優のニック・ロビンソン（Nick Robinson）がやるということで、注目されました。人気のある若手俳優がゲイの役をやるということは、その後のキャリアの妨げになるということで、これまではあまりなかったのです。

このあたりから、いじめるのも特別視するのもおかしい、なんならダサいという描き方がぐんと増えていきます。それと同時に、ゲイやレズビアンの少年少女は必ずしも主役でなくなります。クラスに普通に必ず数人はいる存在となるのです。これは、セクシュアルマイノリティの割合と照らしても、当然のことです。

統計によってさまざまですが、セクシュアルマイノリティは、人口の3〜5%いるといわれています（10%という統計もあります）。学校の1クラスに例えると、1〜2人の割合になります。つまり、学校を舞台にしたYA小説に、セクシュアルマイノリティの生徒が1人もいないとしたら、それは現実を反映していない不自然な設定ということになります。

例えば、アンジー・トーマス（Angie Thomas）の『オン・ザ・カム・アップ』（2019, 紹介資料リスト10）は、黒人の少女ブリが主人公の作品ですが、その友達にサニーというゲイの少年が出てきます。サニーも悩みを抱えていますが、それはいじめや、カミングアウトのタイミングではなく、恋愛と勉強の両立という、ごく普通のティーンエイジャーの悩みです。

ちなみに、異世界を舞台にしたファンタジーでも、この傾向は見られます。『ハリー・ポッター』のダンブルドアはゲイだと、作者のJ.K.ローリングが言ったときはセンセーションを巻き起こしましたが、2019年に書かれたトミ・アデイェミ（Tomi Adeyemi）の『オリシャ戦記　美徳と復讐の子』（紹介資料リスト12）では、主人公の少女と戦う魔法を操る魔師の中に、女性同士のカップルがいます。しかし、物語中では2人がカップルだということが言及されるだけで、それ以上でもそれ以下でもありません。別に特別なことでも何でもないのです。

・『夜フクロウとドッグフィッシュ』

ホリー・ゴールドバーグ・スローン（Holly Goldberg Sloan）とメグ・ウォリッツァー（Meg Wolitzer）の『夜フクロウとドッグフィッシュ』（2019, 紹介資料リスト11）は、カリフォルニアに住む黒人の女の子とニューヨークに住む白人の女の子がメールのやり取りを通じて友情を育んでいく物語ですが、彼女たちの父親はゲイで、付き合っています。でも、彼女たちの悩みは父親がゲイということではなくて、親が付き合ったことで無理やり同じキャンプに行かされることの方です。一場面だけ、キャンプに参加している女子が、陰で父親がゲイだといううわさ話をする場面がありますが、それが明るみに出ると、ばつの悪い思いをするのは、むしろ陰口を叩いた方の子です。セクシュアルマイノリティだということを悪いことのように言う方が、

8　グレッグ・バーランティ（Greg Berlanti）監督『Love, サイモン　17歳の告白』.

恥ずかしいしおかしいという価値観が若い世代に浸透していることを示す場面だと思います。

この作品の舞台はロサンゼルスとニューヨークで、都会ですし、主人公の女の子たちは父親がゲイなのでもともとリベラルな環境で育っています。ですから、実際に、ここまでアメリカ全体が「先進的」な考えを持っているわけでは、もちろんありません。でも、セクシュアルマイノリティということで差別する方がおかしいという考えが「デフォルト」である、という作品がたくさん描かれるのは、大きな意味があることだと思いますし、今後ますます増えていくであろうこうした作品が今後も日本で翻訳紹介されることを願います。

・映画作品

映画の世界でももちろん同じで、『ブロークバック・マウンテン』[9]や『ミルク』[10]など、壮絶ともいえるゲイへの差別を描いた映画をご存じの方も多いでしょう。しかし、例えば2013年制作の*G.B.F.*[11]では、主人公と母親が一緒になって『ブロークバック・マウンテン』のDVDを見る場面が出てきます。母親は、息子からゲイだと告げられ、一昔前の映画なら、そこで受け入れないとか動揺するとか、1990年代頃を舞台にした『ある少年の告白』[12]や『ミスエデュケーション』[13]の主人公の少年少女のように「性的指向を矯正する施設」に送る、というような展開になったでしょう。でも、この*G.B.F.*の主人公の母親は、息子を理解しているということを示すために、息子と一緒に『ブロークバック・マウンテン』を見ようとするのです。コメディ映画なので、息子の方は辟易（へきえき）とするというのが、笑ってしまう場面です。

そもそも“G.B.F.”というのは造語で、ゲイ・ベスト・フレンドの略。プロム[14]間近のハイスクールで“G.B.F.”が女子必携アイテムともてはやされ、それまでは全然いけてなかったゲイの男子タナーの争奪戦が繰り広げられるさまを描きます。要は、ゲイだから人気になる展開が、それまでのストーリーの逆をいっていて、当時話題になりました。先ほどの例でいえば、少々乱暴な言い方ですが、『二つの旅の終わりに』とかリア・ブロックのような、ゲイをポジティブな意味で特別な存在として描く作品の系列に入れていいと思います。

一方、2019年の『ブックスマート　卒業前夜のパーティーデビュー』[15]は、やはりアメリカ定番のプロムをめぐる、がり勉の女の子2人の物語ですが、このうち1人がレズビアンという設定でした。こちらは、たまたま1人がレズビアンだったというだけのことで、なんら「特別」な存在としては描かれていません。周りのクラスメートたちも、その事実にはもはや嫌悪や特別視どころか、驚きすら持たず、彼女の数ある属性のうちの1つとしてしか受け止めていないように描かれています。ちなみに舞台はロサンゼルスなので、リベラルな都会です。

こうした変化は、現実の変化を反映したところも大きいでしょう。『夜フクロウとドッグフィッシュ』で、主人公のお父さんが、これまでで一番泣いたのは2015年の最高裁の判決が出たときだという場面がありますが、これは、アメリカの連邦最高裁判所が同性婚を認める判断を示したことを指しています。これにより事実上、全米で同性婚が合法化されます。

しかし、もちろん揺り戻しも大きく、トランプ（Donald J. Trump）政権になって以降、状況

9　アン・リー（李安）監督, 2005年公開. 原作は、アニー・プルー（Annie Proulx）”Brokeback Mountain,” *The New Yorker*, October 13, 1997, pp.74-85. <https://www.newyorker.com/magazine/1997/10/13>

10　ガス・ヴァン・サント（Gus Van Sant）監督, 2008年（日本では2009年）公開.

11　Darren Stein監督.

12　ジョエル・エドガートン（Joel Edgerton）監督, 2018年（日本では2019年）公開. 原作は、Garrard Conley, *Boy erased: a memoir*, Riverhead Books, 2016.

13　デジリー・アッカヴァン（Desiree Akhavan）監督, 2018年公開（日本では2019年にDVDが発売）. 原作は、Emily M. Danforth, *The miseducation of Cameron Post*, Balzer + Bray, 2012.

14　米国の大学や高校で、学年末に行われる公式のダンスパーティー（デジタル大辞泉）。アメリカの映画では鍵になることが多い。

15　オリヴィア・ワイルド（Olivia Wilde）監督, 2019年（日本では2020年）公開.

はにわかに厳しくなっています。トランプ政権は差別禁止どころか、トランスジェンダーの従軍を禁止する措置を発表し、2019 年 3 月 13 日には国防総省が、トランスジェンダーの新規入隊を禁止し、すでに従軍している兵士の性別変更も禁止という方針を発表するに至りました[16]。この流れにNOを突きつける意味でも、LGBTQのYA文学がむしろ注目されている面もあると思います。

2 （主に）トランスジェンダーの子どもが登場する作品[17]

恋愛に関わる性的指向に比べ、性自認（「こころ」の性、自分自身が認識している性別のこと）にまつわるストーリーは、まだまだ差別と闘う話が多いようです。身体の性と一致せず、自分自身の身体に違和感を持ち始めるのは、いわゆるYA世代よりも前のことも多く、小学生向けの本もたくさん書かれています。

・*Parrotfish*

トランスジェンダーの子どもを描いた作品が少しずつ書かれる中、初めて大手の出版社から出たのが、Ellen Wittlingerの*Parrotfish*（2007, 紹介資料リスト 13）です。出版社は、サイモン＆シュスター（Simon & Schuster Books for Young Readers）です。タイトルのParrotfishとは、魚のブダイのことです。

アンジェラ・カッツ＝マクネアは、自分が女の子であることに違和感を覚えていました。そこで、彼女は髪を短く切り、男の子の服を買い、新しい名前を選びます――グレイディ。トランスジェンダーであることを公表するのは、グレイディにとって正しいことだと感じますが、家族や（多くの）友人たちはそれを受け入れられません。

そんなとき、友人のセバスチャンは、自然界にはトランスジェンダーの前例があることを教えてくれます。タイトルにもなっているブダイの他、ベラ、チョウチョウウオなどは、一生の間に性を変えたり雄と雌の両方の役割を果たしたりする雌雄同体なのです。そして、グレイディは、先輩のキタに恋もするのです。

作者のEllen Wittlingerは、先駆者の常で、いろいろな批判も受けました。1 つは、当事者性の問題であり、これは今後考えていかなければならない重要なテーマだと思います。つまり、当事者ではない者が問題を描くことへの問いかけです――例えば黒人でないのに、黒人を主人公にした物語を描くとか、最近では映画のトランスジェンダーの役にトランスジェンダーの役者を使うべきか否かという論争もありました。それに対し、Wittlingerは、トランスジェンダーについて、この作品だけではなく、もっとたくさん書かれるべきだと言っています。私は、彼女のそうした考えに賛成します。先ほどお話ししたゲイのティーンエイジャーを取り巻く物語でも、都会と田舎では全然違う。いじめに遭っている子もいれば、受け入れられている子もいるでしょう。現実世界ではいじめに遭っているからこそ、周りに受け入れられている子どもの話を読んで、そういう未来もあるかもしれないとか、もしくは自分はそうではなくてもそういう地域や国もあるのだと思いたい（思える）子ども読者もいるかもしれませんし、逆に、そんなのは現実ではない、もっと自分の現実に近いものを読みたいと思う子ども読者もいるでしょう。そもそも「正解」などないのですから、1 つのテーマに 1 つの話しかないなんてありえま

16 その後、ジョセフ・R・バイデン（Joseph R. Biden Jr.）大統領が 2021 年 1 月 25 日に署名した大統領令により、これらの措置は撤回された。“Executive Order on Enabling All Qualified Americans to Serve Their Country in Uniform” 2021.1.25, *The White House* (website) <https://www.whitehouse.gov/briefing-room/presidential-actions/2021/01/25/executive-order-on-enabling-all-qualified-americans-to-serve-their-country-in-uniform/>

17 本節で紹介する*If You Could Be Mine*に登場する主人公は、トランスジェンダーではないことを注記しておく。

せん。その意味で、いろいろな話が書かれるのが大切だと思います。

一方で、理解が進むにつれ、いろいろな事実が明らかになったり、状況も変わってきたりしますから、この*Parrotfish*も、そうした最新の専門用語やリソースリストを含めた改訂版が出版されました。時代に合わせたアップデートの必要性も、今、論じなければならない問題だと思います。

・*The Art of Being Normal*

その後、高い評価を受けた作品は、Lisa Williamsonの*The Art of Being Normal*（2015, 紹介資料リスト15）でしょう。主人公のディヴィッドは14歳。体は男子ですが、心は女子です。もう1人、体は女子で、心は男性のレオが登場します。この作品で何度も描かれるのは、「ゲイとトランスジェンダーは違うのだ」ということです。ディヴィッドの両親はディヴィッドのことをゲイだと思っていますし、クラスメートもそう考えています。でも、ディヴィッドはゲイなのではなく、女子になりたいのです。この2015年の時点では、まだまだそこが混同されていたことがよく分かります。

・*If You Could Be Mine*

数々の賞を受賞した作品としては、Sara Farizanの*If You Could Be Mine*（2013, 紹介資料リスト14）があります。イランの10代の少女、サハールが主人公。サハールは親友であるナスリンと結婚することができるように性別適合手術を受けようとします。

イランは、タイに次ぎ性転換手術を受ける人が多いそうです。イスラム教により同性愛は厳しく禁止されていますが、間違った性のもと生まれてしまった者は、それを正すために性転換手術を受けることが許容されており、政府からも補助が出ます。とはいえ、もちろん性転換者は少数派です。手術が体と精神にかける負担は大きく、その後もずっとホルモン剤を飲み続けなければなりません（そういったことも、この本の中に書かれています）。

サハールは、性的少数派であり、経済的にも弱者であり、さらには女性という、いわば三重苦を背負っています。イランでは、女性が出入りできる場所は少なく、自由も制限され、常に髪や手足を隠して外出しなければならない。いとこのアリもゲイですが、男である彼の方がずっと自由に振る舞うことができます。

サハールは、自分は同性愛者であって、トランスジェンダーではないのは分かっています。ナスリンとの愛を貫くために、自分自身を偽って性転換手術を受けるのか。この作品でも、同性を好きなことと、トランスジェンダーであることは、全く別のことなのだということが語られています。

・『ジョージと秘密のメリッサ』

トランスジェンダーの子どもを描いた作品で、日本語に訳されたものとしては、アレックス・ジーノ（Alex Gino）の『ジョージと秘密のメリッサ』（2015, 紹介資料リスト17）が挙げられます。

4年生のジョージは、見た目は男の子ですが、内面は女の子。家族にも言えないけれど、本当は誰かに分かってもらいたいと思っています。学校の劇で女の子役を希望してみますが、先生は聞き入れてくれません。

そんなある日、ふとしたはずみで、親友の女の子ケリーに本当のことを打ち明けると、ケリーはジョージの気持ちを理解し、2回目の公演で役を入れ替わろうと言ってくれます。ジョージ

は母親に気持ちを伝えたい一心でその計画を実行に移します。本番を見事に演じ切ったジョージは、自分を解放する喜びを味わいます。かたくなだった母親も、ジョージのありのままを受け止めようとしてくれるようになります。

・『ぼくがスカートをはく日』

『ジョージと秘密のメリッサ』と似た境遇の子どもを描いているのが、エイミ・ポロンスキー（Ami Polonsky）の『ぼくがスカートをはく日』（2014, 紹介資料リスト 18）です。

12 歳のグレイソンは物静かでクラスでも目立たない男の子。両親は交通事故で他界し、叔父と叔母に引き取られていますが、特に問題を起こすこともなく学校生活を送っています。

そんなグレイソンの趣味はお気に入りの服を着た自分を想像したり、教科書の端に可愛い絵を描いたりすること。それでも成長するにつれ、お気に入りの可愛い服はだんだんと自分には似合わなくなってくるし、教科書の端に描く絵は男の子が描くにはふさわしくないのかもしれないと思うようになってきます。

そんなグレイソンに 1 つの転機が訪れます。大好きな人文学のフィル先生が顧問を務める演劇部がキャスト募集を始めたのです。演目は「ペルセポネの物語」。グレイソンは女神ペルセポネ役を演じたいと強く望みます。そこから、グレイソンのこれまでの生活が少しずつ変わり始めます。両方の作品とも、演劇がキーになっていることが興味深いと思います。

・『パンツ・プロジェクト』

この 2 作とは反対に、女子の体で生まれたけれど、心は男子の主人公を描いたのが、キャット・クラーク（Cat Clarke）の『パンツ・プロジェクト』（2017, 紹介資料リスト 5）です。主人公のリヴが自分の心に気付くきっかけになるのは、制服です。小学校まではズボンばかりはいて活発に遊び回っていたリヴですが、中学に上がると制服を着なければなりません。そして、それはもちろんスカートです。

自分の抱えた違和感を探っていくうちに、リヴは「トランスジェンダー」という言葉に行き当たります。身体的には女の子で、周りにも「女の子」として見られているけれど、本当は男の子だと思っているリヴは、そういった気持ちを持っている人は自分だけではないことを知ります。

どうしてもスカートをはきたくないリヴは、制服はスカートでもズボンでも選べるようにしてほしいと学校に対して働きかけを始めます。これがタイトルにもなっている「パンツ・プロジェクト」です。

日本でも、最近ではスカートとズボンを選べるところが増えてきました。ただ、一方ではブラック校則も話題になっています。生徒から学校に働きかける、例えばきちんと署名運動をしたり、デモンストレーションを行ったりという行動を起こすという点でも、この作品は読まれてほしいと思いました（この作品にはそういったことが描かれています）。

ちなみに、今、日本では権力に異を唱えること自体が即、悪いことになっているように思えてならないときがあります。ケイリン・リッチ（KaeLyn Rich）が書いた *Girls resist!*（2018）という本がありますが、これは、フェミニズムの運動の始め方、オンラインの署名活動のやり方、募金の集め方、プレス対応、グループの維持の仕方……などが書かれた、行動を起こすためのハウツー本です。この原書を読んだとき、こうしたことを教える本が出るというところにアメリカの強さを見た気がしました（問題は山積みですが）。そして、日本にそういう力が弱いのではないかと懸念する気持ちもあり、ぜひ日本に紹介したいと思いました。結局そのときは、

翻訳に至らなかったのですが、2019 年に晶文社から『世界の半分、女子アクティビストになる』（寺西のぶ子 訳）として出版されたので、とてもうれしく思っています。

『パンツ・プロジェクト』に戻りますが、意地悪な女子や、無理解な校長、親友の裏切りなど、リヴはさまざまな障害にぶつかります。そうしていろいろな経験をすることによって、最初は、男子はズボンをはけるなんてずるい！　という思いから始まったパンツ・プロジェクトは、どんどん発展していきます。リヴは、男子だって好きなもの（例えばスカート）を着たいかもしれないということに気付き、さらに、女の子が毎日さらされている視線についても考えるようになります。

リヴの両親は女性同士のカップルです。また、リヴの良き理解者となる同級生のジェイコブの母は、大学ではフェミニズムを教えているという設定です。こうした設定は、周囲の環境や大人の役割についても考えさせてくれます。子ども 1 人で戦い続けるのは本当に困難であること、しかし実際にそうした困難に人生を阻まれている子どももいることを考えずにはいられません。これも、先ほどの例でいえば、そうした子どもがこの本を読んで、「こういう世界や人も存在するんだ」と勇気付けられたらうれしいですし、また本人自身がそうした問題を抱えていないとしても、この本を読んだら、自分は意地悪なクラスメートじゃなくて、ジェイコブのような人になりたいと思ってくれると思います。逆に、自分の苦しい現実とは違うので、受け入れられないという子ども読者もいるでしょう。だから、やはりいろいろな立場や考えから描かれた本が必要だと思うのです。

もう 1 つ、『パンツ・プロジェクト』では、英語の“I”の訳し方に悩みました。リヴは女子として生まれ、女子として育っていますから、日本でいえば一人称は「わたし」や「あたし」である可能性が高い。でも、心は男子のリヴは、自分を「わたし」とは呼びたくないでしょう。一方で、トランスジェンダーという言葉も最近知ったリヴが、小さい頃から「ぼく」や「おれ」と言っていたかは疑問です。もちろんそういう女子もいることはいるのですが、物語としてはややリアリティを欠いてしまう。それで、悩んだ末、一人称は全く使わないことにしました。日本語はもともとそんなに人称は使わないので、なんとか違和感なく訳せたのではないかなと思います（他にも人称を使わずに訳した翻訳作品はたくさんあります）。

そのときは、英語の“I”は便利だなと思ったのですが、一方、英語には“he”と“she”があります。性別を決定してしまうこの人称代名詞に、主にノンバイナリー、つまり自分の性認識に男性か女性かという枠組みを当てはめようとしない人たちから異が唱えられるようになり、そうした場合に“they”を三人称単数で使うという使用法が、今アメリカを中心に広まりつつあります。この“they”をメリアム・ウェブスター社（Merriam-Webster）が「今年の言葉」（Word of the Year）にしたのが、2019 年[18]。どのくらい定着するかなと思っていましたが、今ではYA小説やファンタジーを読んでいても、しょっちゅう出てくると言っても、言い過ぎではありません。

こうして考えはどんどん更新されます。先ほど紹介した『ジョージと秘密のメリッサ』の原題は*George*でした。そして、2015 年に出た当時は、トランスジェンダーを主人公にした数少ないミドルグレードの小説として、高い評価を受けました。でも、その後、さまざまなイデオロギーの更新もあり、作者のジーノ自身が「これはジョージの話でなくメリッサの話だった」として、2021 年に*Melissa's Story*とタイトルを変えています[19]。そういう意味では、日本語版

18　Word of the Year 2019 | They, *Merriam-Webster* (website) <https://www.merriam-webster.com/words-at-play/word-of-the-year-2019-they/they>

19　Melissa's Story and Sharpie Activism, *Alex Gino* (website) <http://www.alexgino.com/2021/07/melissas-story-and-sharpie-activism/>

のタイトルは先見の明があったなと思いました。

・『兄の名は、ジェシカ』

トランスジェンダーの子どもを描いた作品としては、最近『兄の名は、ジェシカ』（2019, 紹介資料リスト 19）も出ました。作者のジョン・ボイン（John Boyne）は、『縞模様のパジャマの少年』（2006）や『ヒトラーと暮らした少年』（2015）など、ファンタジーと言ってもいいような設定でホロコーストのようなリアルな物語を描きます。それに対しては、いろいろな考え方があるのではと思うこともあります。

この『兄の名は、ジェシカ』も、ある意味デフォルメされた設定が使われています。主人公のサムにとって、4 歳年上のジェイソンは自慢の兄。穏やかで優しく、しかもサッカー部のキャプテンで、学校でも人気者。しかし、その兄が自分はトランスジェンダーだとカムアウトしたところから、サムの葛藤が始まります。

デフォルメされた設定と言ったのは、サムとジェイソンの両親が、母親は閣僚で、有力な次期首相候補であること、そして、父親はその秘書であること。しかも、かなり俗物的な考え方をする場面もあり、やや極端にも思えるのですが、その分やはり読ませます。

でも、この作品の重要性はそれだけでなく、トランスジェンダー本人ではなくその兄弟を主人公としたことだと思います。サム自身がなかなか兄を受け入れることができず、またサムまで学校でからかわれるようになるという描写は、読者に一面的でない現実を教えてくれます。

Ⅱ　BLM運動を中心とした人種差別を描いた作品

さて、次に私が注目すべき分野として挙げたいのは、BLM 運動を中心とした人種差別を描いた作品です。ブラック・ライブズ・マターのハッシュタグ（#BlackLivesMatter）が立ったのは 2013 年。その前年（2012 年）に起こったのが、BLM 運動の発端となったトレイヴォン・マーティン射殺事件です。これは、17 歳の黒人トレイヴォン・マーティン（Trayvon Martin, 1995-2012）が、28 歳の自警団員ジョージ・ジマーマン（George Zimmerman）に射殺された事件で、ジマーマンがたった 5 時間の尋問のみで釈放されたため大きな問題となりました。

時期は前後しますが、黒人のオスカー・グラント三世（Oscar Grant Ⅲ, 1986-2009）射殺事件（2009 年、映画『フルートベールの駅で』[20] に詳しい）、ミズーリ州ファーガソンでの白人警官による黒人青年マイケル・ブラウン（Michael Brown, 1996-2014）の射殺事件（2014 年）など、黒人が射殺され、加害者は最初、罪に問われないという事件が続きます。そして、皆さんの記憶にも新しいジョージ・フロイド事件が起きます。黒人男性ジョージ・フロイド（George Floyd, 1973-2020）が、2020 年 5 月 25 日にミネアポリス近郊で、警察官の不適切な拘束方法によって死亡させられた事件です。

・『ザ・ヘイト・ユー・ギヴ　あなたがくれた憎しみ』

これに先立つかたちで出版されたのが、アンジー・トーマス『ザ・ヘイト・ユー・ギヴ　あなたがくれた憎しみ』（2017, 紹介資料リスト 20）です。ギャングが徘徊し、ドラッグが蔓延するゲットー（黒人街）で生まれ育った高校生の女の子スターは、10 歳の時、友達が拳銃で撃たれるのを目撃しています。その後、裕福な白人の子たちが通う高校に通っていたスターですが、ある夜、目の前で幼なじみのカリルが警官に撃たれるところを見てしまいます。しかし

20　ライアン・クーグラー（Ryan Coogler）監督, 2013 年（日本では 2014 年）公開.

警察は、無抵抗のカリルを撃った白人警官の行為を正当化するため、カリルを極悪人に仕立て上げようとします。スターは、カリルの汚名をそそぐため、証人として法廷に立つことを決意します。

作品の最初の方に、スターは小さい頃から両親に、警察に止められたら急に動くな、逆らうな、丁寧に話せ、両手はいつも見えるところに置いておけ、と繰り返し教えられてきたという描写があります。これは、白人が気付いていなかった黒人の現実を伝えるものとして、大きな反響を呼びました。裏返せば、白人は生まれながらに特権を持っていることを意味します。

・『オール★アメリカン★ボーイズ』

この白人の特権については、最近だいぶ語られるようになりました。このテーマを正面から描いたのが、ジェイソン・レノルズ（Jason Reynolds）とブレンダン・カイリー（Brendan Kiely）による『オール★アメリカン★ボーイズ』（2015, 紹介資料リスト 24）です。

黒人の少年ラシャドはポテトチップスを買いに行った店で万引きを疑われ、白人の警官から激しい暴行を受け入院します。それを目撃した白人の少年クインは、その警官が友人の兄のポールだと気付きます。事件の動画がテレビやネットで拡散し、ラシャドとクインが通う高校では抗議のデモが計画され、彼らも自分の態度を決めなければならなくなります。

黒人作家のレノルズが黒人の少年ラシャドの視点から、白人作家のカイリーが白人の少年クインの視点から交互に描いています。ラシャドの苦しみや怒りや戸惑いは、『ザ・ヘイト・ユー・ギヴ　あなたがくれた憎しみ』のスターが抱いているものに近いと感じます。そういった差別にはある意味慣れっこになっているけれど、もちろん慣れっこだからといって容認しているわけでも傷つかないわけでも怒りがわかないわけでもない。一方で、抗議の声を上げても、受け入れられるかも分からず、標的になるかもしれず、逆にヒーローやヒロインとして祭り上げられ求めていない注目を浴びることになるかもしれない。ごく普通の高校生である彼らにとって、それは荷が重いと思うのも、うなずけます。そんなせめぎ合いの中、彼らがどう決断するのか。それが、こうした作品の 1 つの読みどころでもあります。

そして、白人少年のクイン。彼は、決して差別的な少年ではなく、むしろ友人もたくさんいる気のいい高校生です。でも、事件を目撃してから、そのことについて、考えざるを得なくなります。

事件のことや、ラシャドのことだって、もう忘れることにすれば、白人であるクインは忘れて元の日常に戻っていくことができます。でも、黒人の友人たちにはそれはできないのだ、と気付く場面はとても大切なことを語っていると思います。そして、学校でラシャドの話がタブーになっていくことについて、ラルフ・エリスン（Ralph Ellison, 1914-1994）の『見えない人間』（1952）と関連付けて考えます。そして、こう思うようになるのです。

> 自分は差別主義者なんかじゃないって、みんながそう思ってるっていうのが、まさに問題なんだ。気づかないふりをしたり、見えないふりをしたり、つまりはそれが差別なんじゃないか。それを認めるのはきつい。知らないうちに、おれたちはそんな差別の中に生きてて、おれも、おれがよく知ってる連中も、みんなそれに荷担（かたん）してるって認めるのは。[21]

本の中では、南アフリカで人種差別と闘ったデズモンド・ツツ（Desmond Tutu, 1931-2021）

21　ジェイソン・レノルズ, ブレンダン・カイリー 著（中野怜奈 訳）『オール★アメリカン★ボーイズ』偕成社, 2020, p.299

の言葉も引用されています。

〝不正が行われているときに中立であろうとするならば、抑圧する側に立つのを選んだことになる〟[22]

この言葉を聞くと、キング牧師（Martin Luther King Jr., 1929-1968）の“In the end, we will remember not the words of our enemies, but the silence of our friends.”（最後には、わたしたちは敵の言葉ではなく友の沈黙を覚えているものなのだ）を思い出します。黙っているだけでも差別に荷担することになるのだということに気付くことが、大きなテーマになっていると思います。

・『MARCH』

キング牧師や彼の率いた公民権運動について、日本の読者にお薦めしたいのは『MARCH』（紹介資料リスト 21〜23）でしょう。これはグラフィックノベルです。書いたのは、公民権運動の立役者の 1 人で、あのオバマ（Barack Obama）大統領の就任式にも登壇した議員のジョン・ルイス（John Lewis, 1940-2020）（共著 アンドリュー・アイディン（Andrew Aydin））。絵は、ネイト・パウエル（Nate Powell）。グラフィックノベルとして初の全米図書賞（児童文学部門）を受賞しています[23]。

全 3 冊で、各巻のあらすじは岩波書店の特設サイトに載っています[24]が、公民権運動を網羅した歴史書が漫画の形で出たのです。最初に読んだときは、公民権獲得という輝かしいゴールまでの歩みを描いているものであるにも関わらず、苦しさやつらさのほうが印象に残ってしまいました。ここまでしないと、権利を獲得することはできないのか、と。これは、女性参政権獲得への歩みを描いた本を読んだり映画を見たりしたときと似た苦しさのように感じます。イラストが大きな役割を果たしている作品では、デイヴィッド・ロバーツ（David Roberts）の『サフラジェット　平等を求めてたたかった女性たち』（2018）が出ていますが、これも過酷な参政権運動の様子を描いています。

BLM、黒人差別を中心とした人種差別のテーマは、数年前までは「日本は関係ない」と言われることも実は多かったのですが、アメリカの運動の盛り上がりとともに、日本にも紹介されるようになった実感があります。アメリカで多くの本が書かれ、相対的に質の高いものが増えたことや、アメリカという国自体への関心なども理由だったと思います。もちろん、実質上の移民が増えている現在、人種の問題は決してもう他人事ではないことも大きいでしょう。そして何より、アメリカにおける人種差別が研究されるにつれ、差別がいかに構造的なものであるか、そしていかに白人が自分たちに与えられている特権に気付いていなかったか（もしくは、気付いていないふりをしてきたか）にスポットが当たるようになり、それが、人種問題に限らず、差別すべてに共通するものだという認識が深まってきたことも、大きな理由だと思います。

Ⅲ　フェミニズムのテーマを持つ作品

先ほどグラフィックノベルを紹介しましたが、フェミニズムを中心としたジェンダーをテーマとした作品は、グラフィックノベルで多く出ています。エレナ・ファヴィッリ（Elena Favilli）とフランチェスカ・カヴァッロ（Francesca Cavallo）の『世界を変えた 100 人の女の子

22　同上, p.330.
23　March: Book Three, *National Book Foundation* (website) <https://www.nationalbook.org/books/march-book-three/>
24　MARCH - 岩波書店 <https://www.iwanami.co.jp/march/>

の物語　グッドナイトストーリーフォーレベルガールズ』（2016, 紹介資料リスト 30）、ティリー・ウォルデン（Tillie Walden）の『スピン』（2017, 紹介資料リスト 32）、サビーネ・レミレ（Sabine Lemire）文、ラスムス・ブラインホイ（Rasmus Bregnhøi）絵の『好きな人に触れたくなるのは、どうして？』（2018, 紹介資料リスト 33）、リーヴ・ストロームクヴィスト（Liv Strömquist）の『禁断の果実　女性の身体と性のタブー』（2014, 紹介資料リスト 34）、マリア・ヘッセ（María Hesse）の『わたしはフリーダ・カーロ』（2016, 紹介資料リスト 35）など、読みごたえのあるものがたくさんあります。

『禁断の果実　女性の身体と性のタブー』では、今まではタブーと言われていたことが、なぜそもそもタブーだったのかということも書かれています。後でも触れますが、日本の性教育がどれだけ遅れているかというのも、これを読むとよく分かります。（この本が出版された）北欧だから進んでいるのかなと思っていましたが、そうではなく、日本だけがかなり遅れていることに気付かされます。

『わたしはフリーダ・カーロ』のフリーダ・カーロ（Frida Kahlo, 1907-1954）は、フェミニズムという文脈で再度注目されている芸術家です。そんなフリーダ・カーロの人生を描いたグラフィックノベルです。

このようなフェミニズムのテーマを持った作品を、次に注目すべきものとして紹介したいと思います。しかし、グラフィックノベルに対して、小説の世界は少し邦訳が遅れているような気がします。

1　19 世紀を舞台にした作品

・『ダーウィンと出会った夏』

ジャクリーン・ケリー（Jacqueline Kelly）の『ダーウィンと出会った夏』（2009, 紹介資料リスト 43）のような過去の差別を扱ったものは、昔から書かれていましたし、邦訳も出ています。

『ダーウィンと出会った夏』の舞台は、1899 年、テキサス州。キャルパーニアは 11 歳で、綿花工場を営む家族の 7 人きょうだいの真ん中の、たった 1 人の女の子です。

ある日、キャルパーニアは兄から観察ノートをもらい、観察したことを書き留めはじめます。そうしているうちに気になったことを、それまで近寄ったことのない祖父に思い切って尋ねたことから、祖父との交流が始まります。祖父は、実験室で実験するか、標本採集に歩き回るか、書斎で本を読みふけるかしている変わり者で、孫たちとは接点がありませんでした。しかし、その質問が面白かったことから、その後、キャルパーニアを標本採集に連れ出し、実験を手伝わせ、学校では教えてくれない哲学、自然科学、宇宙、物理など、さまざまなことを話してくれるようになります。そして、キャルパーニアは科学者になりたいと思うようになるのです。

でも、キャルパーニアのお母さんが一人娘に求めているのはそういうことではなく、幸せな結婚です。キャルパーニアが嫌いな手芸や料理を教え込もうとし、クリスマスにも、キャルパーニアが欲しがった自然科学の本ではなく、『家事の科学』という本を贈ります。家事を学んで最高の主婦になるのが女の幸せだと説く本は、当時、はやっていました。

科学者になりたいことを友達に打ち明けても、「でも、女は結婚して子供を産むものでしょ？」と言われてしまいます。

1899 年が舞台でしたが、ではこの話は過去のものなのかというと、どうでしょう。現代ではそんなことはありえない！　と思いたいですが、21 世紀の日本でも未だに、耳にすることではあります。

・『嘘の木』

フランシス・ハーディング（Frances Hardinge）の『嘘の木』（2015, 紹介資料リスト 29）の主人公フェイスも、『ダーウィンと出会った夏』のキャルパーニアに少し似ています。14 歳のフェイスは、博物学者であり厳格な牧師である父に、畏れに近い敬意を抱いています。そして、自身も博物学者に憧れますが、19 世紀のイギリスで女性が研究者になるのは無理だと諦めています。

キャルパーニアと違うのは、フェイスには、キャルパーニアの祖父に当たるような理解者が周りにいないことです。

フェイスは父に憧れていますが、父親の方は娘の話などに耳を貸しません。女には男のような勇気も知能もないし必要ないのだから、余計なことは考えなくていいと、はっきり言うほどです。大学へ行って勉強し、名を成すことを期待されているのは、まだ幼い弟のハワードの方なのです。

物語は、一家が住み慣れたロンドンを離れ、ヴェインという田舎の島へ向かっているところから始まります。そこで行われている発掘作業に、科学者である父が招かれたからということになっていますが、両親は何か隠している様子だし、叔父のマイルズは「ほとぼりがさめるまでヴェインにいるのがいちばんいい」などと謎めいたことを言います。何か変だと思ったフェイスは、父の手紙を盗み見て、父が「詐欺」のそしりを受けているらしいと知ります。

でも、父を信じているフェイスは、自分は父の味方だと言うのですが、そのときに先ほど言ったように、父は「女には男のような勇気も知能もないし必要ないのだから、余計なことは考えなくていい」と言い放ちます。でも、父の味方をしたいなら、ある植物を海辺の洞窟に隠すのに手を貸すようにと言うのです。そのある植物こそ、タイトルにもある「嘘の木」なのですが、そのミステリアスな植物は何なのか、ぜひぜひ物語を読んでいただきたいと思います。

そのあとも、さまざまな事件が起きるのですが、それに絡んで、フェイスが母親を冷ややかに観察し嫌悪感を抱く様子なども描かれ、後半は、ついに反抗心に火をつけたフェイスが持ち前の頭の良さを生かし、行動を起こしていくさまが劇的に語られます。

この本は、原著はYAとして出版されていますが、日本では大人の本として出版されています。日本翻訳大賞の候補作に挙げられる[25]など、高い評価を受けています。他にも、ディーリア・オーエンズ（Delia Owens）の『ザリガニの鳴くところ』（2018, 紹介資料リスト 50）なども本来はYAなのですが、日本では大人の本として出版されています。家族に捨てられた少女が湿地で 1 人で暮らしているというストーリーで、湿地の描写なども読みごたえがあり面白い作品だと思います。2021 年本屋大賞「翻訳小説部門」第 1 位となる[26]など、高い評価を受けています。日本では、YAとして出版されると評価されにくいのかなと思ってしまいます。でも、YAと大人の本の境界をまたいでいる本は、たくさんあります。とはいえ、作品を作ったり買ったり、書店や図書館でどこに置くかを考える場合に、ある程度の境界が必要なのもよく分かります。このあたりの問題をどう解決すればいいかというのは、私個人が今、抱えている問題意識でもあります。

2　ディストピア小説（大人向けとして出されている作品）

境界という意味では、マーガレット・アトウッド（Margaret Atwood）の『侍女の物語』（1985,

25　第四回日本翻訳大賞 二次選考対象作品一覧 | 日本翻訳大賞 公式HP <https://besttranslationaward.wordpress.com/2018/02/08/no4-nizi-list/>

26　2021 年本屋大賞「翻訳小説部門」| これまでの本屋大賞 | 本屋大賞 <https://www.hontai.or.jp/history/honyaku2021.html>

紹介資料リスト 41）や、ナオミ・オルダーマン（Naomi Alderman）の『パワー』（2016, 紹介資料リスト 49）は、原著も（日本でも）大人の本として出されているけれど、若い世代にぜひ薦めたいフェミニズムのテーマを持った本です。

・『侍女の物語』

『侍女の物語』は 1985 年の作品ですが、最近、Hulu でもドラマになったり（『ハンドメイズ・テイル／侍女の物語』）、続編の『誓願』（2019）が出版されたり、話題の一冊です。1990 年に日本語訳（新潮社）が出たときもかなり話題になったので、ストーリーをご存じの方も多いと思いますが、近未来のアメリカにキリスト教原理主義勢力によって誕生した宗教国家、ギレアデ共和国を舞台としたディストピア小説です。有色人種やユダヤ人を迫害し他の宗派も認めない、内戦状態にあって国民は制服の着用を義務付けられ監視され、逆らえばすぐさま処刑か収容所送り。環境汚染、原発事故、遺伝子実験などの影響で出生率が低下し、数少ない健康な女性はただ子どもを産むための道具として、支配者層である司令官たちに仕える「侍女」となるように決められている、という衝撃的な設定です。出版当時も話題になりましたが、「子どもを産むための道具」というのは、どこかで聞いた覚えがありますよね。

・『パワー』

『パワー』は、2016 年の比較的最近の作品です。「ある日を境に世界中の女に強力な電流を放つ力が宿り、女が男を支配する社会が生まれた――。」[27] という設定のディストピア小説です。突如、10 代の女性たちが電撃を放つ特殊能力に目覚め、その能力は女性の間にどんどん伝搬していきます。つまり、男女の力関係が逆転していくということ。それで、めでたく男女同権の社会になりました、とはならず、男性差別へと発展していきます。そういう意味でディストピア小説ですが、その描写は、まさに現代女性が被っている差別です。主人公の 1 人のトゥンデが、夜道を 1 人で歩くときに恐怖を感じる描写にはハッとさせられます。女性読者として、そうか、男性はそういう恐怖を普段味わうことはないんだというのは発見でしたし、男性読者は女性が日常的にその恐怖にさらされていることに気付くことになります――気付くことを祈ります。最後のやり取りなども、男性差別に憤った男性作家が、作品を読んだ女性に「あなたの書いた本はすべて、「男流文学」のひとつとして評価されてしまうというご趣旨でした。……この本を女性の名前で出すことも検討してはいかがでしょうか」[28] と言われてしまうところなど、皮肉がきいていてニヤッとしてしまいます。

話を戻しますと、『ダーウィンと出会った夏』や『嘘の木』、古くは、『若草物語』（1868）のジョーや、『赤毛のアン』（1908）のアンなどに（1 巻目ですが）代表されるように、従来の「女の子らしさ」の規範からはみ出たり、反抗したりする主人公は多く描かれてきましたし、日本にも翻訳紹介されてきました。最近出た斎藤美奈子の『挑発する少女小説』（河出書房新社, 2021）も、そうした少女小説を紹介しています。こうした研究は、児童文学研究ではいろいろ行われてきたことだと思うので、児童文学研究者からも斎藤のように広く読まれる研究本が出るといいなと思ったりしました。

つまり、昔を舞台にした本で女の子らしさを問う本はいろいろ書かれていたわけですが、現代を舞台にしたり、現代的なテーマを持ったりしたものは、もっともっとこれから翻訳されて

27　パワー : ナオミ・オルダーマン, 安原　和見｜河出書房新社 <https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309207551/>
28　ナオミ・オルダーマン 著, 安原和見 訳『パワー』河出書房新社, 2018, p.423.

もいいように思っています。

3　現代的なテーマを持った作品

・*Rules for Being a Girl*

現代的テーマというのは、例えば、同意の問題。

Candace Bushnell と Katie Cotugno の *Rules for Being a Girl*（2020, 紹介資料リスト 37）は、高校生のマリンが主人公。ジャーナリズムに関心があり、名門ブラウン大学入学を目標にしています。ジェイコブという彼氏もいて、彼はラクロス部。ラクロス部は強豪チームで、学校でも特別視されています。マリンは自分も彼らを特別視している 1 人かもしれないと自覚しつつも、それを当然のように振る舞う彼らを鼻につくとも思っていました。

そんな同年代とは振る舞いも知性もまるで違うように思えるのが、新聞部の顧問である国語の教師ベックスです。若々しいルックスと着こなしで、生徒たちとも友達のように付き合う気さくなベックスは、生徒たち、特に女生徒の人気の的です。

新聞部の活動が遅くなった日など、ベックス先生はマリンを車で家に送ってくれるようになります。そしてある日、ベックスはマリンに貸すと約束した本が家にあるからと言って、家に誘います。マリンは遠慮しますが、結局、好奇心も手伝ってベックスの家へ行き、キスをされます。マリンは動揺して、ベックスの家から飛び出します。

でも、そのことを親友に打ち明けても、「ちょっとした誤解かなにかでしょ。そんなことを表ざたにしたら、ベックスの人生はめちゃくちゃになるのよ」と言われてしまいます。

自分が大げさに考えすぎているのだろうか。そもそも自分だって、ベックス先生に憧れていた。誘われて、家に上がったのだから、悪いのは自分かもしれない。そんなことで、1 人の人生を台無しにしていいのだろうか。一方で、先生は生徒よりも強い立場にいます。しかも、ベックス先生はブラウン大学とのつながりがあることも、マリンに匂わせていました。そういう力の非対称の中で行われるハラスメントについて、女性が家に上がった時点で OK という意味だ、というような誤った認識などにぐいぐい迫ってくる本です。

・*He Must Like You*

Danielle Younge-Ullman の *He Must Like You*（2020, 紹介資料リスト 40）、このタイトルは、小学生の男の子が好きな女の子につい、意地悪をしてしまうという状況でよく言われるセリフ「あの子はきっとあなたのことが好きなのよ……（だから我慢しなさい）」から来ています。

主人公のリビーは、来年、大学進学を控えた高校生。父親が彼女の学費を使いこんだために、アルバイトをしなければならなくなり、小さな町のレストランで働いてチップを稼いでいます。そのレストランにやってくるのが、地元の名士ペリー。名士といっても、正体は下品な親父で、周りの人間が自分にたてつけないのをいいことに、傍若無人な振る舞いをしています。

ペリーはリビーを気に入って、必ず彼女のサーブする席に着いては、下品な冗談を言ったり、やたらとボディタッチをしてくるのですが、チップがほしいリビーは我慢しています。しかし、ある日、とうとう我慢できなくなって、持っていたピッチャーの水をペリーにかけてしまいます。もちろんリビーは即クビになり、小さな町に彼女の噂話は一気に広がるのですが……

その前に、バイト先の優しい男の子と酔った勢いで寝てしまうのですが、そのときもリビーは散々、嫌だという意思表示をしています。それでも行為に及んでしまい、後で深く後悔するのですが、酔っていて、しかも自分の家に呼んだのだから仕方ないと諦めかけます。でも、その後に高校で性的同意についての授業を受け、あれはデートレイプだったのではないかと思い

当たります。

周りから（母親からも）「気に入れられているから、そんなことをされたのよ。だから、あなたのほうがうまいいなし方を覚えなさい」と言われるのですが、やっぱり納得できず、最後には立ち上がることになります。アメリカでは性的同意についての授業がきちんと行われているのだということについても発見のあるストーリーでした。

・*The Prettiest*

他に現代的なテーマといえば、ルッキズムがあります。外見に対する侮辱について、オリンピックでも問題になった[29]ことは、覚えていらっしゃる方も多いでしょう。

Brigit Youngの*The Prettiest*（2020, 紹介資料リスト38）は、フォード中学8年生の子どもたちの話で、エミリー・ディッキンソン（Emily Dickinson, 1830-1886）を崇拝する文学少女のイヴと、8年生の女王として君臨していたソフィーの2人が主人公です。フォード中学の女子の学校生活は、〈8年生かわいい女子ランキングTOP 50〉が出回ったことから、一変します。

大人しくて常に親友ネッサの陰に隠れていたイヴは、ランキング1位になったことから、いきなり学校中の注目を浴びることになります。それまでイヴの存在に気付いていたかどうかさえ分からない、人気ナンバーワンの男子ブロディに声をかけられたり、同じくナンバーワン女子のソフィーに勝手にライバル視されたり、下品なメールも送られてくるようになります。好奇の目にさらされ、うわさの的になり、挙げ句の果てに、リストを作ったのはイヴ本人ではないかとまで言われ、イヴは疲れ果ててしまいます。

一方のソフィーも、なってしかるべき1位になれなかったせいで、それまでの生活が少しずつ変わっていきます。シングルマザーの家庭で育ったソフィーは、母親にいつも「相手に、下に見られるな」と言われ、容姿はもちろん勉強やスポーツも常に努力してきました。貧困者の多い団地に住んでいることを隠し、古着をリメイクして、髪やメイクに細心の注意を払い、一分の隙も見せずに学校生活を送ってきたのに、イヴのような地味な女子に1位の座を奪われたのです。

イヴの親友ネッサは、ランキング外でしたが、そんなことにこれまでの生活を乱されたくなかったし、乱されるつもりもありません。確かに自分は太っているけれど、「美の基準」は1つではない。それに、自分は演技と歌の才能があるし、将来の夢もある。そう思っていても、ブロディにディスられるとムカつくし、どこかで傷ついている自分にも気付かざるを得ません。

作品中には秀逸な表現がたくさんあります。

「イヴはだれがリストを作ったのか、見当もつかなかった（中略）イヴのことをバカにしたかったのかもしれない。ううん、イヴだけじゃなくて、リストから外された女子のことも。女子の気持ちなんてどうでもいいのだ。そうした数字が、インクみたいに女の子の皮膚にしみ込んでいって取れなくなるなんて、思いもしないのだ。」

「（リストを作ったということは）だれかがイヴのことを「モノ」みたいに扱ったってことだろ。テレビゲームみたいにランク付けしたんだよ。『RPGトップ50』とか、アマゾンでフィギュア（人形）に星をつけるみたいにね。無視してるのさ、イヴが人間だってことを！」（イヴの兄のせりふ）

29　2021年に開催された東京オリンピック・パラリンピック開閉会式の演出統括役が、女性タレントの容姿を侮辱するメッセージを関係者に送った問題で、開会の4カ月前に辞任したことを指す。（「五輪式典の演出統括辞任、女性タレントの容姿侮辱で」『日本経済新聞』2021.3.18, 夕刊）

人気の女子が、体育の時間にわざと男子に勝たないように手加減している描写や、イヴのお父さんがリストのことを知って、「いいじゃないか、1位なんだから！」と言って家族から総スカンを食う場面など、日常に潜むジェンダーの問題を描いていて、よくできている作品です。いろいろなことを内面化してしまう前に、（男女問わず）中学生に読んでほしいと思いました。これは、私の訳で出版されます[30]ので、ぜひ若い読者に届いてほしいと心から願っています。

ちなみにルッキズムの問題は、映画の世界ではずいぶんいろいろ公開されていて、最近リバイバル的に宣伝されている『キューティ・ブロンド』[31]や、『アイ・フィール・プリティ！　人生最高のハプニング』[32]、今度公開になる『ビルド・ア・ガール』[33]など、若い観客に的を絞った作品が多く出ています。若いうちからこういう作品を見てほしいなと思います。

・*Unpregnant*

あと、現代的なテーマといえば、中絶もそうでしょう。アメリカでは常に政治課題として大きく取り上げられ、最近もテキサス州での事実上の中絶禁止など、物議を醸し続けています。でも、実は日本でも、中絶の手術の方法や、中絶薬が不認可なこと[34]、相手の同意が必要なこと（つい最近もそれで胎児を殺した罪で女性が逮捕されたことに、疑問の声が上がりました）、そもそも性教育が先進国の中で極端に遅れていることなど、問題は山積みです。

Jenni Hendriks と Ted Caplan の *Unpregnant*（2019, 紹介資料リスト 39）は、まさに中絶を扱ったストーリー。ベロニカは高校卒業を目の前にして、妊娠が発覚します。中絶を決意しますが、ミズーリ州では親の同意なしに中絶することが禁止されていることを知ると、親の同意なしに中絶できるクリニックがあるニューメキシコ州アルバカーキに行く計画を立てます。しかし、そこへ行く手段がありません。そこで、元親友のベイリーに相談し、アルバカーキまで車で送ってもらうことにします。

2人の道行きを描くロードムービーならぬロード小説としての魅力もあり、ベイリーとの友情の再確認など、YAらしいテーマも含まれます。先ほど、セクシュアルマイノリティの話のときも述べましたが、中絶のようにさまざまな価値観がぶつかり合うテーマについては、たった1冊、たった1つの価値観の本だけでは、とても足りません。いろいろなものが出ることを望みます。命は大切だ、ということは明らかです。でも、実際にジェンダー差があまりにもあり、先ほど言ったように性教育も大幅に遅れている現状で、現実を描くものがもっとたくさん書かれ、読まれてもいいのではないでしょうか。

Ⅳ　散文詩形式／詩が大切な役割を果たしている作品

さて、もう1つ取り上げたいのは、詩形式で描かれた物語です。

・『エレベーター』

ジェイソン・レナルズ（Jason Reynolds）[35]の『エレベーター』（2017, 紹介資料リスト 25）は、地元のギャング抗争で兄ショーンが殺されたウィルの物語。15歳のウィルは「掟」（おきて）

30　2022年8月末、ほるぷ出版より『かわいい子ランキング』として出版予定。
31　ロバート・ルケティック（Robert Luketic）監督, 2001年（日本では2002年）公開. 原作は、Amanda Brown, *Legally Blonde*, 1st Books Library, 2001.
32　アビー・コーン（Abby Kohn）, マーク・シルヴァースタイン（Marc Silverstein）監督, 2018年公開.
33　コーキー・ギェドロイツ（Coky Giedroyc）監督, 2019年（日本では2021年）公開. 原作は、Caitlin Moran, *How to Build a Girl*, Ebury Digital, 2014.
34　2022年4月現在、認可申請中。
35　「II　BLM運動を中心とした人種差別を描いた作品」で紹介した『オール★アメリカン★ボーイズ』（2015, 紹介資料リスト 24）の著者である「ジェイソン・レノルズ」と同一人物。それぞれの表記は翻訳作品による。

に従って兄の仇(かたき)を果たすため、兄の銃を手に、マンションのエレベーターに乗り込みます。自宅のある 8 階から 1 階まで降りる、そのわずかな時間に、会えるはずのない人たち――すでに死んだ（殺された）はずの人たちが乗ってきます。それによって、兄が殺されるまでの間にどのようなことが起こったのか、また、憎しみと殺しの連鎖がいかに地域を覆ってしまっているかが分かるというストーリー仕立てになっています。

この作品は、詩の形で、激しい言葉がつづられます。

銃を持ったことはない。

手を
触れたことさえない。

予想より
重たい。

新生児
を抱いてるみたい。[36]

銃を赤ん坊に例えるような世界に暮らすというのはどういうことか、強い怒りと悲しみに満ちた言葉が伝えてきます。

・『詩人になりたいわたしX』

エリザベス・アセヴェド（Elizabeth Acevedo）の『詩人になりたいわたしX』（2018, 紹介資料リスト 27）の主人公シオマラは、ドミニカ系の移民二世です。中南米の移民に多いのですが、シオマラの母親も信仰が篤く、女の子はこうしてはいけない、ああしてはいけないと、ひどく厳格にシオマラを育てています。そんな母親に猛反発しながらも、「自分はなんてちっぽけなんだろう」とシオマラは思わずにいられません。

しかし、そんなとき、シオマラは高校のポエトリースラム部で詩のパフォーマンスに出会い、自己表現の場を発見します。「言葉は、ありのままの自分を解き放つ手段」、そのことに気が付いたシオマラは、いろいろなことから自由になっていきます。

この物語では、スポークンワードポエトリー、すなわち声と手ぶりや身振りを使って観客の前で詩を語る（朗読とは違う）アートの魅力が存分に語られています。

・『オン・ザ・カム・アップ』

一方、『オン・ザ・カム・アップ』は詩の形式ではありませんが、ラップバトルの世界が描かれています。主人公のブリは、若くしてギャングに殺された伝説のラッパーを父に持つ高校生。自身もラッパーとして成り上がろうと活動しています。ブリの通う学校は多様な生徒を受け入れることを売りにしていますが、補助金目当てで、実際は黒人やラテン系の生徒は差別的な扱いを受けています。ブリも、校門の持ち物検査で白人の警備員から暴行を受けます。

ブリの仲間は、暴行現場の動画を公開することで抵抗運動を広げようと提案します。また、

36　ジェイソン・レナルズ 著, 青木千鶴 訳『エレベーター』早川書房, 2019, p.65.

ブリをラップミュージシャンとして売り出そうとする人たちは、乱暴な黒人キャラで売ろうとして、ブリの意に沿わない歌詞のラップを歌わせようとします。

どちらに転んでも、ブリはある意味象徴的な存在に祭り上げられることになります。黒人というだけでいろいろなものを背負わされてしまうのです。ブリという個人で生きることはできないのか、そんなことまで描いている作品です。

・『わたしは夢を見つづける』

また、こうした作品に先駆けて、詩形式の作品を出していた作家に、ジャクリーン・ウッドソン（Jacqueline Woodson）がいます。彼女の 2014 年の作品が、2021 年に『わたしは夢を見つづける』として翻訳・出版されました（紹介資料リスト 28）。

こちらはウッドソンの自伝的作品ということで、南部に色濃く残っていた差別の状況も描かれています。ジャクリーンがオハイオ州で生まれたのは、キング牧師が人種差別に対する非暴力の闘いを本格化させた 1963 年でした。やがて両親の離婚に伴い、一家は南部のサウスカロライナ州に住む祖父母の元へ引っ越します。

南部には、当時もまださまざまな人種差別が残っていました。愛情あふれる祖父母との暮らしは幸せでしたが、母親は子どもたちを連れてニューヨークへ引っ越します。

寒くて、裸足で踏める土の地面もないニューヨークに、ジャクリーンは最初、なじめません。それでも、友達もできて、自分が好きなことも分かってきて……作家への道を歩み出すのです。こちらは、60 年近く前の物語ではありますが、逆に公民権運動からまだ 60 年しか経っていない、つまり黒人がひどい差別を受けていた歴史は「現代」なのだということを、改めて思い知らされることになります。

・『わたしの全てのわたしたち』

詩形式の本で紹介しなければならないのは、イギリスの作家サラ・クロッサン（Sarah Crossan）の作品でしょう。『わたしの全てのわたしたち』（2015, 紹介資料リスト 26）は、日本語版では翻訳家の金原瑞人が訳したものを、注目の詩人である最果タヒが再翻訳しています。

語り手は、16 歳のグレース。双子ですが、腰から下がくっついている結合双生児です。もう 1 人のティッピとともに、ずっと家で教育を受けてきましたが、資金の問題もあり、普通の高校へ通うことになります。2 人は好奇の目にさらされますが、“普通”でないと見なされ、“普通”に憧れる 2 人にも、家族、お金、友情、恋愛といった“普通”の問題は次々やってきます。

恋愛のような 1 人の問題と見なされることでも、2 人はいつも一緒です。それは不便なことのようにも思えますが、グレースはこう言い切ります。

これ以外の体を知らない。
これ以外の人生を知らない。
たった一人で生まれて、
たった一人で生きるなんて、
リアリティがなさすぎる。

ティッピといっしょに生きられて、私は最高に幸せ。
心からそう言える。[37]

37　サラ・クロッサン 著, 最果タヒ, 金原瑞人 訳『わたしの全てのわたしたち』ハーパーコリンズ・ジャパン, 2020, p.15.

シンプルな思いも詩でつづられると、すっと心に入ってきます。

同じクロッサンの『タフィー』（2019）は、家庭内暴力と認知症というハードなテーマですが、これも詩の形式で書かれています（それによってハードでなくなるわけではありません）。今月（2021 年 10 月）岩波書店から翻訳・出版されますが、原書の通り、横書きの本として出ます。『エレベーター』もそうでした。これから、こうした形式の本は増えていくのではないかと思います。

というのも、詩形式の本がアメリカで広く受け入れられるようになったこと自体、若い人たちがSNSの短い文章に読み慣れていることも関係しているのではと思っているからです。日本語は縦書きの文化ですが、SNSは横書きです。エモーションに働きかけてくる文章を書いたり読んだりする経験と、詩とは、どこかでつながっているような気がします。

2020 年のノーベル文学賞には、アメリカの女性詩人ルイーズ・グリュック（Louise Glück）が選出されました[38]。ルイ・ヴィトン（LOUIS VUITTON）の 2021 年秋冬メンズコレクションに、ラッパーで詩人のソウル・ウィリアムズ（Saul Williams）が登場したり、ヴァレンティノ（VALENTINO）が公式Instagramでフォロワー400 万人超の詩人ルピ・クーア（Rupi Kaur）のライブパフォーマンスを定期配信していたりと、ファッション界でも詩人が取り上げられる機会が増え[39]、現在の文化に詩がある意味で新しいものとして注目され、入ってきているのがうかがえます。

例えば、Instagramで有名になったソニー・ホール（Sonny Hall）は 1998 年、ロンドン生まれ。弱冠 23 歳の彼ですが、短い人生の間に起きた出来事は波乱万丈の一言。薬物とアルコール依存症に苦しみ、リハビリ施設への入居を機に詩を書き始め、Instagramのアカウントで自作の詩を投稿したところ話題に。2019 年には詩集*The Blues Comes With Good News*を出版し、デビュー作ながら半年で 1,500 部を売り上げました。

日本でも、大学の短歌研究会から新人賞が出たり、書肆侃侃房（しょしかんかんぼう）の新鋭短歌シリーズが話題になったりしているので、もしかしたら詩が若い人たちに浸透していくのかもしれないと、期待も込めて考えています。

V　今後の注目（おまけ）

最後に、最近ちょっと興味深いなと思っている作品を紹介します。SNSにも関係してきます。

・*The Mysterious Disappearance of Aidan S. (as told to his brother)*

The Mysterious Disappearance of Aidan S. (as told to his brother)（2021, 紹介資料リスト 46）はデイヴィッド・レヴィサンの作品です。

主人公はルーカス。ある日、12 歳の兄のエイデンが行方不明になります。警察が捜索し、近所の人も総動員して、エイデンを（もしくはエイデンの遺体を）捜します。ルーカスも、何度も警察や親に質問されます。

そして、6 日後、ひょっこりエイデンが帰ってきます。でも、エイデンはどこへ行っていたか、話そうとしません。最初は、喜んでいた警察や近所の人たちも、決して語ろうとしないエイデンに不快な気持ちをあらわにするようになります。

38　The Nobel Prize in Literature 2020 - Biobibliography - *NobelPrize.org* (website) <https://www.nobelprize.org/prizes/literature/2020/bio-bibliography/>

39　「アマンダ・ゴーマンで注目？詩人ブームを牽引するミレニアル世代の詩人はその人生も刺激的」『FASHIONSNAP.COM』ウェブサイト <https://www.fashionsnap.com/article/featured-poet/>

そしてとうとうエイデンはルーカスに別世界へ行っていたと打ち明けますが、それはとても信じられない話でした。信じかねているルーカスを見て、だから話したくなかったんだというエイデン。周りの大人たちは、嘘をつくなと怒り始めます。

ここまで聞いて何か気付かれた方はいらっしゃるでしょうか。そう、これは、ファンタジーの冒険談の、いわば裏の話です。要は、エイデンは（C.S.ルイス（Clive Staples Lewis, 1898-1963）の『ナルニア国物語』（1950）でいう）洋服ダンスの向こう側の世界へ行ってきたペベンシー家の子どもたちであり、ルーカスはナルニアの冒険には行けなかった子ども、つまりこれまでの物語だと主役にはならず描かれなかった子どもです。そうした子どもの方を、レヴィサンは主役にしてこの物語を紡いでいます。

・*The Rest of Us Just Live Here*

The Rest of Us Just Live Here（2015, 紹介資料リスト 47）は、*Chaos walking* シリーズ[40]や『まだなにかある』（2013, 紹介資料リスト 6〜7）などで知られるパトリック・ネス（Patrick Ness）の作品です。

アメリカのどこか遠いへき地の郊外に住む 18 歳のマイクとその友人たち 4 人を中心に描かれた物語。卒業プロムを 3 週間後に控え、4 人の友人たちは期末試験に向けて勉強しています。マイクはハンナとジャレッドに対する複雑で曖昧な感情と格闘しています。彼の母親は州知事選に出馬する予定で、ジャレッドの父親と対立しているのです。マイクの父親はアルコール依存症、メルは拒食症で、死にかけたこともあります。マイク自身も不安障害と強迫性障害を抱えています。

面白いのは、各章の最初に、マイクたちとは接点のない「インディー・キッズ」（indie kids）に起こった出来事のスケッチがあること。インディー・キッズというのは、普通ならこの手の物語の主人公になるような子どもたちです。セクシーで悲劇的な吸血鬼と恋に落ちたり、選ばれし者と言われたり、学校を爆破したり。でも、そのほかの残りの子どもたち（the rest of us）には、普通のことしか起こりません。インディー･キッズの 1 人が死体となって発見されたり、原因不明の青い光が灯ったり、ゾンビ警官や鹿が登場したりしますが、普通の子どもたちには何が起こっているのかも何のことかも、分かりません。マイクたちは、恋愛や試験の心配や、誰かが学校を爆発させたらどうしようという平凡な心配をしているのです。

そういえば、最近映画でも、『フリー・ガイ』[41] というのが公開されています。

何でもありのゲームの世界を舞台に、平凡なモブキャラが世界の危機を救うべく戦う姿を描いたアドベンチャーアクションです。オンライン参加型アクションゲーム「フリー･シティ」で、銀行の窓口係として強盗に襲われる毎日を繰り返していたガイは、謎の女性との出会いをきっかけに、退屈な日常に疑問を抱き始めます。そして、自分はビデオゲームの世界のモブキャラだと気付きます。モブキャラというのは、アニメーションやマンガの背景にいる主人公以外のその他大勢の群衆のこと。つまり、ガイは主役ではなかったわけです。

主役になれるのはほんの一握り。でも、SNS は、誰もが主役になれるという幻想を与えました。実際に、「ごく普通の」若者が世界的に有名になるといったことは、しょっちゅう起こっているように思えます――無名だったジャスティン・ビーバー（Justin Bieber）がたまたま YouTube の動画で見いだされたように。でも、やっぱり主役は一握りで、あとは「残りの人たち」。

40　日本では、東京創元社から『混沌の叫び』というシリーズ名で出版されている。
41　ショーン・レヴィ（Shawn Levy）監督, 2021 年公開.

主役になろうとすること自体を問いただす物語が、これから多く書かれるかもしれないというような予感もします。

おわりに

現在、どんなものが書かれているか、読まれているかを考えることで、YA文学の特質とは何かを考える一助になってほしいと、最初にも申し上げました。もちろん、児童文学・YA文学とは何かを定義することは簡単ではありません。

けれど、1つだけ間違いないのは、YA文学であれば、現代のティーンに向けて書かれたものであるということ。大人世代が読んでいるとしても、作者はティーンに向けて書くことを意識しているはずです。現代のティーンが抱えている問題に何らかの道筋を与えたり、考えるヒントを出したり、問題の存在を提示したりといった意識があると思うのです。もちろん、誰かのためではなく自分のために書いたのだという作家もいるでしょうが（特に大人の本では多々あることだと思いますが）、YAというジャンルを選んだ時点で、作者が、読者である若い人たちのことを全く意識しないというのはあり得ないのではないかと思います。

そう考えたとき、現代のティーンの問題を描いたYA文学が、大人の読者をひきつけているという現象は、考えるに値すると思います。児童文学研究者の猪熊葉子が、今こそ大人が児童文学を読むべきだと提案していましたが、それと重なることだと思います。YA文学・児童文学が持つ特質が何なのかを考えることは大事だと思いますが、今日の話がそのことを考えるきっかけになったらうれしいです。

ご清聴ありがとうございました。

児童書に関するレファレンスサービス

福田　由香

はじめに
Ⅰ　国際子ども図書館のレファレンスサービス
Ⅱ　国立国会図書館のデータベース紹介
　1　国立国会図書館オンライン
　2　国立国会図書館サーチ
　3　リサーチ・ナビ
Ⅲ　国際子ども図書館のレファレンス事例
おわりに

国際子ども図書館のレファレンスで使用する国立国会図書館のデータベースの概要や国際子ども図書館のレファレンス事例をご紹介します。ご紹介する事例は各図書館および18歳以上の方から申し込まれた児童書に関するレファレンスの回答事例です。

はじめに

国立国会図書館国際子ども図書館資料情報課情報サービス係の福田と申します。児童書研究資料室でのサービスを担当しています。

本日は、国際子ども図書館で行っている児童書に関するレファレンスサービスをご紹介します。まず、国際子ども図書館で受け付けているレファレンスサービスについてお話しします。国際子ども図書館では、18 歳未満の方からのレファレンスも受け付けていますが、ここでは、18 歳以上の方からのレファレンスをご紹介します。その中でも、特に「ストーリー・レファレンス」を中心にご説明します。次に、レファレンスの際に使用する国立国会図書館のデータベースをご紹介します。最後に、実際にあったレファレンスの事例をいくつかご紹介したいと思います。

Ⅰ　国際子ども図書館のレファレンスサービス

国際子ども図書館で受けるレファレンスの範囲はこちらのとおりです（表 1)。種別ごとに統計を採っています。

表１　国際子ども図書館で受けるレファレンスの範囲

1.　利用案内	国際子ども図書館の利用案内
2.　所蔵調査	当館での所蔵の有無の調査
3.　所蔵機関調査	他機関での所蔵の有無の調査
4.　書誌的事項調査	ある文献についての書（誌）名、著者名、出版地、出版者、出版年、巻号、収載ページなどの調査
5.　簡易な事実調査	参考資料を用いて行う簡易な事実調査
6.　検索の援助	資料の検索方法に係る援助
7.　資料の紹介	児童書に係る特定主題に関する資料の紹介
8.　他機関の紹介	適切な回答を得られる機関等の紹介

受けないレファレンスはこちらになります（表 2)。調査の手伝いを超える内容は受けることができません。例えば、2 番目の「良書の推薦」について、国際子ども図書館では、良い本かどうか評価することはしていません。このような質問があった場合は、本を薦めている本、つまりブックリストなどをご案内しています。また、10 番目の「著作権者調査」については、人物事典などのツールのご紹介はしますが、調査は利用者ご自身にお願いしています。

表２　国際子ども図書館で受けないレファレンス

1.　古書・古文書・美術品などの鑑定および市場価格の調査
2.　良書の推薦
3.　学習課題、卒業論文又は懸賞問題に関する調査
4.　人生案内、身上相談又は医療相談若しくは法律相談
5.　文献の解読、翻訳、注釈又は抜粋の作成
6.　プライバシーの侵害にあたる調査
7.　著しく経費又は時間を要する調査
8.　調査・研究の代行と認められる調査
9.　合理的な検索手段のない記事や写真などの調査
10.　複写サービス利用のための著作権者調査（没年、連絡先等）

国際子ども図書館の大人（18 歳以上）からのレファレンスは、児童書･児童文学関係、ストーリー・レファレンスといったものです。個人から直接依頼される場合と、図書館を通して文書で依頼される場合があります。

特に当館への依頼で特徴的なのは「ストーリー・レファレンス」です。「昔、子どもの頃に読んだこんな内容の本を探している」といったものです。

ここではストーリー・レファレンスを中心にお話しします。

・ストーリー・レファレンス

ストーリー・レファレンスの際は、インタビューを重視しています。こちらが国際子ども図書館での確認のポイントです。

・いつ、読みましたか？
・どこで、読みましたか？
・どんなモノを読みましたか？
・どんなお話ですか？
・誰が書いた作品ですか？
・どんな形・デザインの本でしたか？
・他に覚えていることはありますか？

インタビューの際にはインタビュー確認シートを使っています（表 3）。

まず 1 つ目、「いつ読みましたか？」については、年代を絞り込む手掛かりになります。何歳ぐらいに読んだか、自分で読んだか、誰かに読んでもらったかという情報は、乳幼児向けなのか、小学生向けなのかといった目安になります。

2 つ目は、「どこで読みましたか？」です。場所によっては、置いてある資料の傾向があると思われるので、図書館にあったか、幼稚園にあったかといった情報も参考になります。

3 つ目は、「どんなモノを読みましたか？」です。これは、「1 冊に 1 つのお話か？」「いくつか入っていたか？」「絵本の場合は、幼稚園などで毎月配られていた雑誌だったか？」というようなことも分かると手掛かりになります。

4 つ目は､「どんなお話ですか？」で､内容についての具体的なお尋ねです。登場人物やストーリーに関する情報のほか、舞台が日本か外国かといったことも絞り込みの参考になります。

5 つ目は、「誰が書いた作品ですか？」です。画風（絵のタッチ）などが分かると参考になることもあります。

6 つ目の「どんな形･デザインの本でしたか？」については、記憶違いのこともありますが、体裁に関する情報が絞りこみの手掛かりになることもあるので、確認したい点です。

最後に 7 つ目は、「他に覚えていることはありますか？」です。もし追加であれば教えていただきたい内容です。

このように、利用者から少しずつ細かいことを聞き出していきます。覚えている事柄によっては、なぜ覚えているのか、理由を聞くことがあります。理由によって、その情報の確実さが変わってくるためです。

こちらのインタビュー確認シートを使うことによって、どの職員でもポイントを押さえて質問することができるように心掛けています[1]。図書館の利用者の方に当館の文書レファレンス

1　インタビュー確認シートについては、『びぶろす』の記事も参照のこと。「【特集：レファレンスインタビュー】国際子ども図書館のレファレンスサービスとレファレンスインタビュー　―インタビュー確認シートの活用―」『びぶろす』75 号（平成 29 年 1 月）, pp.10-12. <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10266755>

表３　インタビュー確認シート項目一覧

＊いつ、読みましたか？
- 何年前ですか？
- 具体的に、西暦 or 昭和／平成でいうと、何年くらいですか？
- その時、何歳（何年生）でしたか？
- 自分で読みましたか？誰かに読んでもらいましたか？

＊どこで、読みましたか？
- 自宅にありましたか？
- 幼稚園 or 保育園？
- 小学校の図書室？中学校などの図書室？
- 地元の図書館？

＊どんなモノを読みましたか？
- 絵本ですか？読み物（物語）ですか？
- タイトルやシリーズなど、覚えている言葉はありますか？
- 1 冊に 1 つのお話でしたか？いくつか入っていましたか？
-【絵本の場合】幼稚園などから毎月配られていた雑誌（キンダーブック等）でしたか？

＊どんなお話ですか？
- 主人公や登場人物は人間でしたか？動物でしたか？
- 登場人物の名前など、覚えていることはありますか？日本人っぽいとか、外国人っぽいとか。
- 舞台は日本でしたか？外国でしたか？
- ストーリーで覚えていることがあれば、途切れ途切れでも構いません、教えてください。
- お話は最後はどうなりましたか？

＊誰が書いた作品ですか？
- 著者や画家の名前を覚えていますか？
【覚えている場合】どうしてはっきりと覚えているのですか？
- 文体や画風（絵のタッチなど）で覚えていることはありませんか？
- 今までに似ている本・絵を見たことがありますか？

＊どんな形・デザインの本でしたか？
- 本の大きさ、厚さ、表紙の色やデザイン、本の硬さなどで、覚えていることはありませんか？
- 本のサイズは縦長でしたか？横長でしたか？
- 文字は縦書 or 横書、どちらでしたか？
- 絵は全部カラーでしたか？
- 文字は多かったですか？段組みされていましたか？
- 絵はどのくらいの分量がありましたか？挿絵や口絵程度でしたか？
-【シリーズ、全集の確認】同じようなデザインの本を他に見た覚えがありますか？

＊他に覚えていることはありますか？
- 特に印象に残っている場面があったら是非教えてください。
- 出版者を覚えていますか？
【覚えている場合】どうしてはっきりと覚えているのですか？

をご案内いただく際は、これらのポイントを押さえてお申し込みいただけると調査の参考になります。

Ⅱ　国立国会図書館のデータベース紹介

次に、子どもの本を探すという観点を中心に、国立国会図書館のデータベースをご紹介します。ここでは、レファレンスの際に用いるものとして、3 つご紹介します。

1　国立国会図書館オンライン

はじめは「国立国会図書館検索・申込オンラインサービス」[2] です。「国立国会図書館オンライン」という略称を使っています。

国立国会図書館オンラインでは、国立国会図書館で利用できる資料の検索ができます。デジタル化された資料や電子ジャーナルも対象です。一部の資料について、雑誌記事、目次データベース（当館が作成したもの）、あらすじ情報も検索できます。

ここではご紹介を省略していますが、「国立国会図書館デジタルコレクション」[3] のデータも国立国会図書館オンラインから検索することができます。

あらすじ情報については、児童書および児童書関連資料のうち、あらすじ情報を入手できたものに付与されています。日本図書館協会および日本児童図書出版協会からデータ提供を受けて、投入されたものになります。全ての児童書に付与されているわけではないので、ご注意ください。

利用者登録していただくと、国立国会図書館所蔵資料に関するサービスについて、ログインしてお申し込みいただけます。

2　<https://ndlonline.ndl.go.jp/>
3　<https://dl.ndl.go.jp/>

・詳細検索画面

図１　国立国会図書館オンラインの詳細検索画面

こちらは、国立国会図書館オンラインの詳細検索画面です（図 1）。

ここでは児童書を検索する際に使う項目について主にご紹介します。

青い検索ボタンの左横がキーワード欄です。キーワード検索では、一部の児童書のあらすじを検索可能です。あらすじは、書誌詳細画面の「要約・抄録」欄に表示されます。

児童書を探したいときは、まずは所蔵場所を国際子ども図書館に設定すると、およそ児童書に絞ることができます。当館では、おおむね 18 歳以下の方が主な利用者として想定される資料を児童書として収集しています。絵本、児童文学、ノンフィクションなどの児童書のほか、教科書・教師用指導書、学習参考書、一部のヤングアダルト資料、紙芝居などがあります。ヤングアダルト資料など、厳密に児童書の境界線が引けない資料があり、そのような資料は東京本館の所蔵の可能性があります。国際子ども図書館で見つからなかった場合は、所蔵場所を全館に広げて検索してください。

申込みを行いたいときは、右上のログインボタンからログインを行ってください。

・検索結果一覧画面

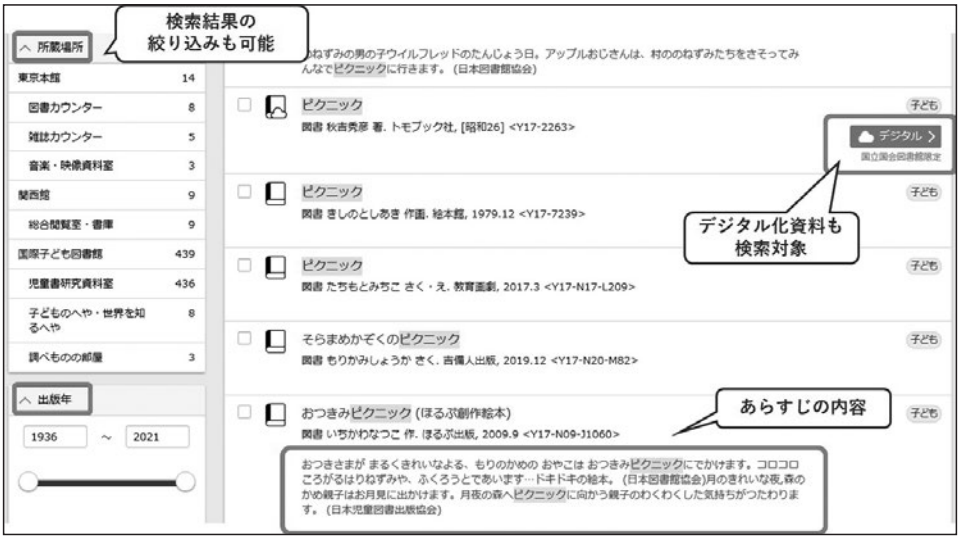


図２　国立国会図書館オンラインの検索結果一覧画面

こちらは、国立国会図書館オンラインの検索結果一覧画面です（図 2）。

画面はキーワードを「ピクニック」として検索した例です。

検索結果一覧には、児童書のあらすじ情報の内容が一部表示されており、どのような話か一端を知ることができるものもあります。

また、デジタル化資料も検索対象となっており、「デジタル」のボタンから「国立国会図書館デジタルコレクション」のデータベースに遷移することができます。

左側の項目からは、検索結果の絞り込みも可能です。こちらの画面にあります、出版年や所蔵場所のほか、図書などの資料種別や、DVD などの資料形態といった項目もあります。

中央に並んでいるタイトルをクリックしますと、書誌詳細画面が開きます。

・書誌詳細画面

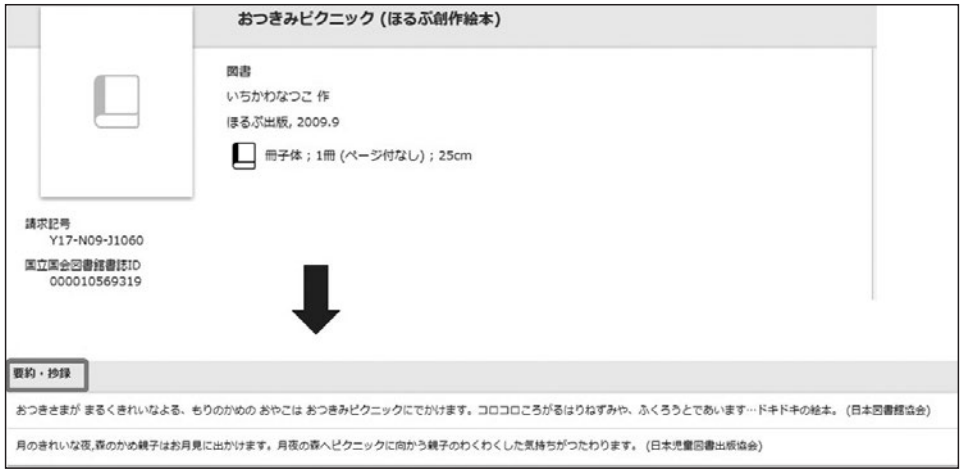


図３　国立国会図書館オンラインの書誌詳細画面

こちらは、『おつきみピクニック』（いちかわなつこ 作, ほるぷ出版, 2009.9）という資料の書誌詳細画面の一部分です（図 3）。画面をスクロールした下の方に、要約･抄録の項目があり、ここにあらすじが表示されています。

2　国立国会図書館サーチ

次に、「国立国会図書館サーチ」[4]、通称「NDL サーチ」です。

国立国会図書館サーチは、国内の各機関が持つ豊富な「知」を活用するためのアクセスポイントとなることを目指し、開発されたデータベースです。国立国会図書館の資料のほかに、全国の公共図書館（都道府県立図書館、政令指定都市の市立図書館のみ）、公文書館、美術館や学術研究機関などが提供する資料やデータベース、デジタルコンテンツなどをまとめて検索可能です。

国立国会図書館のオンライン情報も含めた所蔵資料・情報や目次情報を検索するなら国立国会図書館オンライン、他の類縁機関の所蔵も含めて検索するなら国立国会図書館サーチをという使い分けができます。

4　<https://iss.ndl.go.jp/>

・トップページ

図４　国立国会図書館サーチのトップページ

こちらは､国立国会図書館サーチのトップページです（図 4)。キーワード欄に「フラミンゴ」と入れた例です。簡易検索画面のキーワード欄では、児童書のあらすじも含めて検索することができます。

「児童書」のボタンを押すと、国際子ども図書館と、児童書を専門に所蔵する 7 つの機関[5]が所蔵する児童書と児童書関連資料に絞って検索ができます。

また､「レファレンス情報」のボタンを押すと､「レファレンス協同データベース」[6]のレファレンス事例などが検索対象になります。

5　大阪府立中央図書館国際児童文学館、神奈川近代文学館、三康文化研究所附属三康図書館、白百合女子大学図書館、東京都立多摩図書館、日本近代文学館、梅花女子大学図書館（五十音順）

6　<https://crd.ndl.go.jp/reference/>

・書誌詳細画面

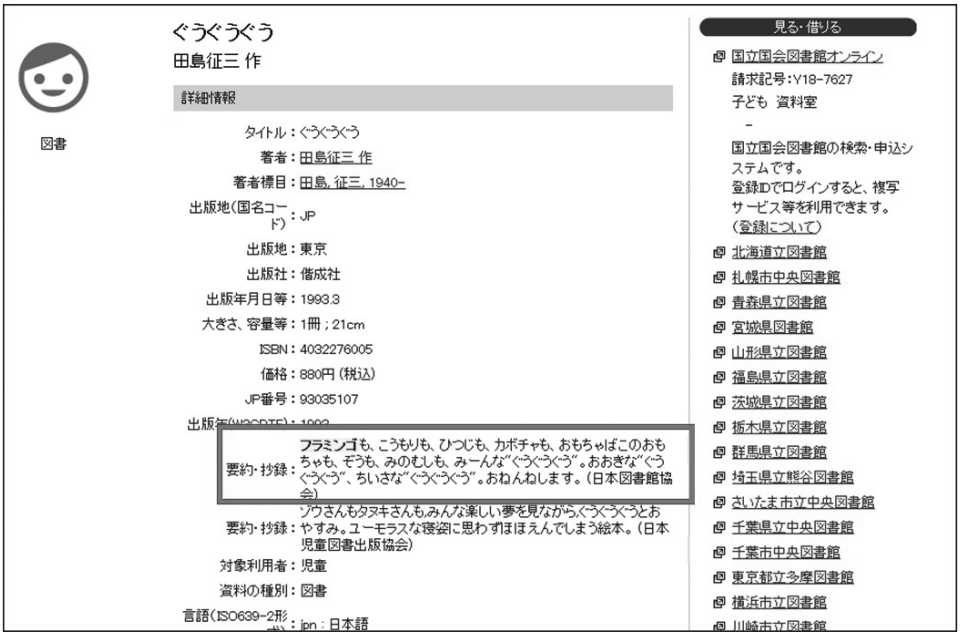


図５　国立国会図書館サーチの書誌詳細画面

こちらは、キーワード欄に「フラミンゴ」と入れて検索してヒットした資料のうち、『ぐうぐうぐう』というタイトルの資料の書誌詳細画面です（図 5）。下の方に「要約・抄録」という項目があり、あらすじに「フラミンゴ」が含まれています。ヒットした箇所が黄色でハイライトされます。

また、画面の右側に、この資料を所蔵する図書館が列挙されています。各館における所蔵の詳細や利用方法などについては､各館のウェブサイトへのリンクから確認することができます。

3　リサーチ・ナビ

次に「リサーチ・ナビ」[7] についてご紹介します。

リサーチ・ナビは、「調べ方」を調べるためのサイトです。国立国会図書館職員が、調べものに有用であると判断した図書館資料、ウェブサイト、各種データベース、関係機関情報を、特定のテーマ、資料群別に紹介しています。

7　<https://rnavi.ndl.go.jp/>

・トップページ

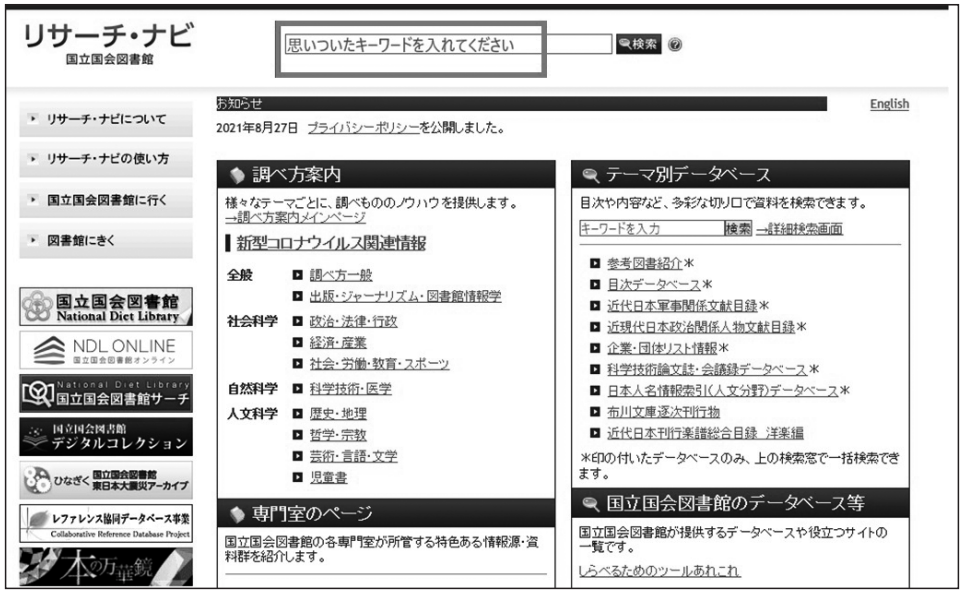


図６　リサーチ・ナビのトップページ

こちらがリサーチ・ナビのトップページです（図 6）。一番上にある検索窓から「調べ方」を検索できます。また、下のメニューからリンクをたどって情報を得ることもできます。

キーワード検索以外に、国際子ども図書館の調べ方案内の目次からたどることもできます。トップページ一番下の「専門室のページ」の中の「国際子ども図書館」から入ってください。「児童書をさがす」というページに遷移します。この中に、「調べ方案内（調べるヒント）」という項目があります。

児童書の調べ方案内は、8 つの項目に分かれており、その下にさらに細かくテーマが分かれています。絵本・児童書の探し方、調べ方、作家・画家の調べ方、外国語の絵本・児童書の探し方、教科書や教師用指導書の所蔵の調べ方などがあります。

調べ方案内の中には、例えば「子どもの本のブックリスト」といった記事もあります[8]。ヤングアダルト関係では、『今すぐ読みたい！　10 代のためのYA ブックガイド 150 ！』（金原瑞人, ひこ・田中 監修, ポプラ社, 2015）などが紹介されています。タイトルをクリックすると、国立国会図書館オンラインの書誌詳細画面に遷移します。

Ⅲ　国際子ども図書館のレファレンス事例

ここからは、実際のストーリー・レファレンスの事例をご紹介します。

お探しの資料が見つからないことも多いですが、その場合も、調査過程を詳細に説明するようにしています。

今回は、比較的最近の事例から、運よく見つかったものについて、2 つご紹介します。

・事例１　国立国会図書館オンラインでの検索

まずは、基本的な方法で見つかった例です。レファレンス協同データベースにも登録されて

8　「子どもの本のブックリスト（児童書全般）」<https://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/1.php>

おり、URLや管理番号からご確認いただけます[9]。

照会内容は以下のとおりです（表4）。

表４　事例１の照会内容

いつ	1960年代、1964年前後。母の読み聞かせ。
どんな形状	大型ではない。A4くらい？　縦長。硬い紙の表紙。厚さは分厚くない。絵はカラー。
内容	・「黒い帽子に赤い服、バッキンガムの衛兵さん」の一文。オランダの風車、チューリップの絵。 ・「黒い帽子に～」の一文には、衛兵の絵が載っていた。 ・タイトルは「世界の絵本」かもしれない。 ・絵がメインで、はっきりした印象。1ページで1つの国の紹介。5～10か国程度の風景が紹介されていた。

調査方法は以下のとおりです。まず、1960年代に子どもの頃に読んでもらったという情報から、その頃には出版されていた資料ということで、1940年～1969年に出版された児童書と設定しました。次に、タイトルが「世界の絵本」かもしれないということで、キーワードを「せかい」「えほん」と設定しました。子ども向けの本であることと、読みでの検索も行いたいことから、漢字ではなくひらがなで検索しました。検索でヒットした書誌のうち、タイトルから内容に関連しそうなものを優先して確認しました。

回答としては、『せかいのたび1』（アルプスえほん; 野村昌 等絵, ます美書房, 1962）をご紹介しました。シリーズ名が「アルプスえほん」ということで、「えほん」というキーワードが含まれていました。

こちらはデジタル化済の資料でした。国立国会図書館デジタルコレクションの資料の公開範囲は、インターネット公開資料、図書館送信資料、国立国会図書館限定資料の3種類があります。今回の資料は、国立国会図書館限定公開の資料のため、館外からは内容までは確認できない資料でした。

国立国会図書館オンラインの検索結果からデジタルコレクションへのリンクを開いて、内容を確認したところ、表紙に黒い帽子の衛兵さんの絵が描かれていました。1枚めくった1･2ページ目、イギリスのページには、ひらがなで「ばっきんがむの／おしろを　まもる／おもちゃのような／えいへいさん／くろい　ぼうしに／あかい　ふく／えいへいさんは／すてきだな」（スラッシュは原著の改行を示す）の文がありまして、中央には黒い帽子に赤い服の衛兵さんの絵が描かれていました。また、オランダは5・6ページ目にありまして、風車やチューリップの絵が描かれていました。このように、照会事項とかなり一致しているということで、この資料を紹介しました。

この事例の特徴としては、調査方法、キーワード設定はとても標準的なもので回答を得ることができました。手掛かりとなる情報が多く、正確だった点も助けとなりました。一般的なキー

9　「レファレンス協同データベース事例詳細（管理番号：Y2020Q0320）」<https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000296847>

ワードでは、検索で引っかかりすぎるなど、現物がないと逆に絞り込むことが難しい面もあります。今回は比較的古い資料でしたが、国立国会図書館のデジタル化資料に含まれており、内容を見て確認することができました。このように、デジタル化資料を含む国立国会図書館の所蔵資料をデータベースで検索することによって、お探しの資料が見つかることがあります。

・事例２　キーワードの見直し

次は、キーワードを見直して見つかった例です[10]。ポイントとしては、タイトルからでは見つけられない例でした。

照会内容は以下のとおりです（表5）。

表５　事例２の照会内容

いつ	20年ほど前
どこで	県立図書館
どんな形状	白っぽい表紙
内容	・　羊が主人公で「むくむく」「もくもく」のような名前。 ・　名前がタイトルにも入っていたように思う。 ・　クリーニング屋なのに、病気の動物たちが次々にやってくる。 ・　看板をサルがいたずらして「クリニック」に書きかえていたためで、ラストのページで、サルが舌を出している。

回答としては、一部合致するものとして「バルバルさん」（『こどものとも　年中向き』（通号202）2003.01に掲載）をご紹介しました。

照会事項との合致点は以下のとおりです。

・縦型で、白っぽい表紙
・羊が登場する
・繰り返しの名前がタイトルとなっている
・店の前の立て看板がいたずらで書き換えられ、動物が次々とやってくる
・本文最後のページにサルが描かれている

照会事項との相違点は以下のとおりです。

・主人公は羊ではなく人であり、名前は「バルバル」
・店はクリーニング屋ではなく、とこや
・やってくる動物たちは病気ではなく、それぞれがとこやで解決したいことがある
・看板は「とこやバルバル」に「どうぶつの」が書き加えられ、「どうぶつの　とこやバルバル」となっている

図書資料の国立国会図書館オンライン上のあらすじでは、以下のとおり紹介されていました。あらすじに羊やサルは出てきませんでした。

10 「レファレンス協同データベース事例詳細（管理番号：8250913）」<https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000288906>

まちのはずれに ちいさなみせが あります。バルバルさんの とこやです。まいにち たのしく はたらく バルバルさん。あるひ みせに ライオンがきました…。（日本図書館協会）

バルバルさんは床屋さん。今日はなぜだか動物のお客ばかり。ライオンが髪を切りにきたり , ワニがカツラをほしいといったり…。（日本児童図書出版協会）[11]

この資料で正しかったかは質問者に確認できていませんが、もし正しかった場合、かなり記憶が置き換わっている可能性があることが分かります。

事例の特徴として、「クリーニング」「洗濯」というキーワードでは見つからず、「むくむく」などの名前からも見つけられない資料でした。「クリーニング」「洗濯」では見つからず、「クリーニング」や「病院」といったキーワードは、記憶に誤りがあるのかもしれないと考えてキーワードを見直しました。さらに一般的なキーワード「絵本　動物　看板」で調べ直すことによって、出版社のページにたどりつき、表紙の情報などから当館資料を確認し、回答を得ることができました。こちらの表紙ですが、白っぽい縦長の表紙で、中央に白衣を着てハサミとくしを持った髪の長いバルバルさんが描かれていました。この資料で正しかった場合、白衣のイメージが病院やクリーニングにつながり、記憶間違いの原因となっていたのかもしれません。

また、あらすじでは、先ほどご紹介しましたとおり、（サルなどは出てきておらず）物語のラストに触れられていないものも多いことに留意が必要です。

おわりに

あらためて、簡単なまとめです。

「ストーリー・レファレンス」のお尋ねの際は、インタビューシートの内容のように詳しく聞き取っていただけると、調査の際の手掛かりになります。

児童書の検索の際は、目的に応じて、当館データベースをぜひご活用ください。

国立国会図書館の所蔵資料を検索する際は、国立国会図書館オンライン、他機関資料なども含めて広く検索する際は国立国会図書館サーチ、調べ方を調べる際はリサーチ・ナビのデータベースがおすすめです。

今日ご紹介したストーリー・レファレンスやその他のレファレンス事例（他機関含む）は、レファレンス協同データベースでもご覧いただけます。こちらもご活用いただければ幸いです。

以上で国際子ども図書館のレファレンスサービスについてのご紹介を終わります。ご清聴ありがとうございました。

11　国立国会図書館オンライン「バルバルさん（こどものとも絵本）」<https://id.ndl.go.jp/bib/000009298019>

“ほんとう”の世界へ

～文学の魅力と、人生に役立つ読書法～

苫野　一徳

1　文学と私

●小 1 の頃～「なぜ生きているんだろう」「なぜ生まれてきてしまったんだろう」
●流行のゲームやマンガに興味がない
●手塚治虫が神
●『少年少女世界名作文学全集』（小学館）との出会い
●孤独のスパイラル（どんどん意固地に）
●便所飯のパイオニア
●過敏性腸症候群と躁鬱病
●新たな神、シェイクスピアとゲーテ
●小説家を目指す
●人類愛
●哲学者・竹田青嗣との出会いと、世界の壊れ、そして哲学による再生

2　若者に伝えたい、文学の魅力と本質

●文学は、私たちに世界や人間の“ほんとう”（ありうべき、あるいはあれかしと願う“ほんとう”の世界）を知らしめる
●特に（なんらかの満たされなさを抱えた）若い頃、私たちは、そのような「ほんとうの世界」にえも言われぬ力で引き寄せられることがある
●そのような体験は、私たちに、私たちが「ただ生きる」のではなく、何か“ほんとう”を求め、それに「憧れつつ生きる」ことができることを教えてくれる

3　若者に伝えたい、読書の意義と方法

●読書は私たちを Google マップにする
●レントゲン写真
●クモの巣電流流しができるようになる
●構造的思考が身につく
●言葉をためることで、多様で異質な人たちとの間に共通了解を見出し合うことができるようになる
●「1 オンスの経験は 1 トンの理論に勝る」（ジョン・デューイ）が、「読書もまた豊かな経験である」
（cf. 一般化のワナ）
●基本は「投網漁法から一本釣り漁法へ」
● 1 冊まるまるレジュメを作る
●信念補強型の読書ではなく、信念検証型の読書を
●市民としての読書

紹介資料リスト

1	『「自由」はいかに可能か　社会構想のための哲学』（NHKブックス）NHK出版, 2014 苫野一徳 著 NDL請求記号：A16-L30
2	『子どもの頃から哲学者　世界一おもしろい、哲学を使った「絶望からの脱出」！』大和書房, 2016 苫野一徳 著 NDL請求記号：HC1-L30（ILCL所蔵なし）
3	『はじめての哲学的思考』（ちくまプリマー新書）筑摩書房, 2017 苫野一徳 著 NDL請求記号：Y5-N17-L384
4	『自由の相互承認 ── 人間社会を「希望」に紡ぐ ──（上）現状変革の哲学原理』（iCardbook）詩想舎, 2017 苫野一徳［著］ ※NDL所蔵なし
5	『自由の相互承認 ── 人間社会を「希望」に紡ぐ ──（下）未来構築の実践理論』（iCardbook）詩想舎, 2017 苫野一徳［著］ ※NDL所蔵なし
6	『愛』（講談社現代新書）講談社, 2019 苫野一徳 著 NDL請求記号：H91-M11（ILCL所蔵なし）
7	『社会契約論　苫野一徳特別授業　読書の学校』 （教養・文化シリーズ. 別冊NHK100分de名著）NHK出版, 2020 苫野一徳 著 NDL請求記号：Y1-N21-M60
8	『どのような教育が「よい」教育か』（講談社選書メチエ）講談社, 2011 苫野一徳 著 NDL請求記号：FA1-J110（ILCL所蔵なし）
9	『教育の力』（講談社現代新書）講談社, 2014 苫野一徳 著 NDL請求記号：FA25-L74（ILCL所蔵なし）
10	『勉強するのは何のため？　僕らの「答え」のつくり方』日本評論社, 2013 苫野一徳 著 NDL請求記号：Y5-N13-L332
11	『ほんとうの道徳』トランスビュー, 2019 苫野一徳 著 ※NDL所蔵なし
12	『「学校」をつくり直す』（河出新書）河出書房新社, 2019 苫野一徳 著 NDL請求記号：FB14-M3（ILCL所蔵なし）
13	『未来のきみを変える読書術　なぜ本を読むのか？』（ちくまQブックス）筑摩書房, 2021 苫野一徳 著 NDL請求記号：Y5-N21-M514
14	『少年少女世界名作文学全集』（小学館）

15	『芸術作品の根源』平凡社, 2002 マルティン・ハイデッガー 著（関口浩 訳） NDL請求記号：HD86-G44（ILCL所蔵なし）
16	『ニーチェ全集 12』（権力への意志. 上）（ちくま学芸文庫）筑摩書房, 1993 吉沢伝三郎 編 NDL請求記号：HD74-E21（ILCL所蔵なし）
17	『ニーチェ全集 13』（権力への意志. 下）（ちくま学芸文庫）筑摩書房, 1993 吉沢伝三郎 編 NDL請求記号：HD74-E21（ILCL所蔵なし）
18	『美学講義 上巻』作品社, 1995 G.W.F.ヘーゲル［著］（長谷川宏 訳） NDL請求記号：HD58-E53（ILCL所蔵なし）
19	『美学講義 中巻』作品社, 1996 G.W.F.ヘーゲル［著］（長谷川宏 訳） NDL請求記号：HD58-E53（ILCL所蔵なし）
20	『美学講義 下巻』作品社, 1996 G.W.F.ヘーゲル［著］（長谷川宏 訳） NDL請求記号：HD58-E53（ILCL所蔵なし）
21	『若きウェルテルの悩み 改版』（岩波文庫）岩波書店, 1978 ゲーテ 作（竹山道雄 訳） NDL請求記号：KS397-23（ILCL所蔵なし）
22	『言語的思考へ　脱構築と現象学』径書房, 2001 竹田青嗣 著 NDL請求記号：KE13-G25（ILCL所蔵なし）
23	『言語にとって美とはなにか　定本 1』（角川文庫. 角川ソフィア文庫）角川書店, 2001 吉本隆明［著］ NDL請求記号：KE13-G24（ILCL所蔵なし）
24	『罪と罰 1』（光文社古典新訳文庫）光文社, 2008 ドストエフスキー 著（亀山郁夫 訳） NDL請求記号：KP224-J8（ILCL所蔵なし）
25	『罪と罰 2』（光文社古典新訳文庫）光文社, 2009 ドストエフスキー 著（亀山郁夫 訳） NDL請求記号：KP224-J13（ILCL所蔵なし）
26	『罪と罰 3』（光文社古典新訳文庫）光文社, 2009 ドストエフスキー 著（亀山郁夫 訳） NDL請求記号：KP224-J15（ILCL所蔵なし）
27	『マチネの終わりに』毎日新聞出版, 2016 平野啓一郎 著 NDL請求記号：KH837-L850（ILCL所蔵なし）
28	『エマソン論文集 上』（岩波文庫）岩波書店, 1972 （酒本雅之 訳） NDL請求記号：HD185-1（ILCL所蔵なし）
29	『エマソン論文集 下』（岩波文庫）岩波書店, 1973 （酒本雅之 訳） NDL請求記号：HD185-1（ILCL所蔵なし）

現代社会を生きぬく
～ヤングアダルト文学は何をどう映し出す？～

白井　澄子

ヤングアダルト文学が定着するようになってすでに半世紀が過ぎましたが、ヤングアダルト文学は常に今を生きる若者が直面する問題を取り上げ、若者が悩み、あるいは勇気を発揮する場面を描いてきました。初期のヤングアダルト文学では大人になることへの不安や、大人批判などをテーマに、若者個人に注目することが多かったのですが、近年ではヤングアダルト文学が扱うテーマにも広がりや社会性が出てきました。

「今」や「問題」は時代によって変わるわけですが、ヤングアダルト文学は今の若者がどのような問題に直面し、悩み、乗り越える状況を描いているのでしょうか。講義では「差別と戦う」「毒になる親」「ヤングケアラー」という 3 つの問題を取り上げて、問題を取り巻く状況や、登場人物の言動や心の動き、作品が若者に伝えようとしてきたこと、などに注目しながら考えていきたいと思います。取り上げる作品は英語圏の作品が中心となります。

1　差別と戦う

現代社会で若者が直面するさまざまな差別の中から「人種差別」「病気や障害への差別」「性的マイノリティへの差別」の 3 点を取り上げます。

(1) 人種差別

『父さんの犬サウンダー』（1998）W.H. アームストロング（原作 1969）
『とどろく雷よ、私の叫びをきけ』（1981）ミルドレッド・テイラー（原作 1976）
『ザ・ヘイト・ユー・ギヴ』（2018）アンジー・トーマス（原作 2017）
New Kid（2019）Jerry Craft 未訳
『アメリカン・ボーン・チャイニーズ』（2020）ジーン・ルエン・ヤン（原作 2006）

(2) 病気や障害への差別

『ワンダー』（2015）R.J. パラシオ（原作 2012）
『リバウンド』（2007）エリック・ウォルターズ（原作 2000）

(3) 性的マイノリティへの差別

『変化球男子』（2018）M.G. ヘネシー（原作 2016）
『九時の月』（2017）デボラ・エリス（原作 2014）

2　毒になる親

最近、「毒親」という言葉を耳にしますが、親からの暴力、働かない親、酒に溺れる親、ネグレクトなどに苦しむ子どもや若者は少なくありません。

『チューリップ・タッチ』（2004）アン・ファイン（原作 1996）
『シークレッツ』（2005）ジャクリーン・ウィルソン（原作 2002）

『わたしはイザベル』（2016）エイミー・ウィッティング（原作 1989）
The Tale of One Bad Rat（2008）Bryan Talbot 未訳
『私は売られてきた』（2010）パトリシア・マコーミック（原作 2006）

3　ヤングケアラー

ヤングケアラーというのは、家庭で病気の親の世話をするなど、普通の手伝い以上の働きをしている子どもや若者のことです。日本でも、最近になってようやく彼らが抱える不安、ストレス、貧困、不登校などの問題に目が向けられ始めました。

『ゆりの花咲く谷間』（1973）ベラ＆ビル・クリーバー（原作 1969）
『Xをさがして』（2001）デボラ・エリス（原作 1999）
『ひとりぼっちのスーパーヒーロー』（2006）マーティン・リーヴィット（原作 2004）
『怪物はささやく』（2011）パトリック・ネス（原作 2011）
『レモネードを作ろう』（1999）ヴァージニア・ユウワー・ウルフ（原作 1993）
『with you』（2020）濱野京子
Tender: How Much Would You Care?（2018）Eve Ainsworth 未訳
Can I Tell You About Being a Young Carer?（2018）Jo Aldridge 未訳

紹介資料リスト

差別と戦う

1	『父さんの犬サウンダー』（岩波少年文庫）岩波書店, 1998 W.H. アームストロング 作（曽田和子 訳） NDL請求記号：Y7-M98-61
2	『とどろく雷よ、私の叫びをきけ』（児童図書館・文学の部屋）評論社, 1981 ミルドレッド・D. テーラー［著］（小野和子 訳） NDL請求記号：Y7-9315
3	『ザ・ヘイト・ユー・ギヴ　あなたがくれた憎しみ』（海外文学コレクション）岩崎書店, 2018 アンジー・トーマス 作（服部理佳 訳） NDL請求記号：Y9-N18-L55
4	*New kid*, Harper, an imprint of HarperCollinsPublishers, 2019 Jerry Craft ; with color by Jim Callahan ※NDL所蔵なし
5	『アメリカン・ボーン・チャイニーズ　アメリカ生まれの中国人』花伝社, 2020 ジーン・ルエン・ヤン 作（椎名ゆかり 訳） NDL請求記号：Y84-M15858
6	『ワンダー』ほるぷ出版, 2015 R・J・パラシオ 作（中井はるの 訳） NDL請求記号：Y9-N15-L159
7	『リバウンド』福音館書店, 2007 エリック・ウォルターズ 作（小梨直 訳, 深川直美 画） NDL請求記号：Y9-N07-H478
8	『変化球男子』（鈴木出版の児童文学　この地球を生きる子どもたち）鈴木出版, 2018 M・G・ヘネシー 作（杉田七重 訳） NDL請求記号：Y9-N18-L191
9	『九時の月』さ・え・ら書房, 2017 デボラ・エリス 作（もりうちすみこ 訳） NDL請求記号：Y9-N17-L122

毒になる親

10	『チューリップ・タッチ』評論社, 2004 アン・ファイン 作（灰島かり 訳） NDL請求記号：Y9-N04-H400
11	『シークレッツ』偕成社, 2005 ジャクリーン・ウィルソン 作, ニック・シャラット 絵（小竹由美子 訳） NDL請求記号：Y9-N05-H318
12	『わたしはイザベル』（STAMP BOOKS）岩波書店, 2016 エイミー・ウィッティング 作（井上里 訳） NDL請求記号：Y9-N16-L273
13	*The tale of one bad rat*, Jonathan Cape, 2008 Bryan Talbot ※NDL所蔵なし
14	『私は売られてきた』作品社, 2010 パトリシア・マコーミック 著（代田亜香子 訳） NDL請求記号：Y9-N10-J211

ヤングケアラー

15	『ゆりの花咲く谷間』富山房, 1973 ベラ・クリーバー 等著（井上みどり 訳） NDL請求記号：Y7-3862
16	『Xをさがして』さ・え・ら書房, 2001 デボラ・エリス 原作（もりうちすみこ 訳, 吉川聡子 絵） NDL請求記号：Y9-N01-169
17	『ひとりぼっちのスーパーヒーロー』（鈴木出版の海外児童文学　この地球を生きる子どもたち）鈴木出版, 2006 マーティン・リーヴィット 作（神戸万知 訳） NDL請求記号：Y9-N06-H205
18	『怪物はささやく』あすなろ書房, 2011 パトリック・ネス 著, シヴォーン・ダウド 原案（池田真紀子 訳） NDL請求記号：Y9-N12-J2
19	『レモネードを作ろう』徳間書店, 1999 ヴァージニア・ユウワー・ウルフ 作（こだまともこ 訳） NDL請求記号：Y9-M99-118
20	『with you』（くもんの児童文学）くもん出版, 2020 濱野京子 作, 中田いくみ 装画・挿画 NDL請求記号：Y8-N21-M58
21	*Tender*, Scholastic Ltd, 2018 Eve Ainsworth ※NDL所蔵なし
22	*Can I tell you about being a young carer? : a guide for friends, family and professionals*, Jessica Kingsley Publishers, 2018 Jo Aldridge ※NDL所蔵なし

（ヤングケアラー参考図書）

23	『ヤングケアラー　介護を担う子ども・若者の現実』（中公新書）中央公論新社, 2018 澁谷智子 著 NDL請求記号：EF81-L187
24	『ヤングケアラーわたしの語り　子どもや若者が経験した家族のケア・介護』生活書院, 2020 澁谷智子 編 NDL請求記号：EF81-M60（ILCL所蔵なし）
25	『ボーダレス・ケアラー　生きてても、生きてなくてもお世話します』理論社, 2021 山本悦子 著, 竹浪音羽 画 NDL請求記号：Y8-N21-M470
26	『子ども介護者　ヤングケアラーの現実と社会の壁』（角川新書）KADOKAWA, 2021 濱島淑惠［著］ NDL請求記号：EF81-M100（ILCL所蔵なし）

ヤングアダルト文学の後先

ひこ・田中

1　ヤングアダルトって？

大人と子どもの狭間に立って。
ヤングアダルトから見た風景。
一体どうしろと？
映画『理由なき反抗』

2　ヤングアダルト文学　始まりの物語たち

ヤングアダルトの視点、または本人の語りで描かれる。
『アウトサイダーズ』
私とは誰か。
『影との戦い』（ゲド戦記）
『アーノルドのはげしい夏』

3　時代の変化

ヤングアダルト文学がない時代から、ある時代へ。
変わることと、変わらないこと。ロバート・ウェストール作品を例に。
『〝機関銃要塞〟の少年たち』
『かかし』
『海辺の王国』

4　ヤングアダルトへ物語を供給する様々なメディア

文学。マンガ。アニメ。ゲーム。
『機動戦士ガンダム』
『新世紀エヴァンゲリオン』
ヤングアダルト文学を書くということ。読むということ。例えば私の場合。

5　ヤングアダルト文学の現在

広がる世界。
『ドレスを着た男子』
『サイモンvs人類平等化計画』
『嘘の木』
『ミスターオレンジ』
『伝説のエンドーくん』
『拝啓パンクスノットデッドさま』

6　ヤングアダルト文学の未来

必要とされる時代。

紹介資料リスト

1	『影との戦い』（ゲド戦記　ソフトカバー版）岩波書店, 2006 ル＝グウィン［著］（清水真砂子 訳） NDL請求記号：Y9-N06-H216
2	『アーノルドのはげしい夏』（岩波の少年少女の本）岩波書店, 1972 J.R.タウンゼンド 作, グラハム・ハンフリーズ 画（神宮輝夫 訳） NDL請求記号：Y7-3462
3	『チョコレート・ウォー』（扶桑社ミステリー）扶桑社, 1994 ロバート・コーミア 著（北沢和彦 訳） NDL請求記号：KS153-E705（ILCL所蔵なし）
4	『“機関銃要塞”の少年たち』（児童図書館. 文学の部屋）評論社, 1980 ロバート・ウェストール 作（越智道雄 訳） NDL請求記号：Y7-8557
5	『アウトサイダーズ』あすなろ書房, 2000 S.E.ヒントン 著（唐沢則幸 訳） NDL請求記号：KS158-G423

戦争

6	『キオスク』（はじめて出逢う世界のおはなし）東宣出版, 2017 ローベルト・ゼーターラー 著（酒寄進一 訳） NDL請求記号：KS421-L40（ILCL所蔵なし）
7	『キジムナーkids』現代書館, 2017 上原正三 著 NDL請求記号：KH947-L1043
8	『ヒロシマ消えたかぞく』（ポプラ社の絵本）ポプラ社, 2019 指田和 著, 鈴木六郎 写真 NDL請求記号：Y2-N19-M258
9	『ベルリン 1919　赤い水兵 上』（岩波少年文庫）岩波書店, 2020 クラウス・コルドン 作（酒寄進一 訳） NDL請求記号：Y7-N20-M53
10	『ベルリン 1919　赤い水兵 下』（岩波少年文庫）岩波書店, 2020 クラウス・コルドン 作（酒寄進一 訳） NDL請求記号：Y7-N20-M54
11	『ベルリン 1933　壁を背にして 上』（岩波少年文庫）岩波書店, 2020 クラウス・コルドン 作（酒寄進一 訳） NDL請求記号：Y7-N20-M135
12	『ベルリン 1933　壁を背にして 下』（岩波少年文庫）岩波書店, 2020 クラウス・コルドン 作（酒寄進一 訳） NDL請求記号：Y7-N20-M136
13	『ベルリン 1945　はじめての春 上』（岩波少年文庫）岩波書店, 2020 クラウス・コルドン 作（酒寄進一 訳） NDL請求記号：Y7-N20-M165
14	『ベルリン 1945　はじめての春 下』（岩波少年文庫）岩波書店, 2020 クラウス・コルドン 作（酒寄進一 訳） NDL請求記号：Y7-N20-M166

15	『ぼくたちがギュンターを殺そうとした日』徳間書店, 2020 ヘルマン・シュルツ 作（渡辺広佐 訳） NDL請求記号：Y9-N20-M47
16	『ミスターオレンジ』朔北社, 2016 トゥルース・マティ 作（野坂悦子 訳, 平澤朋子 絵） NDL請求記号：Y9-N16-L187
17	『ワタシゴト　14歳のひろしま』汐文社, 2020 中澤晶子 作, ささめやゆき え NDL請求記号：Y8-N20-M491
18	『私はどこで生きていけばいいの？』（世界に生きる子どもたち）西村書店東京出版編集部, 2018 ローズマリー・マカーニー 文（西田佳子 訳） NDL請求記号：Y1-N18-L276

ジェンダー・LGBTQ

19	『兄の名は、ジェシカ』あすなろ書房, 2020 ジョン・ボイン 著（原田勝 訳） NDL請求記号：KS179-M608
20	『嘘の木』東京創元社, 2017 フランシス・ハーディング 著（児玉敦子 訳） NDL請求記号：Y9-N17-L193
21	『ウーマン・イン・バトル　自由・平等・シスターフッド！』合同出版, 2019 マルタ・ブレーン 文, イェニー・ヨルダル 絵（枇谷玲子 訳） NDL請求記号：Y1-N19-M393
22	『九時の月』さ・え・ら書房, 2017 デボラ・エリス 作（もりうちすみこ 訳） NDL請求記号：Y9-N17-L122
23	『サイモンvs人類平等化計画』（STAMP BOOKS）岩波書店, 2017 ベッキー・アルバータリ 作（三辺律子 訳） NDL請求記号：Y9-N17-L144
24	『ジュリアンはマーメイド』サウザンブックス社, 2020 ジェシカ・ラブ 作（横山和江 訳） NDL請求記号：Y18-N21-M155
25	『ジョージと秘密のメリッサ』偕成社, 2016 アレックス・ジーノ 作（島村浩子 訳） NDL請求記号：Y9-N17-L6
26	『その魔球に、まだ名はない』あすなろ書房, 2018 エレン・クレイジス 著（橋本恵 訳） NDL請求記号：Y9-N18-L215
27	『パンツ・プロジェクト』あすなろ書房, 2017 キャット・クラーク 著（三辺律子 訳） NDL請求記号：Y9-N17-L180
28	『変化球男子』（鈴木出版の児童文学　この地球を生きる子どもたち）鈴木出版, 2018 M・G・ヘネシー 作（杉田七重 訳） NDL請求記号：Y9-N18-L191
29	『ぼくのまつり縫い　手芸男子は好きっていえない』（偕成社ノベルフリーク）偕成社, 2019 神戸遥真 作, 井田千秋 絵 NDL請求記号：Y8-N19-M782

30	『moja』講談社, 2019 吉田桃子 著 NDL請求記号：Y8-N19-M431
31	『夜フクロウとドッグフィッシュ』（SUPER!YA）小学館, 2020 ホリー・ゴールドバーグ・スローン, メグ・ウォリッツァー 作（三辺律子 訳） NDL請求記号：Y9-N20-M115
32	『わたしは女の子だから　世界を変える夢をあきらめない子どもたち』西村書店東京出版編集部, 2019 ローズマリー・マカーニー, ジェン・オールバー, プラン・インターナショナル 文（西田佳子 訳） NDL請求記号：Y1-N19-M167
33	『わたしはフリーダ・カーロ　絵でたどるその人生』花伝社, 2020 マリア・ヘッセ 作（宇野和美 訳） NDL請求記号：KC355-M3（ILCL所蔵なし）
34	『ドレスを着た男子』福音館書店, 2012 デイヴィッド・ウォリアムズ 作, クェンティン・ブレイク 画（鹿田昌美 訳） NDL請求記号：Y9-N12-J178

障害

35	『木の中の魚』（講談社文学の扉）講談社, 2017 リンダ・マラリー・ハント 著（中井はるの 訳） NDL請求記号：Y9-N17-L200
36	『きみの存在を意識する』（teens' best selections）ポプラ社, 2019 梨屋アリエ 作 NDL請求記号：Y8-N19-M601
37	『くろはおうさま』サウザンブックス社, 2019 メネナ・コティン 文, ロサナ・ファリア 絵（うのかずみ 訳） NDL請求記号：YTZ1-M43
38	『マルコとパパ　ダウン症のあるむすことぼくのスケッチブック』偕成社, 2018 グスティ 作・絵（宇野和美 訳） NDL請求記号：Y1-N18-L60

社会

39	『エレナーとパーク』辰巳出版, 2016 レインボー・ローウェル 著（三辺律子 訳） NDL請求記号：KS169-L124
40	『強制終了、いつか再起動』講談社, 2021 吉野万理子 著 NDL請求記号：Y8-N21-M272
41	『MARCH 1』岩波書店, 2018 ジョン・ルイス, アンドリュー・アイディン 作, ネイト・パウエル 画（押野素子 訳） NDL請求記号：Y84-L64644
42	『MARCH 2』岩波書店, 2018 ジョン・ルイス, アンドリュー・アイディン 作, ネイト・パウエル 画（押野素子 訳） NDL請求記号：Y84-L64645
43	『MARCH 3』岩波書店, 2018 ジョン・ルイス, アンドリュー・アイディン 作, ネイト・パウエル 画（押野素子 訳） NDL請求記号：Y84-L66309

44	『むこう岸』講談社, 2018 安田夏菜 著 NDL請求記号：Y8-N19-M10
45	『路上のストライカー』（STAMP BOOKS）岩波書店, 2013 マイケル・ウィリアムズ 作（さくまゆみこ 訳） NDL請求記号：Y9-N14-L23
46	『わたしたちだけのときは』岩波書店, 2018 デイヴィッド・アレキサンダー・ロバートソン 文, ジュリー・フレット 絵（横山和江 訳） NDL請求記号：Y18-N18-L246

学校

47	『サイコーの通知表』（講談社文学の扉）講談社, 2021 工藤純子 著 NDL請求記号：Y8-N21-M290
48	『伝説のエンドーくん』小学館, 2014 まはら三桃 著 NDL請求記号：Y8-N14-L402
49	『一〇五度』あすなろ書房, 2017 佐藤まどか 著 NDL請求記号：Y8-N17-L735
50	『ホームメイキング同好会』理論社, 2016 藤野千夜 作 NDL請求記号：KH824-L1409（ILCL所蔵なし）
51	『リスタート』あすなろ書房, 2019 ゴードン・コーマン 著（千葉茂樹 訳） NDL請求記号：Y9-N19-M156

家族

52	『あたしが乗った列車は進む』（鈴木出版の児童文学　この地球を生きる子どもたち）鈴木出版, 2018 ポール・モーシャー 作（代田亜香子 訳） NDL請求記号：Y9-N18-L118
53	『海のアトリエ』偕成社, 2021 堀川理万子 著 NDL請求記号：Y17-N21-M950
54	『エリーゼさんをさがして』講談社, 2020 梨屋アリエ 著 NDL請求記号：Y8-N21-M102
55	『キャラメル色のわたし』（鈴木出版の児童文学　この地球を生きる子どもたち）鈴木出版, 2020 シャロン・M・ドレイパー 作（横山和江 訳） NDL請求記号：Y9-N20-M135
56	『シタとロット　ふたりの秘密』西村書店東京出版編集部, 2016 アナ・ファン・プラーハ 著（板屋嘉代子 訳） NDL請求記号：KS446-L4（ILCL所蔵なし）
57	『ジュリアが糸をつむいだ日』徳間書店, 2018 リンダ・スー・パーク 作（ないとうふみこ 訳, いちかわなつこ 絵） NDL請求記号：Y9-N19-M8

58	『THIS ONE SUMMER』岩波書店, 2021 マリコ・タマキ 作, ジリアン・タマキ 画, 三辺律子 訳 NDL請求記号：Y16-N21-M104
59	『拝啓パンクスノットデッドさま』（くもんの児童文学）くもん出版, 2020 石川宏千花 作, 西川真以子 装画・挿絵 NDL請求記号：Y8-N21-M3
60	『春のウサギ』小学館, 2021 ケヴィン・ヘンクス 作（原田勝, 大澤聡子 訳） NDL請求記号：Y9-N21-M82
61	『ほんとうの願いがかなうとき』偕成社, 2019 バーバラ・オコーナー 著（中野怜奈 訳） NDL請求記号：Y9-N19-M222
62	『りぼんちゃん』（フレーベル館文学の森）フレーベル館, 2021 村上雅郁 作 NDL請求記号：Y8-N21-M577
63	『レモンの図書室』小学館, 2018 ジョー・コットリル 作（杉田七重 訳） NDL請求記号：Y9-N18-L13

ブックガイド

64	『今すぐ読みたい！ 10代のためのYAブックガイド150！』ポプラ社, 2015 金原瑞人, ひこ・田中 監修 NDL請求記号：Y5-N15-L433
65	『今すぐ読みたい！ 10代のためのYAブックガイド150！ 2』ポプラ社, 2017 金原瑞人, ひこ・田中 監修 NDL請求記号：Y5-N17-L747
66	『13歳からの絵本ガイドYAのための100冊』西村書店東京出版編集部, 2018 金原瑞人, ひこ・田中 監修 NDL請求記号：Y5-N18-L156

日本の翻訳ヤングアダルト文学の現在

三辺　律子

ハリー・ポッターの大ヒット以降、「クロスオーバー・フィクション」、いわゆる大人の文学と子どもの文学の境界をこえて読まれる作品が増えてきている。実際、ヤングアダルト作品の読者の半数は大人だとも言われている。それは、ヤングアダルト作品が、常に社会の問題に即時に反応してきたことと関係あるだろう。

今回は、現在、特に注目すべき分野を 4 つ挙げ、実際にどんなものが書かれているかを具体的に紹介していく。

※カッコ内の数字は、原書の出版年を示す。

1　LGBTQ 文学

YA 文学では早くから描かれてきたテーマだが、当初は、周囲の無理解によるいじめなどの困難や差別に焦点を当てたものが多かった（異色だったものとしては、『**二つの旅の終わりに**』（チェンバーズ, 1999）と『**ウィーツィ・バット**』（リア・ブロック, 1989）のシリーズが挙げられる）。しかし、2010 年頃から、明らかに描かれ方が変わってきていると感じる。

『**ウィル・グレイソン、ウィル・グレイソン**』（レヴィサン＆グリーン, 2010）

LGBT をテーマにした作品では初めて、ニューヨークタイムズのベストセラーリストに載った作品。この 2010 年あたりから、セクシュアルマイノリティの描かれ方が変化してきたのではないか。

『**サイモン vs 人類平等化計画**』（アルバータリ, 2015）

「人類平等化計画（ホモサピエンス・アジェンダ）」――ゲイにカミングアウトが強制されるなら、ストレートの子だって同じようにカミングアウトしなきゃおかしいのではないか？　ゲイを特別視することへの疑問。

＊『**オン・ザ・カム・アップ**』（トーマス, 2019）、『**夜フクロウとドッグフィッシュ**』（スローン＆ウォリッツァー, 2019）、『**オリシャ戦記　美徳と復讐の子**』（アデイェミ, 2019）など、ゲイが特別な存在として描かれない作品も増えている。

Parrotfish（未訳、Wittlinger, 2007）

トランスジェンダーを描いた作品としては、大手の出版社で初めて出版。

性的指向に比べ、性自認にまつわるストーリーは、まだまだ差別と闘う話が多い。

The Art of Being Normal（未訳、Williamson, 2015）

If You Could Be Mine（未訳、Farizan, 2013）

『**ジョージと秘密のメリッサ**』（ジーノ, 2015）

『**ぼくがスカートをはく日**』（ポロンスキー, 2014）

『**パンツ・プロジェクト**』（クラーク, 2017）

『**兄の名はジェシカ**』（ボイン , 2019）

2　BLM運動を中心とした人種差別を描いた作品

『**ザ・ヘイト・ユー・ギヴ　あなたがくれた憎しみ**』（トーマス , 2017）
　白人警官による黒人の射殺事件を描く。
『**オール★アメリカン★ボーイズ**』（レノルズ＆カイリー, 2015）
　白人の特権について。
『**MARCH**』（ルイス , 2013, 2015, 2016）
　グラフィックノベルとして初の全米図書賞（児童文学部門）受賞。

3　フェミニズムのテーマを持つ作品

『**ダーウィンと出会った夏**』（ケリー, 2009）、『**嘘の木**』（ハーディング , 2015）
　過去の差別を扱った作品。
『**ザリガニの鳴くところ**』（オーエンズ , 2018）
『**侍女の物語**』（アトウッド , 1985）
『**パワー**』（オルダーマン , 2016）
＊日本では、YA文学が大人の本として出版されているケースも多い。フェミニズムの作品はまさにクロスオーバー＝境界をこえて読まれている。

　フェミニズム作品では、より“現代的なテーマ”を持つ作品の翻訳が待たれる。
Rules for Being a Girl（未訳、Bushnell, 2020）
He Must Like You（未訳、Younge-Ullman, 2020）
　同意の問題。性教育。
The Prettiest（未訳、Young, 2020）
　ルッキズムの問題。
Unpregnant（未訳、Caplan & Hendriks, 2019）
　中絶の問題。

4　散文詩形式／詩が大切な役割を果たしている作品

『**わたしは夢を見つづける**』（ウッドソン , 2014）
『**わたしの全てのわたしたち**』（クロッサン , 2015）
『**エレベーター**』（レナルズ , 2017）
『**詩人になりたいわたしX**』（アセヴェド , 2018）
『**オン・ザ・カム・アップ**』（トーマス , 2019）

　スポークンワードポエトリーやラップバトルなど、新しい世界を紹介しているものも多い。

5　今後の注目（おまけ）

The Mysterious Disappearance of Aidan S.（未訳、Levithan, 2021）
The Rest of Us Just Live Here（未訳、Ness, 2015）
　これまで「その他大勢」（主役でない）だった子どもたちを描いた作品。SNS時代と関係しているのでないか？

現在、どんなものが書かれているか、読まれているかを考えることで、YA文学の特質に迫ることができるのではないか。そこから改めて児童文学とは何であるかを考えていきたい。

紹介資料リスト

1	『二つの旅の終わりに』徳間書店, 2003 エイダン・チェンバーズ 作（原田勝 訳） NDL請求記号：Y9-N03-H252
2	『ウィーツィ・バット』（ウィーツィ・バットブックス）東京創元社, 1999 フランチェスカ・リア・ブロック 著（金原瑞人, 小川美紀 訳） NDL請求記号：KS152-G422（ILCL所蔵なし）
3	『ドレスを着た男子』福音館書店, 2012 デイヴィッド・ウォリアムズ 作, クェンティン・ブレイク 画（鹿田昌美 訳） NDL請求記号：Y9-N12-J178
4	『ウィル・グレイソン、ウィル・グレイソン』（STAMP BOOKS）岩波書店, 2017 ジョン・グリーン, デイヴィッド・レヴィサン 作（金原瑞人, 井上里 訳） NDL請求記号：Y9-N17-L73
5	『パンツ・プロジェクト』あすなろ書房, 2017 キャット・クラーク 著（三辺律子 訳） NDL請求記号：Y9-N17-L180
6	『まだなにかある 上』辰巳出版, 2015 パトリック・ネス 著（三辺律子 訳） NDL請求記号：Y9-N15-L123
7	『まだなにかある 下』辰巳出版, 2015 パトリック・ネス 著（三辺律子 訳） NDL請求記号：Y9-N15-L124
8	*One man guy*, Square Fish, 2016 Michael Barakiva ※NDL所蔵なし
9	『サイモンvs人類平等化計画』（STAMP BOOKS）岩波書店, 2017 ベッキー・アルバータリ 作（三辺律子 訳） NDL請求記号：Y9-N17-L144
10	『オン・ザ・カム・アップ　いま、這いあがるとき』（海外文学コレクション）岩崎書店, 2020 アンジー・トーマス 作（服部理佳 訳） NDL請求記号：Y9-N21-M39
11	『夜フクロウとドッグフィッシュ』（SUPER!YA）小学館, 2020 ホリー・ゴールドバーグ・スローン, メグ・ウォリッツァー 作（三辺律子 訳） NDL請求記号：Y9-N20-M115
12	『オリシャ戦記 PART2』（美徳と復讐の子）静山社, 2021 トミ・アデイェミ 著（三辺律子 訳） NDL請求記号：Y9-N21-M140
13	*Parrotfish*, 1st ed, Simon & Schuster Books for Young Readers, 2007 Ellen Wittlinger NDL請求記号：Y8-B7993
14	*If You Could Be Mine*, Algonquin Young Readers, 2013 Sara Farizan ※NDL所蔵なし
15	*The art of being normal*, David Fickling Books, 2015 Lisa Williamson NDL請求記号：Y8-B15417

16	*Only we know*, Piccadilly Press, 2015 Simon Packham NDL請求記号：Y8-B15521
17	『ジョージと秘密のメリッサ』偕成社, 2016 アレックス・ジーノ 作（島村浩子 訳） NDL請求記号：Y9-N17-L6
18	『ぼくがスカートをはく日』学研プラス, 2018 エイミ・ポロンスキー 著（西田佳子 訳） NDL請求記号：Y9-N18-L144
19	『兄の名は、ジェシカ』あすなろ書房, 2020 ジョン・ボイン 著（原田勝 訳） NDL請求記号：KS179-M608
20	『ザ・ヘイト・ユー・ギヴ　あなたがくれた憎しみ』（海外文学コレクション）岩崎書店, 2018 アンジー・トーマス 作（服部理佳 訳） NDL請求記号：Y9-N18-L55
21	『MARCH 1』岩波書店, 2018 ジョン・ルイス, アンドリュー・アイディン 作, ネイト・パウエル 画（押野素子 訳） NDL請求記号：Y84-L64644
22	『MARCH 2』岩波書店, 2018 ジョン・ルイス, アンドリュー・アイディン 作, ネイト・パウエル 画（押野素子 訳） NDL請求記号：Y84-L64645
23	『MARCH 3』岩波書店, 2018 ジョン・ルイス, アンドリュー・アイディン 作, ネイト・パウエル 画（押野素子 訳） NDL請求記号：Y84-L66309
24	『オール★アメリカン★ボーイズ』偕成社, 2020 ジェイソン・レノルズ, ブレンダン・カイリー 著（中野怜奈 訳） NDL請求記号：Y9-N21-M25
25	『エレベーター』早川書房, 2019 ジェイソン・レナルズ 著（青木千鶴 訳） NDL請求記号：KS179-M329（ILCL所蔵なし）
26	『わたしの全てのわたしたち』ハーパーコリンズ・ジャパン, 2020 サラ・クロッサン 著（最果タヒ, 金原瑞人 訳） NDL請求記号：KS179-M655（ILCL所蔵なし）
27	『詩人になりたいわたしX』小学館, 2021 エリザベス・アセヴェド 作（田中亜希子 訳） NDL請求記号：Y9-N21-M57
28	『わたしは夢を見つづける』小学館, 2021 ジャクリーン・ウッドソン 作（さくまゆみこ 訳） NDL請求記号：Y9-N21-M113
29	『嘘の木』東京創元社, 2017 フランシス・ハーディング 著（児玉敦子 訳） NDL請求記号：Y9-N17-L193
30	『世界を変えた100人の女の子の物語　グッドナイトストーリーフォーレベルガールズ』河出書房新社, 2018 エレナ・ファヴィッリ, フランチェスカ・カヴァッロ 文（芹澤恵, 高里ひろ 訳） NDL請求記号：Y3-N18-L96
31	『ブルーは熱い色』DU BOOKS, 2014 ジュリー・マロ 著（関澄かおる 訳） NDL請求記号：Y84-L22369（ILCL所蔵なし）

32	『スピン』河出書房新社, 2018 ティリー・ウォルデン 著（有澤真庭 訳） NDL請求記号：Y84-L62109（ILCL所蔵なし）
33	『好きな人に触れたくなるのは、どうして？　北欧に学ぶ恋愛とセックスの本』晶文社, 2020 サビーネ・レミレ 文, ラスムス・ブラインホイ 絵（枇谷玲子 訳） NDL請求記号：Y5-N20-M296
34	『禁断の果実　女性の身体と性のタブー』花伝社, 2018 リーヴ・ストロームクヴィスト 作（相川千尋 訳） NDL請求記号：EF91-M2（ILCL所蔵なし）
35	『わたしはフリーダ・カーロ　絵でたどるその人生』花伝社, 2020 マリア・ヘッセ 作（宇野和美 訳） NDL請求記号：KC355-M3（ILCL所蔵なし）
36	『ナタンと呼んで　少女の身体で生まれた少年』花伝社, 2019 カトリーヌ・カストロ 原作, カンタン・ズゥティオン 作画（原正人 訳） NDL請求記号：EF91-M19（ILCL所蔵なし）
37	*Rules for Being a Girl*, Macmillan Children's Books, 2020 Candace Bushnell; Katie Cotugno ※NDL所蔵なし
38	*The prettiest*, Roaring Brook Press, 2020 Brigit Young ※NDL所蔵なし
39	*Unpregnant*, HarperTeen, an imprint of HarperCollinsPublishers, 2019 Jenni Hendriks; Ted Caplan ※NDL所蔵なし
40	*He must like you*, Viking, 2020 Danielle Younge-Ullman ※NDL所蔵なし
41	『侍女の物語』（ハヤカワepi文庫）早川書房, 2001 マーガレット・アトウッド 著（斎藤英治 訳） NDL請求記号：KS151-G311（ILCL所蔵なし）
42	『エレナーとパーク』辰巳出版, 2016 レインボー・ローウェル 著（三辺律子 訳） NDL請求記号：KS169-L124
43	『ダーウィンと出会った夏』ほるぷ出版, 2011 ジャクリーン・ケリー 作（斎藤倫子 訳） NDL請求記号：Y9-N11-J242
44	『マーダーボット・ダイアリー 上』（創元SF文庫）東京創元社, 2019 マーサ・ウェルズ 著（中原尚哉 訳） NDL請求記号：KS179-M480（ILCL所蔵なし）
45	『マーダーボット・ダイアリー 下』（創元SF文庫）東京創元社, 2019 マーサ・ウェルズ 著（中原尚哉 訳） NDL請求記号：KS179-M481（ILCL所蔵なし）
46	*The mysterious disappearance of Aidan S. (as told to his brother)*, Alfred A. Knopf, 2021 David Levithan ※NDL所蔵なし
47	*The rest of us just live here*, Walker Books, 2015 Patrick Ness NDL請求記号：Y8-B15469

48	『ニッケル・ボーイズ』早川書房, 2020 コルソン・ホワイトヘッド 著（藤井光 訳） NDL請求記号：KS179-M884（ILCL所蔵なし）
49	『パワー』河出書房新社, 2018 ナオミ・オルダーマン 著（安原和見 訳） NDL請求記号：KS151-L123（ILCL所蔵なし）
50	『ザリガニの鳴くところ』早川書房, 2020 ディーリア・オーエンズ 著（友廣純 訳） NDL請求記号：KS179-M574（ILCL所蔵なし）

児童書に関するレファレンスサービス

福田　由香

1　国際子ども図書館のレファレンスサービス

2　国立国会図書館のデータベース紹介

（1）国立国会図書館オンライン
（2）国立国会図書館サーチ
（3）リサーチ・ナビ

3　国際子ども図書館のレファレンス事例

Literature for Today's Young Adults
Transcript of the ILCL Lecture Series on Children's Literature, 2021

Contents

Foreword MIURA Yoshifumi ····· 1

Introductory Notes ····· 2

Contents ····· 3

Lecture Programs ····· 4

About the Speakers ····· 5

Introduction SHIRAI Sumiko ····· 7

Into the World of Truth
- The Power of Literature and Worthwhile Reading in Life TOMANO Ittoku ····· 9

Surviving the Modern World
- What Does Young Adult Fiction Reflect, and How? SHIRAI Sumiko ····· 23

Past, Present and Future of Young Adult Fiction TANAKA Hiko ····· 41

Today's Young Adult Fiction Translations in Japan SAMBE Ritsuko ····· 61

Reference Service of Children's Books FUKUDA Yuka ····· 87

Reference Materials ····· 101

令和３年度国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座講義録
「今を生きるヤングアダルトへ」

令和４年９月15日　発行

発行　国立国会図書館
編集　国立国会図書館国際子ども図書館
〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
電話　03-3827-2053　FAX　03-3827-2043
印刷　株式会社　丸井工文社
〒107-0062　東京都港区南青山7-1-5

ＩＳＢＮ　９７８－４－８７５８２－８９９－０

本誌に掲載された記事を全文又は長文にわたり抜粋して転載する場合は、事前に国立国会図書館国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。

本誌のPDF版を国立国会図書館デジタルコレクション(*)で御覧いただけます。なお、訂正があった場合は、国立国会図書館デジタルコレクションに掲載いたします。

（＊）「国際子ども図書館児童文学連続講座講義録」<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/998628>